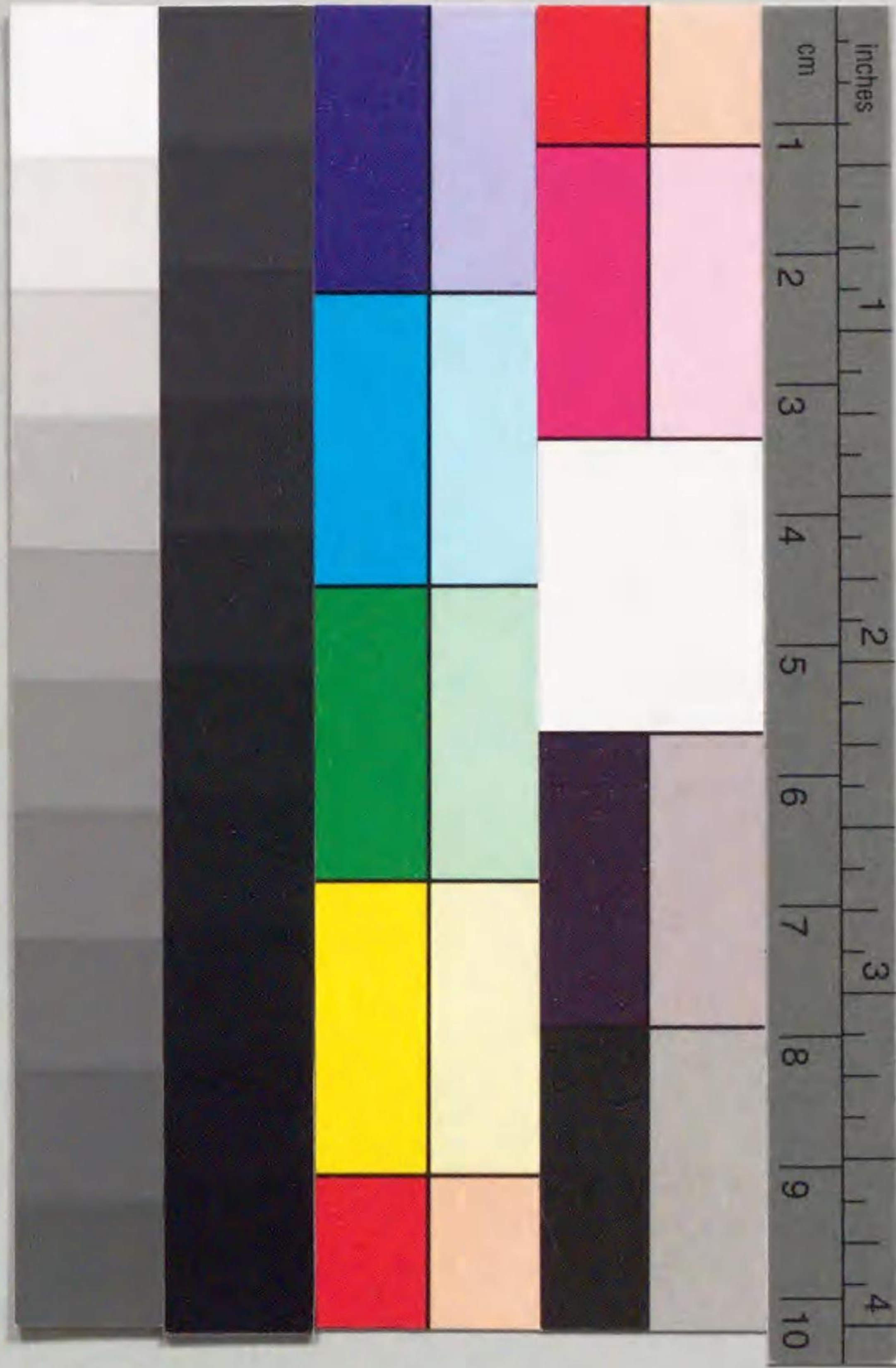


188.8
K0548
K



00289609

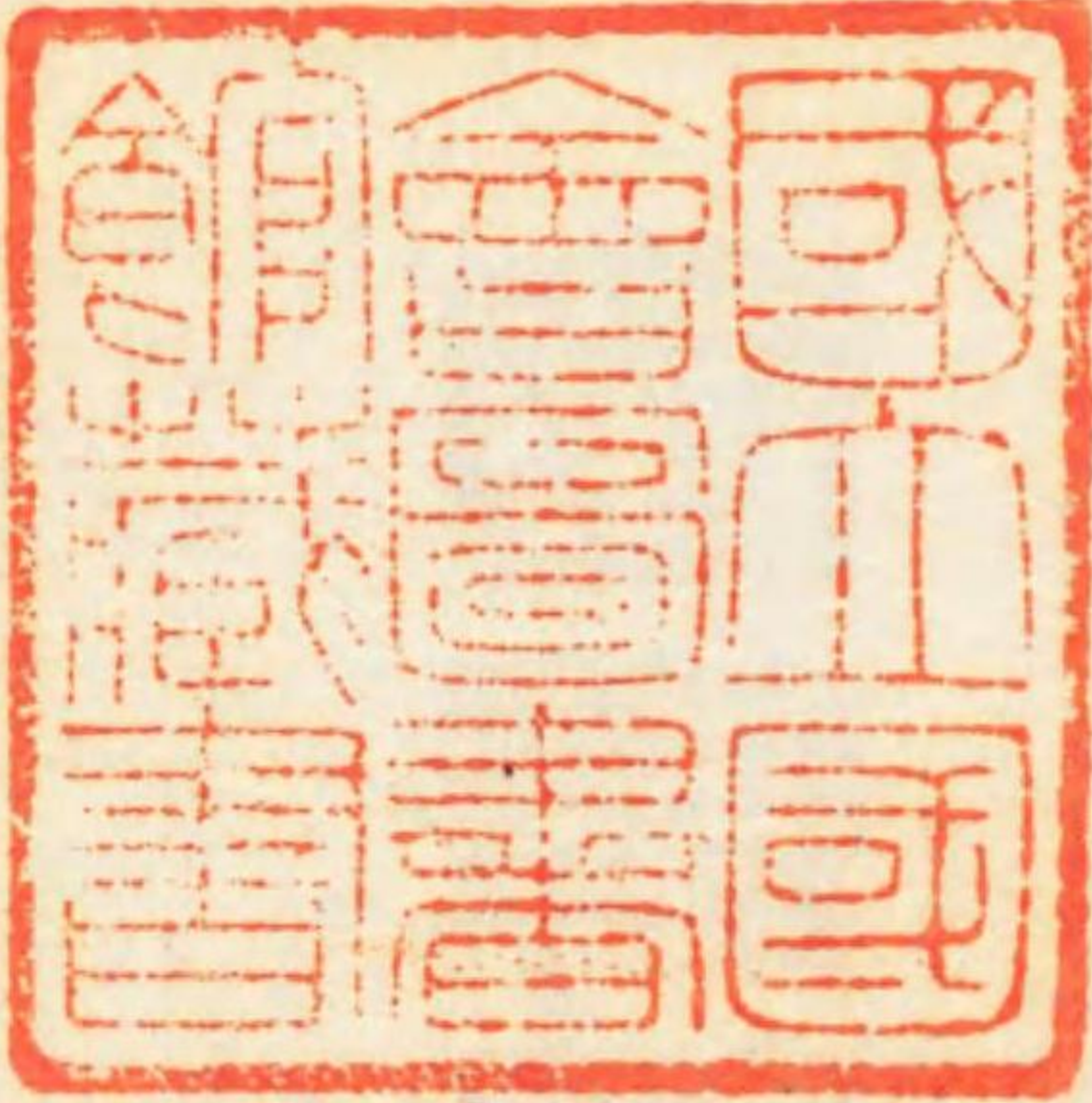
1
K





國譯禪學大成

第二十卷



289693

國譯禪學大成第二十卷凡例

一、本大成第二十卷に收載する所の書は、佛光圓滿常照國師語錄四卷及び五家參詳要路門一卷の二部五卷なり。

一、以上の中、佛光圓滿常照國師語錄は、略して『佛光國師語錄』、又は『佛光錄』とも稱し、鎌倉時代に來朝して、鎌倉圓覺寺の開山となりし無學祖元禪師の遺錄なり。本書は室町時代の貞治六年、初めて開板せられて以來、弘く禪林の間に行はれ、且つ數度の上梓を見るに到れり。乃ち慶安三年刊の一卷本、寶永二年刊の三卷本、寛文四年刊の六卷本、享保十一年刊の十卷本及び同年再刊の五卷本等あり。今次、國譯するに當り、享保再刊の五卷本中、附録（行狀、年譜、塔銘を載す）一卷を除いて、爾餘の四卷を譯註せり。

一、五家參詳要路門は、近代我が禪界の巨擘白隱禪師の神足、伊豆龍澤寺の東嶺和尚の編述する所のものなり。本書は禪門五家（臨濟、雲門、曹洞、潁仰、法眼）の宗要を詳論し、五派の要路各異なりと雖も、結局は一源に歸する所以を説き、以て參學入門の資糧に供したるものなり。附録に臘八示衆、看經榜の二篇を添ふ。而して本書は天明

七年の著作に係り、文政十年に至り、丹州法常皇寺の大觀和尚が校訂して上梓せしものなり。今次、國譯するに際しては、此の文政の刻本に據り、傍ら大觀和尚の稿本をも參照せり。

一、以上二部の書中、佛光録は、當時、來朝僧中に最も繁興せし佛光派の代表的著書にして、古來弘く叢社の間に愛讀せられしのみならず、今猶は數々提唱に供せらる。されば本書は國師の眼睛と其の詞藻とを窺ふに足ると共に、又鎌倉時代の禪風の一般と元寇の史實とを究めんとするには必須の書たり。五家參詳要路門に至りては、彼の五家の差別と其の根本とを徹見するに、之に越したる指南車はなく、且つ又之に依つて近代禪林に活を入れたる鶴林の禪風をも窺ふことを得べし。

昭和五年八月

編者 黃楊道人識す

國譯禪學大成 第二十卷

目次

國譯佛光圓滿常照國師語錄解題……………一一五

國譯佛光圓滿常照國師語錄……………一一二〇七

佛光圓滿常照國師語錄原文……………一一二八

國譯五家參詳要路門解題 一四

國譯五家參詳要路門序 一五

國譯五家參詳要路門 一五六

五家參詳要路門原文 一三五

國譯佛光圓滿常照國師語錄

解題

佛光國師は法を無準師範に嗣いで台州（今の浙江省臨海縣）の眞如寺に住し、元の至元十六年（我が弘安二年）北條時宗の聘に應じて來朝し、鎌倉建長寺に住す。尋で北條氏、圓覺寺を創するや、これが開山第一世となる。本録は乃ち此の三會の語要を集めたるものにして、編者は何れも師の侍者一眞、徳温、眞慧等なり。而して本録の刻本に數種あることは、既に凡例に於て述ぶるが如し。現時最も弘く世に流布するものは、享保十一年刊行の五卷本と十卷本となり。今此の兩者を比較するに、後者には普説小佛事、建長普説、法語、佛祖贊、偈頌、拾遺など、前者に無きものを可なり多く收載せり。是れ師の遠孫積隆、自穩等が、舊版を訂正増補して開板せしものなればなり。今次は頁數の都合などに因り、前者を採擇せり。而して其の内容を考察するに、第一卷には師が在宋當時の住山たる台州眞如寺語録を載せ、第二卷には拈古、禮祖塔、往來偈頌を録し、等三卷には來朝後の住山たる建長寺語録、第四卷には圓覺寺開山語録を收録せり。而も其の言句たるや、文辭淳深にして雅健、簡にして切ならず、麗にして浮ならず、其の偈頌に至つては、眞に詞林中、稀に見るの名手と謂ふべし。

我が國、禪宗の流傳二十四派の多きに及ぶと雖も、其の最も繁興したるは無準と松源の二派に如くはなし。佛光國師は乃ち此の無準の高足にして、東福寺開山聖一國師とは兄弟の間柄なり。而も其の下に佛光國師を出し、佛國の下に夢窓國師を生みて法脈次第に繁榮し、松源派の大應國師一派と共に、互に轡を並べて臨濟の禪風を天下に擧揚せり。されば本書は、此の佛光派を代表するの名著たるのみならず、又國師の眼睛を窺ふには唯一の好著たり。加之、本書は鎌倉禪風の一般と又當時の史實とを確むるに就いても重要なものの一と稱せらる。

師の傳を案するに、諱は祖元、字は子元、無學と號す。俗姓は許氏、支那明州慶元府（今の浙江省甌海道慶元縣）の人なり。父は伯濟、母は陳氏、南宋理宗皇帝の寶慶二年（我が後堀河帝の嘉祿二年、皇紀一八八六）を以て生る。七歳にして家塾に就いて書を讀み、強記群童に絶す。年十二にして父兄に隨ひて山寺に遊び、僧の「竹影掃階塵不動、月穿潭底水無痕」と吟するを聞いて、師懷に默契す。已に在俗の意なし。年十三にして父を喪ひ、秋七月、師兄に隨つて臨安府に之き、淨慈寺に投じて出家す。冬十月、住持北磻簡和尚を禮して落髮受具す。翌年徑山に登りて、佛鑑無準範禪師に見え、十七歳にして「狗子無佛性」の話に參じ、僧堂を出でざること五年、一夜、首座寮前の板聲を聞いて忽然として己事を發明す。即ち偈を作つて曰く、「一槌擊碎精靈窟、突出那吒鐵面皮。兩耳如雷口如啞、等閒觸著火星飛」と。無準に呈す。準少しく之を可となす。而して準亦示すに、香嚴擊竹の頌を以

てす。師契はず。既にして準示寂す。即ち靈隱に到りて石溪月禪師に見え、明年育王に往いて偃溪間に參す。再び徑山に上りて石溪に見ゆ。偶々松源の普説を閲して頌に所得を忘す。既にして鷲峯庵に往いて虚堂愚禪師に參扣す。虚堂一日、僧を送るの頌を師に示す、師熟看して曰く、「和尚、此の頌は都て是れ間説、中間都て些子の禪なし」と。堂頌子を拈起して云く、「這箇、響」と。師答へんと欲す。堂劈面に一揮す、師當下に脱然として省あり。翌年、觀物初に大慈寺に依り、持淨すること二年、一日井樓に登つて水を汲む、轆轤を牽動して大いに無礙の機用を發し、無準の向に示す所の香嚴擊竹の頌、狗子無佛性の話など斯に於て消息を絶す。時に師年三十六なり。

明年、邑宰羅季勉、東湖の白雲庵を以て師を招く。移りて母を養ひ、居ること七年、母亡して後、靈隱寺の退耕寧の鏡下に歸し、第二座に居る。咸淳五年秋、大傅平章賈似道の請により台州（今の浙江省臨海縣）の眞如寺の主となる。居ること七年、學者雲集す。徳祐元年秋、元兵、中國を騷す。師難を温州雁蕩山の能仁寺に避く。翌年、元兵、温州を壓す。衆皆逃竄すれども、師獨り堂中に坐して去らず。元兵、刃を以て師の頸に加ふ、師神色動ぜず、頌を述べて曰く、「乾坤無地卓孤筇、且喜人空法亦空。珍重大元三尺劍、電光影裏斬春風」と。衆兵之を聞いて、悔謝作禮して去る。次年、天童山に往いて法兄環溪和尚を訪ふ。環溪留めて第一座に居らしむ。時に我が建長寺席を虚しうす、副元帥北條時宗、書幣を具へて師を聘して東渡せしむ。是に於て師將に東航せんとするや、環溪、無準の法衣を以て

これに授く。五月、太白を離れ、六月、船に登り、八月太宰府に着く。是れ本朝の弘安二年なり。秋、鎌倉に下り、建長寺に入りて開堂演法す。北條時宗、その道化を仰高して遂に弟子の禮を執る。

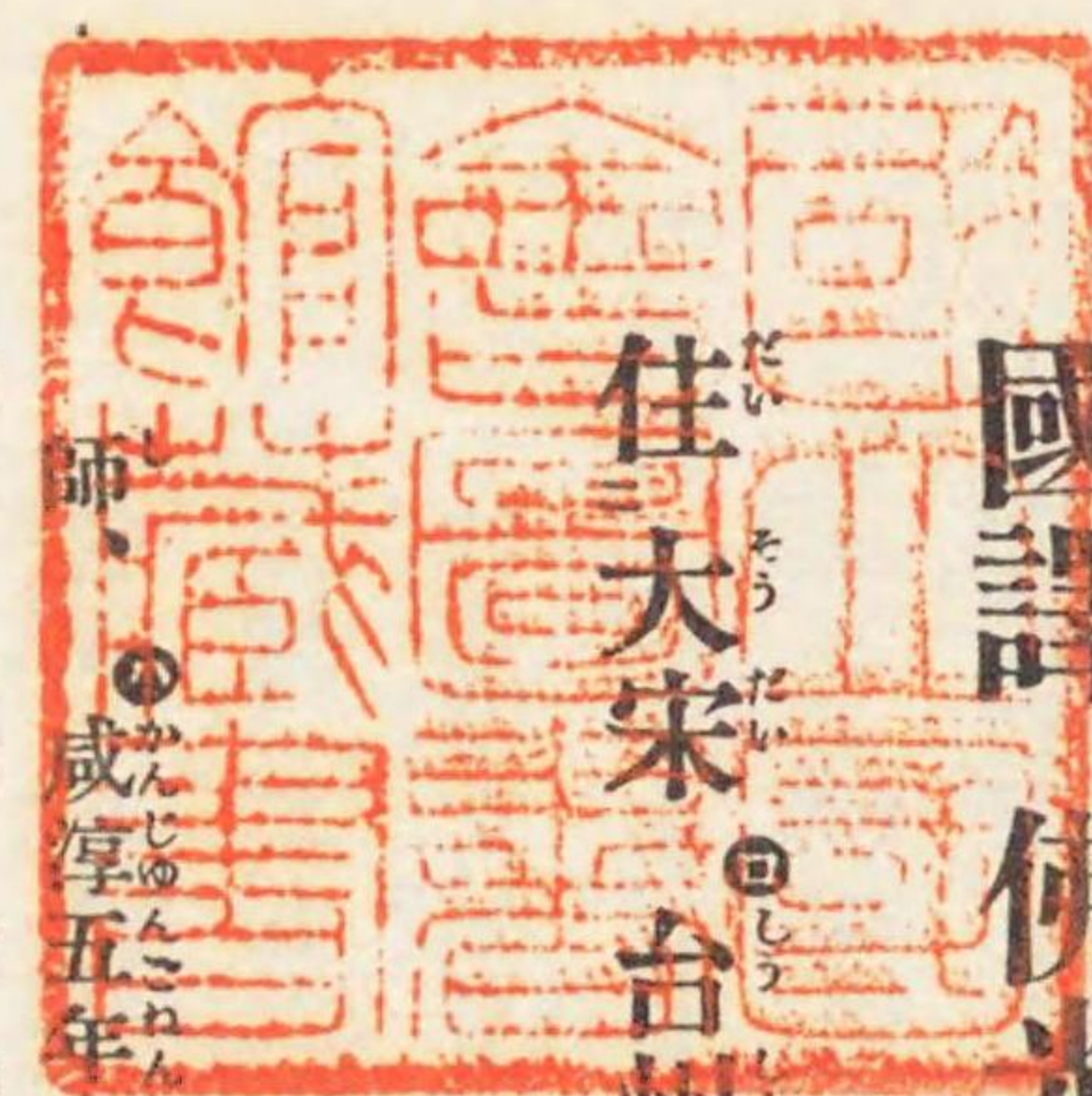
弘安五年冬、時宗、圓覺寺を創し、師を延いて開山始祖となす。開堂の日、群鹿筵に臨む、因つて師之を吉徴となし、瑞鹿山を以て名となす。學者臻り萃り、歡聲雷動し、生佛の應世に似たり。是れより先き、弘安四年の春、師、「莫煩惱」の三字を書して時宗に呈す。時宗曰く、「是れ何の言句ぞ」と。師曰く、「春秋の交、博多騷擾せん。而も日ならずして靜謐せん。公慮とすること勿れ」と。果して五月、元兵壹岐を侵し、翌月太宰府を犯す。閏七月、元軍の千艦、風濤のために覆没す。時宗問うて曰く、「和尚何を以てか之を先知すや」と。師笑つて曰く、「二年を過ぎなば、太守に説くべし」と。後三年、即ち弘安七年四月、時宗俄かに卒す。師歎じて曰く、「吾が宗の外護、云に亡ぶ。正法を興すものは誰ぞ」と。未だ幾ならざるに、鼓を鳴して遽かに圓覺を退き、建長に歸る。檀越屢請へども固く辭して從はず。秋に至りて疾を示す、自悼の頌七首を作る。八年夏大いに旱す。新太守貞時、師に請うて雨を祈らしむ。乃ち甘雨沛然として降ること三日、歳大いに稔る。九年夏、庭前の桂橋、故なくして枯る。左右駭然たり。師曰く、「吾れ將に逝かんとす」と。九月三日、手づから遺書を記して將軍及び故舊に別る。晩に至りて偈を書して衆に示して曰く、「諸佛凡夫同是幻、若求ニ實相、眼中埃。老僧舍利包ニ天地、莫向ニ空山撥。冷灰上」と。夜三更に至り、衣を易へて端坐し、筆を索めて偈を書して云く、「來亦不前、去亦不

後。百億毛頭師子現、百億毛頭師子吼」と。筆を置いて泊然として寂す。壽六十一、僧臘四十九。龜を留むること三日、靈骨を同寺の後麓に藏む。勅して佛光國師と諡す。光嚴帝、更に號を圓滿常照國師と賜ふ。弟子を度すること三百、就中、一翁院豪、高峯顯日、白雲慧崇、規庵祖圓、太古世源、雲屋慧輪、耕叟仙原、見山崇喜、大用慧堪、雄峯奇央等は膝下の麟鳳たり。



國譯佛光圓滿常照國師語錄卷一

住天宋台州真如禪寺語錄一



侍者一眞編

師、咸淳五年十月初二日に於て、臨安府靈隱の首座寮、尙書省の筭差請を被り、真如禪寺に住持す。衆の勸請を受け、衆に對して拈筭。筭を呈起して云く、「朝廷に在つては、之を宣布號令と爲し、山僧に在つては、之を提持の鈿斧と爲す。印文已に聲前に在り、諸人自ら緇素を分て。」

此の月二十日、入院、山門を指して云く、「大衆、只だ諸人が臂を掉

國譯佛光圓滿常照國師語錄 卷一

①佛光。諱は祖元、字は子元、別號は無學、宋の明州慶元府鄞縣の官族許氏、父は伯濟、母は陳氏、無準師範に嗣ぐ、日本に東來せしは後宇多天皇の弘安二年八月二十日、翌二十一日入院建長、宋の帝昺祥興二年、元の世祖至元十六年、この年宋亡ぶ、日本にてはその前年七月二十四日、建長開山蘭溪大覺禪師寂す、東福開山聖一國師の寂せしは翌年にして、元寇の二年前なり、師

は弘安元年九月三日寂す、世齡六十有一、勅して佛光國師と諡す、北朝の光嚴天皇、重ねて圓滿常照國師と賜ふ。

②台州眞如。大傳賈秋壑、聘請す。

③咸淳五年。南宋の度宗の年號、日本の龜山天皇文永六年なり。

④靈隱。師の傳に「靈隱の寧退耕の鎭下に歸して、第二座に居す」とあり。

⑤首座寮。叢林の第一座、則ち

つて直入し、臂を掉つて直出せんことを要す。切に平地上に向つて、自ら門限を立つることを得ざれ。喝一喝。

佛殿を指して云く、「天上天下、唯吾獨尊、爾既に錢あれば客を留めて酔はしむ。我れ寧ろ馬に騎つて、人の門に傍はんや。香を以て爐を扣くこと三下して云く、「瞿曇莫怪、空疎。」

據室、横に拄杖を按じて云く、「擊石火、啐啄の機、二十九十八、鳳林吒枝。」

江湖疏を拈じて云く、「我れを貶すこと太だ妍、我れを褒むること太だ醜。魚は謝郎が船に在り、劍は飯人の手に握る。」

法座を指して云く、「機、機を奪ひ、毒、毒を攻む、珍重す燈王如來、猛虎伏肉を食せず。」

此の一瓣の香は、恭しく爲に祝延したてまつる。

今上皇 帝聖壽無疆、伏して願はくは長く九五の尊として、正に文武の統を傳へたまはんことを。

此の一瓣の香は、爐中に燕向して、仰いで太傅平章相國公を祝す。伏して願はくは邦國の雄基を闢開し、太平の事業を康濟せんことを。此の一瓣の香は、仰いで判府待制侍郎、關郡尊官を祝す。伏して願はくは高く祿位を躋り、永く明時を佐けんことを。座に就く。僧問ふ、「一佛出世地、金蓮を涌す、和尚出世何の祥瑞かある。」師云く、「天上天下。」進んで云く、「祝、聖の一句、作麼生か道はん。」師云く、「華山青岌岌。」進んで云く、「如何なるか是れ和尚親切爲人の處。」師云く、「我れに鉢水なし、汝針を投ずること勿れ。」進んで云く、「便ち是れ和尚爲人の處なること莫しや。」師云く、「拂却す古巖の雪。」僧禮拜す。乃ち云く、「化育の本、黨なく偏なく、佛祖の源、彼なく此なし。歴歴として象外に清標たり、堂堂として寰中に樞運す。織洪長短、各其の宜しきを得たり、春夏秋冬、適として可ならざるはなし。用、狸奴白牯に在り、功、露柱燈籠に歸す。」

大衆の首位に居る人の寮舎、多年遍參の功成りて大事了畢の者を以て任ずるの職なり、六頭首の一。
① 尚書省。史官なり、天子の言行を記す官省なり。
② 差請。差はつかはすと讀む、請は請待のこと。
③ 拈割。割は鍼を以て刺すなりと註す、正字通に機割用つて以て事を奏す、表に非ず、狀に非ざるものか割子といふ、教令又は上書の一體なりと、又は録子ともいふ。
④ 宣布令。天子の詔令をふれ出すこと。
⑤ 鈿斧。提持は住山の規範を提唱把持するなり、鈿斧は斧のこと、一大事因縁を鈿斧子といふ、荊榛を截斷する器なれば、古昔の宗師、その弟子に住山を許す時の信表となすこと。

① 印文。印は信なり、許な、たとへば石の玉丸蓋んで玉の潤はざるが如し。
② 聲前。音聲未發以前の一句の意にて、三世諸佛出世以前の句、又思慮分別を絶したる那一句なり。
③ 緇素。緇は黒、素は白なり、僧と俗と、又は善惡の意に用ふ。
④ 直入。直下證入の義。
⑤ 平地上。無用の事のこと。
⑥ 有錢。錢あらば馳走するのは自分の任意じや。
⑦ 傍入門。袖乞ひはせぬ。
⑧ 空疎。無あしらひのこと。
⑨ 擊石火。閃電光の對句にして極めて僅かなる時間、又は非常に機敏の意に用ふ。
⑩ 啐啄機。學人と師家との機機投合するにたとへる。
⑪ 鳳林吒枝。前に出づ。
⑫ 魚在謝郎。謝は玄沙、飯は首

切り役人。
① 猛虎。識心をいふ。
② 九五。天子の位なり、易卦に下より數へて、五つ目の陽爻の稱。
③ 雄基。天下の基業なり。
④ 闢。残らす。
⑤ 明時。太平の時節。
⑥ 涌金蓮。地を去る四指云云。
⑦ 華山。太華山なり、岌岌は高きこと。
⑧ 我無鉢。おれにも鉢がないが、われもむだ錢をつかふなよと。
⑨ 化育。天地の化育の本源はこれ以上より下に被らしむる、徒黨も偏倚もないと。
⑩ 源。本源なり。
⑪ 無彼。水銀無銀、阿魏無魏となり。
⑫ 用。作用なり、功は勳なり。
⑬ 露柱。牆壁瓦礫も。
⑭ 備々。ふらりなり、顯々は大

● 龍僮伺伺、顛顛預預、便ち見る清寒帶劍の客を卻け、度關鷄鳴の人なきことを。然りと雖も衲僧家、能く幾箇あつて、慚を知り愧を識る。千車合轍し難し、萬派自ら朝宗。「叙謝録せず。」

● 復た寶壽開堂、三聖、一僧を推し出すの公案を擧す。拈じて云く、「三聖、佛面に向つて金を剃ぎ、他の寶壽多少の光彩を添ふ。眞如が拄杖、也た多きことを較べず、只だ是れ人の喫することを解するなし。」

● 當晩小參、僧問ふ、「麟龍瑞を爲さず、草木光輝を生ずる時如何。」師云く、「渭川釣客なし。」進んで云く、「璞を抱いて師に投ず、請ふ師一鑑。」師云く、「南北東西何の限りかあらん。」乃ち云く、「宗門を提唱することは、須らく滴水氷を生ずる處に向つて、身を轉得して、方にはれ衲僧の巴鼻なるべし。有る底は一向に照と説き用と説き、有る底は一向に妙と説き玄と説き、有る底は一向に懸崖峭壁、有る底は一向に石火電光。斯の如きの擧唱、甚の交渉かあらん。山僧三十年行脚、東風西水、南去北來、固に是れ長鞭馬腹に搆らず、曾て天津橋上に向つて、晝官更を打す。然りと雖も、玉解連環易、珠穿九曲難。」

● 擧す、平田、茂源和尚を訪ふ、源纒に身を起す、田把住して云く、「開くときは則ち失し、閉づるときは則ち喪す、此の二途を去つて、請ふ師別に道へ。」源、手を以て鼻を掩ふ。田云く、「一步は較易く、兩歩は較難し。」源云く、「甚の死急をか著く。」田云く、「若し是れ師にあらずんば、泊んど諸方に檢責せられん。」拈じて云く、「平田兵を礪して馬に秣ふ。將に謂へり萬里勝つことを決して還ると。茂源一鍬未だ施さず、甚に因つてか羊を牽き壁を納る。」喝一喝。

● 華書記を謝する上堂、大方外なく、大圓内なし。海月山雲、面面相對す。昨夜東風北風に轉ず、遼空一鍬三關の外。

● 冬節小參、僧問ふ、「一陽來復の時如何。」師云く、「六六依然として三十六。」進んで云く、「和尚順水に帆を張ることを解して、逆風に柁を把ること。を缺く。」師云く、「若し諸方に到らば、但だ與麼に擧せよ。」乃ち云く、「冬至月頭なれば被を賣つて牛を買ふ、冬至月尾なれば牛を賣つて被を買ふ。今年節令稍遅し、諸人と相見せんことを要す。故に敢て手を出し脚を露さず。謾に洞山の果子と説かば、牙齒先つ寒し、更に皓老の布棍と説かば、毛髮俱に豎つ。是れ善く機に隨はざるにあらず、只だ曾て霜雪を経るが爲なり。然りと雖も、千金の資あれば、千金の病あり、萬里の智なければ、萬里の憂なし。休みね休みね、言ふこと莫れ、李廣、侯に討せられずと。曾て藍田に向つて石頭を射る。」上堂、「大功不宰、掩息灰の如し。懸崖絶壁、枯木華開く。」良久して、「雨餘人不道、日影落三蒼苔。」

面をして、人を輕蔑するなり、しさいらしいかほをいふ。

● 寶壽。沼、臨濟に嗣ぐ。

● 三聖。然、同上。

● 不較多。三聖行くこと一尺、この眞如行く、こ一寸と。

● 草木。一莖艸を以て、丈六の金身となす。

● 南北。おれがやうなるたへもの、澤山あるとなり。

● 長鞭。とかく痒處にとどかぬと。

● 天津橋上。俗例の漢をさす、官更は時刻をうつ官の時間計。

● 平田。普峯、百丈海に嗣ぐ。

● 茂源。孝養空に嗣ぐ、空は丹霞然に嗣ぐ。

● 華書記。不詳なり。

● 洞山。洞山の果子、前に見ゆ。

● 皓老。玉泉の布棍、これも前に出づ、毛髮俱に豎つとはおそろしいといふこと。

● 李廣。此の故事、前に見ゆ。

臘八上堂、「今朝臘月八、瞿曇不丈夫、端なく黃と説き黒と道ひ、鬼を諱し神を瞞す。知らず當初甚の冬瓜・茄子・瓠子・落蘇をか見る。」卓拄杖、「早く知る今日の事、悔ゆるは當初を愼まざることを。」古田屋西堂を謝する上堂、乍住深山の破院、客を見て事事乖疎。祥符尊屬到來すれば、轉た覺ゆ臂長うして袖の短きことを。略東山の暗號を展ぶ、如何ぞ仰面して天を看る。話して中峰の沙盆に到つて、又卻つて低頭して地を觀る。眞如、直に是れ歡喜不徹、手に就いて他と與に西河の獅子を一捻し、彼此且く一班を弄す。

上堂、「有句無句は、藤の樹に倚るが如し、赤脚にして刀山に上り、披毛にして火聚を行く。」喝一喝して下座。

歲除小參、僧問ふ、「年窮り歳盡く、事作麼生。」師云く、「八角の磨盤空裏に走る。」進んで云く、「和尚漏逗少からず。」師云く、「明朝又是れ大年朝。」僧禮拜す。乃ち云く、「舊年の佛法新年、將ち去らず、新年の佛法舊年挽けども來らず。挽き來らず將ち去らず、朕兆を絶する處、切に忌む承當することを。棲泊すること勿れ、時に亂走することを得ざれ。如是如是、無端無端、不是不是、大難大難、卓拄杖一下して、「火官頭上風車轉じ、迦葉門前刹竿を倒す。」

北禪和尚、露地の白牛を烹るの公案を擧して、拈じて云く、「北禪好語、只だ是れ飽病醫し難し、

- 古田。德軍は斷橋倫に嗣ぐ、無準三世なり。
- 臂長。どちらへもひきたらぬ、修行に難行して瘦せ衰へたるをいふ。
- 沙盆。破れすりばち。
- 將。異本には「推」に作る。
- 火官頭上。方語に推さすし、自ら轉す。
- 北禪。前に出づ。

新正上堂、元正啓旦、和氣藹然、燈籠笑ひ得て口潤く、露柱拜し得て膝穿つ。甚に因つてか此の如くなる、義は豊年より出づ。新舊兩班を謝する上堂、開正方に十日、氣象一齊新なり。東邊の知事も也た新なり、西邊の頭首も也た新なり。忽ち人あつて出て來つて道はん、新なることは則ち新なり矣、爭奈せん猶ほ是れ舊時の面目なることをと。唱へ來つて唱へ去らず、一擧一回新なり。

元宵上堂、燈火空を燒く、時三五に當る。處處連街接巷、舞ふ底は舞ひ、吹く底は吹き、唱ふる底は唱へ、拍する底は拍す。然も是の如くなりと雖も、左右を顧視して、且く道へ、眞如が面皮厚きこと多少ぞ。毒果・空海の二首座を謝する上堂、「佛祖の巴鼻、人天の眼目、空中の印の如く、毒樹の果の如し。一印一切印、一殺一切殺。」卓拄杖。上堂、我れに一句あり、四角六張、靴を穿つて水上に立ち、日午三更を打す。

- 膝穿。ひざがしらの出た袴を著げた。
- 義出。家々が富貴だと客が多
- 知事。今の執事なり。
- 頭首。六頭首あり。
- 毒果空海。未詳なり。
- 銷菑會。消災の祈禱法、要に香を燒く。駱駝は香なり。
- 空中有。諸の所有を空す。
- 性空。第一義空なり。

銷菑會、駱駝を燒く。秉炬の偈、吉祥災疫性本空、虛谷の衆響に答ふるが如くなることあり。衆響高低聞かずといふこと靡し、其の蹤由を詰るに了に跡なし。汝が身本自ら、空中の有、能く、性空廣大の力を具す、廣大無邊有情を利す、還つて性空を運して災歿し去る。亦復た放出す三昧の光、

一切の毛畜類を照見す。衆生本際の情を動せず、種種如幻の事に游戲す。我れ今偈を説いて證明を

作す、天龍八部皆歡悦す、稽首す如來大願王、成就す一切の諸善法。

上堂、法に定相なし、縁に遇ふて即ち宗、者裏鹽賤く米貴く、那邊水溢ひ柴豊なり。李華は白く桃

華は紅。牛頭は自南し自北し、馬頭は自西し自東す。何ぞ似かん東山の大脱空。

上堂、是れ目前の法にあらず、耳目の到る所に非ず。寒山子行くこと

太だ早く、十年歸ること得ざれば、來時の道を忘卻す。

佛涅槃上堂、擧す二世尊、衆に告げて云く、「若し吾れ滅度と謂はば、吾

が弟子に非ず、若し吾れ不滅度と謂はば、亦吾が弟子に非ず」と。黄面瞿

曇、雜劇打了、戲衫を把つて呆底に脱與せんことを要す。吾れ當時若し

見ば、他の與に一踏に踏倒して、他の身を轉せんを待つて、更に一踏を與

へん。一做らざれば二休せず、寸釘木に入る、熱熬油を添ふ。休みね休み

ね休みね。」卓拄杖、「大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし。」

啓建、壽崇節上堂、天下に母儀として、重華を育す、千歳の蟠桃一華を著く、縹緲たる玉樓天漢

直く、袞衣長く捧ぐ七香車。

乾會節上堂、法身蕩蕩、復た巍巍、吾が

皇福壽の基を培作す。指を按ずれば光中塵到らず、四河の香水須彌を遶る。

上堂、應庵、桃華を詠じ、靈雲、桃華を悟る、等しく是れ與麀の時節。一家一家を知らず、且

く道へ、眞如が意何くにか在る。圖らざりき草を打てば、只だ蛇を驚かさ

んことを要す。

- ① 如幻。三昧なり。
- ② 諸善法。大衆信受奉行。
- ③ 寒山子。これは寒山子の極秘の境界なり。
- ④ 戲衫。鶴奥布衫なり。
- ⑤ 壽崇節。皇后の壽節。
- ⑥ 重華。民をいふ。
- ⑦ 袞衣。袞龍の衣なり。
- ⑧ 乾會節。天子の壽節。

- ① 四河。一に碗河、二に尼連、三に信度、四に私阿。
- ② 應庵。曇華、虎丘に嗣ぐ。
- ③ 靈雲。志勳禪師。
- ④ 一念普。三世古今當念を出てすとなり。
- ⑤ 諸方便。三世古今。
- ⑥ 十力。佛を稱す、如來證得の智は、一切に了達して、よく之を壞する者も勝つ者もなきが故に、力となづく、これに十種あり、今之を略す。
- ⑦ 因也。娑婆來往八千返。
- ⑧ 果也。三十二相八十種好。
- ⑨ 悟也。寂滅道場。
- ⑩ 卽如是座。見聞に充つることなくして。

一絲頭を減すること得ず。便ち見る。三祖、二祖に問ふ、「弟子が身、風恙に纏はる、乞ふ師、懺罪。二祖云く、『罪を將ち來れ、汝が與に懺せん。』三祖云く、『罪性を覓むるに了に不可得なり。』二祖云く、『已に汝が與に懺非し竟んぬ。』此の際に當つて、世醫手を拱して、萬病脱然、風の空に行くが如く、水の壑に赴くが如く、渡に船を得るが如く、暗に燈を得るが如く、睡夢の覺むるが如く、蓮華の開くが如し。造作すること得ず、裝點すること得ず、便ち是れ具足三昧を證する時節なり。何の罪か懺すべく、何の福か求むべきあらん。千佛出世、是の如くの印を以て、是の如くの心を印し、印印相承して今日に到る。此の印を將つて印破して、普く業障疑團を超えんことを要す。」卓拄杖、「鏡圍山岳都べて崩盡し、歷劫の無明一掃空す。」

結座、罪性本來空、四大も亦復た然り。普く風恙に纏はることを超ゆ、設供罪根を懺す。罪根無所住、只だ一念の中に在り。此の金剛王に仗つて、大疑網を裂破す。稽首す。三界の尊、賜ふに大安樂を以てす。此の無上道を證して、永く諸有の苦を超ゆ。

州府滿散、壽崇節降座、「大いなる哉。法性、號して心王と曰ふ。之を仰

ぐに其の表を觀ること莫く、之を窮むるに其の邊を見ること莫し。超然として六合の上に出て、混然として萬化の中に融す。壽は數を以て計ふべからず、福は數を以て量るべからず。蕩蕩として三際に廓周し、恢恢として十方に通徹す。天地の母と作り、橐籥の宗と爲る。譬へば太虚の俱に衆象を含んで、一切と和會せず、亦彼の衆象の發揮を拒まざるが若し。此れは是れ諸佛の妙門、正に聖人の化體に合す。「拂子を撃つて、「只だ天の並に堪ふるあり、更に山の齊しうすべきなし。」

結座、后土、休を儲けて幾千載ぞ、夢月の昌期今日に在り。臣僧仰祝す福壽の基、是れ世間聞見の法にあらず。浮幢王刹廣無邊、劫火三災壞すること能はず。此れは是れ諸佛三昧の境、願はくは聖人の福も亦是の如くならんことを。天上の磐石四十里、仙衣三千年に一拂、拂石銷する時一劫と爲す。願はくは聖人の壽も亦是の如くならんことを。稽首す十方三界の尊、成就す聖人如是法。永く皇圖を輔く億萬年、金輪統御す大千界。結制小參、僧問ふ、「如何なるか是れ圓覺伽藍。」師云く、「門を出でて戸に入らず。」進んで云く、「如何なるか是れ平等性智。」師云く、「東行、西行の利を見ず。」乃ち云く、「蜀魄連宵に叫び、鷓鴣終夜啼

- ①三祖。僧肇大師。
- ②二祖。慧可大師。
- ③裝點。前支度のこと。
- ④具足三昧。一と走らしめ、七と拈得すなり、舉手動足に於いてなり。
- ⑤結座。滿散なり、最修の法要。
- ⑥設供。設齋供養。
- ⑦罪根。衆罪根性。
- ⑧大疑網。譬中の明珠。
- ⑨三界尊。佛世尊。
- ⑩法性。心地は物として生ぜずといふことなし。
- ⑪六合。東西南北上下四維。
- ⑫萬化。大と爲り、小と爲る。
- ⑬天地之母。萬物の根柢となす。
- ⑭橐籥。莊子の語なり。
- ⑮與一切。諸界に入つて諸境に染ます。
- ⑯后土。土の神のこと。
- ⑰儲休。休は否、儲は國家を護持す。
- ⑱浮幢。これが夢月の昌期。
- ⑲三災。風火水の三災。
- ⑳三昧境。正受、自受、用他受用。
- ㉑福。福智のこと。
- ㉒壽。眉壽長久。
- ㉓蜀魄。ほととぎすのこと。
- ㉔鷓鴣。鷓鴣「たどり、又は「えびすやめ」といふ。北方の砂漠に産する小鳥なりと。鷓は「よしはらすすめ、又は「てうせんうぐひす」ともいふ。

く。圓通門大いに啓く、何事を雲泥を隔つ。甚麼の雲泥を隔つとか説かん、我が者裏直に得たり、聖凡俱に泯し、水乳和同することを。菩提涅槃、眞如解脱、業識無明、顛倒妄想、一絲毫の同相なく、一絲毫の別相なし。九十日の中、只だ諸人は是の如く禁足し、是の如く護生せんことを要す。水洗つて面皮光り、茶を飲つて背を濕却す。南山華映す北山の紅、東澗水流る西澗の水。然も是の如くなりと雖も、甚に因つてか觀世音菩薩、錢を將つて胡餅を買ふ、手を放下すれば卻つて是れ饅頭。卓拄杖、「人、遠き慮なれば、必ず、近き憂あり。」

擧す、僧、雲門和尚に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門云く、「東山水上行。」頰に云く、「東山水上行、面南看北斗、眼上更安眉、烏藤劈脊樓。」

上堂、絲來り線去る、斬丁截鏡、百丈耳聾、黃檗吐舌。

上堂、參禪貴ぶらくは眼皮穿たんことを要す、百尺の竿頭、正偏勿し。

上堂、寒の時は閻梨を寒殺し、熱の時は閻梨を熱殺す。者裏鼠を趁つて角に入れ、那邊賊の與に梯を過す。禹力到らざる處、河聲流れて西に向ふ。

- ①護生。殺生せぬこと。
- ②遠慮。實參實悟を要すといふことなり。
- ③近憂。早く隻手の聲をきけよとなり。
- ④烏藤。杖子をいふ。
- ⑤絲來線去。絲買が來ると線香賣が去ると。
- ⑥釘なり。難問に答ふるると、名劍の物を截るが如きなふ。
- ⑦耳聾や吐舌の案をいふ。
- ⑧正偏。照用なし、却來向去す。

上堂、「我が東山下の説禪は、上將軍の兵を用ふるが如く、一般なり、號令を明宣せず、也た金鼓を羅列せず。顔良が頭、知らず覺えず已に袖裏に在り、盡大地の人只だ眼を眈得す。」卓拄杖して下座。

上堂、東東西西、絡絡索索、一時に抖擻して諸人に説與し了れり也。未審し那一句の中に在つて吾れを見る。若し句、言外に在り、意、聲前に在りと道はば、山僧、拔舌地獄に入らん。

上堂、眞如が説禪、且く草を積んで糧を聚めず、東頭を移して西頭に向ひ、南頭を移して北頭に向ふ。諸人若し、封皮を將つて信傳と作さば、卻つて山僧を怪むこと得ず。

上堂、大火西に流れ、長江東に去る。風動き塵起り、雲騰り鳥飛ぶ。顧視良久して、幕に拄杖を拈じて、卓一下して、「舊に依つて是れ備にして始めて得ん。」

解制小參、山前一片の閑田地、叉手叮嚀祖翁に問ふ、幾度か賣り來り還つて自ら買ふ。爲に憐む松竹の清風を引くことを。眞如、二百年後に生れて、只だ一句と作して諸人に分付せん。我が此の一衆、徹證分曉する底あらば、出で來つて衆に對して、四至界畔を點當して表を看ば、九十日功成り行滿

- ①顔良。皆皆が護布、鼻繩も短刀を取り上げて、喪禮袴を著せる。
- ②抖擻。除去なり。
- ③拔舌。勝斯經、故獲罪如是。
- ④封皮。藥の功能書。
- ⑤大火。陽精のことなり。
- ⑥四至。四方の地の界なり。
- ⑦牛馬。村田の牛馬で、祖先の骨折りを思ひ出す。

つるの工夫なり。「良久顧視して、膝を拍つて、「兒孫不識犁鋤面、牛馬空懷舊主恩。」
擧す、僧曹山に問ふ、「佛未だ出でざる時如何。」山云く、「曹山は如かず。」僧云く、「出世して後如何。」山云く、「曹山に如かず。」拈じて云く、「事を聴くこと真ならざれば、他の釋迦老漢を累して、出頭すること得ざらしむ。」

解制上堂、四月十五結、上下四圍一團の鏡、七月十五解、百川倒流開聒聒。寒來暑往、燕去鴻歸、長く客を送る處に因つて、憶ひ得たり別家の時。

上堂、一葉落ちて天下秋なり、一塵起つて大地收る。身を動して影に連り、舌を動して喉に連る。是れ吾が家裏の客、我が羞を知らざることを笑ふ。

●曹山。證、洞山价に嗣ぐ。
●非臺。未詳なり。
●自己。本来の面目。

非臺首座を謝する上堂、菩提樹なく、明鏡臺に非ず。鳥飛ひ兔走り、玉轉じ珠回る。大衆見るや、階前の下馬臺を踢倒せよ。

菊節上堂、九日今朝是、黃華笑轉た新なり。君が與に一曲を歌ひ、聊爾慇懃に當つ。天高く分地迥にして、秋水分垠なし。鴈過ぎて兮歴歴、落葉兮聲頻なり。真如主賓の句を識らんと要せば、但だ看よ沽酒挈瓶の人。

上堂、「山僧二十年後、自己自己を管帶し、三十年後、自己自己を忘卻し、四十年後、自己只だ是

れ自己。」慕に拄杖を拈じて、卓一下して、「拄杖觸體を穿過し、露柱眼睛を突出す。」喝一喝。開爐上堂、三世の諸佛、只だ火を截ることを解し、六代の祖師、只だ火を撥ふことを解す。山僧が者裏、只だ是れ種火、爾が通身紅爛ならんことを待つて、大笑一聲せば、方に知らん真如が開爐底の時節を。

上堂、初一禪を説かず、併せて今朝に在つて説く。一莖草上現二瓊樓、不レ知弄巧翻成拙。至節小參、「若し此の事を論せば、直に是れ説き難し、説著せば人に怪

●露柱。大黒柱が目をあけた。さてさてと。

●難説。止し不レ須レ説。

●紫羅帳。紫の幕のうち、美しきことをいふ。

●些子。多少の意。

●果然。果せるかな。又はそりやこそなり。

笑せ遣れん。有る底は便ち道はん、真如、紫羅帳裏金馬堂前に向つて、大いに東閣を開いて高賓を延接すと。殊に知らず黃葉堆頭、昨夜霜威較重し。青灰滿面、鉢囊破綻して縫ひ難し。慕に拄杖を拈じて、卓一下して、「一冬二東、又手當胸。大衆會すや。」又卓拄杖、「蛇吞龍鼻、虎咬三犬蟲。」連喝兩喝。

瀉山、仰山に問ふ、仲冬嚴寒年年の事の公案を擧す。拈じて云く、「瀉仰父子、久貧乍ち富む、便ち見る手滿ち脚滿つることを。中間更に些子の諸訛あり、首座に留興して點出せしむ。」

冬節上堂、「自古自今、一日の風雲を觀て、一年の氣候を驗す。真如が者裏、青黃黑白の雲競ひ起り、東南西北の風交作る。是れ汝諸人、作麼生か眼を著く。良久して、「果然。」

舊兩序監收を謝する上堂、「一進一退、一東一西、妙、轉處に在り、用力の齊しからんことを要す。大家相聚つて莖莖を喫す、誰か道ふ黄金泥似りも賤しと。」卓拄杖して下座。
臘八上堂、仰觀星斗逼人寒、那箇 瞳人有二 雨般、堪笑 老胡無二 合殺、今朝拋出是非團。

八疊和尚を謝する上堂、行は説處に在り、説は行處に在り。行の時終日途に在つて家舍を離れず、説の時偈河沙に似て初めより一語なし。全殺全活、全資全主、何ぞ似かん金牛鉢を托して舞ふには。
除夜小參、「尋常一年只だ三百六十日あり、今年山僧正月朔一より、指を屈して數へて臘月三十夜に到らば、恰恰三百九十八日あり、循環住ら、晷刻停らず。春聲未だ轉せず、銅壺更籌斯に半を過ぐ矣。未だ透關せざる底は、往往鐘を喚んで盆と作し、已に透關する底は、何ぞ妨げん馬を指して驢と作すことを。甚に因つてか此の如くなる。」拂子を以て禪床を擊つこと一下して、「西天胡子没三髭鬚。」
舉す、金牛因に臨濟來る、乃ち横に拄杖を按じて、方丈前に坐す、濟遂に掌を拊つこと三下して堂に歸る、牛卻つて下り去る。人事了つて便ち問ふ、「賓主相見は各軌儀あり、上座何ぞ無禮なること

- 瞳人。うろたへもの。
- 雨般。疎影難分雪氣梅。
- 老胡。ここでは釋尊をいふ。
- 合殺。一切か殺すなり、殺は散の貌なりとありて、一切の悉く散じ去るを云ふ、少少勘定ちがひと云ふこと。
- 八疊和尚。不詳なり。
- 全殺。殺すも活すも、みな一切殺、一切活、一切資、一切主。
- 循環。向去向住。

とを得たる。」濟曰く、「甚麼と道ふぞ。」牛、口を開かんと擬す。濟便ち打つこと一坐具、牛倒るる勢を作す。濟又打つこと一坐具。牛曰く、「今日便を著す」と。乃ち方丈に歸る。拈じて曰く、「金牛只だ舞を作すことを解す、也た陷虎の機あり。」
正月旦上堂、「歲朝筆を把る、萬事皆吉なり、一つには願ふ天下太平、二つには願ふ萬民樂業、三つには願ふ瀟山の水牯牛。水草長く甘ひて、皆長く角瘦するを致す母からんことを。」卓拄杖して下座。

- 水草長。水足り草足り。
- 換形。衣をぬぐこと。
- 三處度夏。前に出づ。

燈節上堂、「村村の燈火神社に喧し、處處の笙歌畫樓に咽ぶ。笑ふに堪へたり真如が定力無きことを、人前に輒出す百華毬。」拄杖を擲下して、連喝兩喝して下座。
遊山して歸る上堂、山僧一出二十五日、往還五百餘里。章安を渡り秀嶺を穿ち、雁蕩に遊び、江心を看る。或は萬仞の頂、或は九重の淵、或は淺草平田、或は魔宮虎穴、處處都べて到る。最も是れ谿山雲月、陰晴明晦、但だ咳嗽變動するのみに非ず、又且つ歩を擧げ、形を換ふ。吾が與に眉毛を檢點して看よ、端的知んぬ他幾莖をか刺す。
上堂、「簷頭滴滴、分明歷歷、釋迦老子、脚下泥深きこと三尺、達磨大師、脚下泥深きこと三尺。且く道へ真如が拄杖子、還つて此の過を免れ得んや也た無や。」良久して杖を靠けて、「也た得也た得。」
結夏小參、「少室峯前、曹溪路上、錢湯爐炭を突出し。劍樹刀山を豁開す。文殊 三處に夏を度り、

彌勒一向に放慈す。盡く道ふ劍を抜いて相助くと、誰か知る五逆雷を聞くことを。各各眉毛を救ひ得、彼彼通身紅爛。鯨を息め刺を補ふこと未だ其の方あらず。禁足安居、豈に 漏漚を容れんや。卓杖して、「匹上足らず、匹下餘りあり。」

擧す、古徳、拄杖を拈起して曰く、「拄杖子を識得せば、一生參學の事畢んぬ」と。拈じて曰く、「玉堂金馬、茅舍踈籬。」卓拄杖して、「有錢有酒同歡笑、無米無柴各皺眉。參。」

結制上堂、「護生は 須らく是れ殺すべし、殺し盡して初めて安居。與麀與麀、妖狐變じて師子と作る、不與麀不與麀。師子變じて妖狐と作る、良久して拂子を撃つて下座。」

上堂、藏主の秉拂都寺の齋を謝す、拄杖を拈じて、「都寺は乳酪醍醐を以て、佛事を爲す、藏主は無示無説を以て佛事を爲す。東廊にも也た慚愧と叫び、西廊にも也た慚愧と叫ぶ。又出で來つて道ふものあり、等しく是れ一聲の慚愧、中間得不得ありと。山僧聞き得て手を以て合掌す。將に謂へり此の衆人なしと。慚愧慚愧。」

重午上堂、今日重午の節、大衆を供養すべきなし。也た俗禮に效ふて鬪釘些少、諸人と箇の暖熱を作さん。金剛圈、栗棘蓬、鉢酸餈、趙州の茶、衆中吞吐得下する底あること莫しや、出で來れ、

- ① 漏漚。にこること、混流なり。
- ② 匹上。上に向ければ足らず、下に向ければ餘りあり、これは帯に短し褌に長しと同じこと。
- ③ 參。參問し來れとなり。
- ④ 須臾殺。猫が鼠を捕つて、一滴の血をあまさぬ如くに。
- ⑤ 金剛圈。佛心に喩へ、或は一圓相にたとへる。圈は區域、金剛は不易なり。
- ⑥ 栗棘蓬。惡辣に喩ふ。
- ⑦ 鉢酸餈。てつのおんころ。

我れ急に一箇半箇酬酢主伴を作さんことを要す。「復た良久して、「眞如が禮數、多子なし、君懷を開かずんば怎奈何。」膝を拈つて下座。」

瞿藏主至る上堂、颯颯たる涼風景、同人寂寥を訪ふ。秋蟲古砌に鳴き、落日荒郊を照す。壁上燈籠破れ、床頭木杖凹し。東山の左邊底、漁父夜巢に棲む。

解夏小參、今夏諸人と同じく此に安居、敢て佛法の二字を將つて、諸人の耳朵を汗染せず、諸人各知道せんことを要す。前年官訟、去年收めず、常住の柴米油鹽、事事缺典、麥飯黃齏、此の冷落に委す。如今秋初夏末、禪和家大いに罵つて門を出て、去る。向に道ふ、竹を惜みて慈鳳を棲ましむることを要す、池を開いて専ら明月を待つ。儂が罵るを待つて語行はるゝを得ん。山僧別に 箇の道理あり。

- ① 瞿藏主。不詳なり。
- ② 有箇道理。別に子細があるぞとの意味なり。
- ③ 題目。牌中、數箇の字。
- ④ 試場。白衣宰相なり。
- ⑤ 物外。言外聲前。

擧す、此庵和尚、此の山に住し、或庵和尚、此の山に在り、藏神の笑ふを見て悟道す。頌あり、曰く、「商量極處見題目、途路窮邊入試場。」拈起毫端、風雨快、者回不作探華郎。拈じて云く、「我れ當初若し見ば、只だ兩指を將つて鼻を夾んで之を示さん、擬議不來ならば、劈脊に便ち撲たん、臥床の内、豈に鼾睡の人を容れんや。」

解夏上堂、道は 物外に非ず、物外道に非ず、禮義は富足より生じ、盜賊は貧窮より起る、大衆會

せば則ち杖頭に挑げ去れ、會せずんば且く癡心なること莫れ。

中秋上堂、素魄今宵已に十分、廣寒宮闕重門を啓く、青冥の風露丹桂を飄す、誰か是れ

心空及第の人。

九日 竹房首座。孟知客。淵侍者を謝する上堂、「秋風客衣を吹く、君に問ふ知るや知らずや。孟嘉猶

は落帽を缺く、淵明白衣を望斷す。真如、臂長く袖短し、一杯聊が佳期

に應ず。良久して、「且喜竹房人解醉、免教三黃菊笑三東籬。」

軒藏主。淵侍者を謝する上堂、「大藏小藏、三喚三應、針頭鐵を添へ

ず、秤尾蠅を立せず。今朝此の擧を聞いて、必定山僧を罵らん。甚に因つ

てか此の如くなる。」卓拄杖して下座。

無等和尚の爲に入祖堂、目送秋雲過三書溪、千山木落雁行低、叢

林宿將歸三何處、劫外唯聞木馬嘶。故我前住當山虎巖堂上

無等和尚、七十九年五處の爐鞴、妙峯の鉗鎚を握つて、衲僧の冤對を作す。

有る時は兩を放ち二を抛つ、有る時は貴く買ふて賤く賣る、有る時は一

莖草上、玉殿瓊樓を現じ、有る時は蟻螟眼中、世界を恢張す。水晶宮

裏夜半身を抽んで、雙桂堂前白日捉敗す。丹青を假らず、面目見在、祖堂

①素魄。月の異名。
②廣寒宮。月の都。
③青冥。おほそらな天。
④心空及第。光境俱に忘れ盡して。

⑤竹房。その他、不詳なり。
⑥淵明。陶淵明なり。
⑦軒藏主。不詳なり。
⑧大藏。大藏は淵侍者に、三喚は軒藏主にたとへる。
⑨針頭。すりきつた世帯。
⑩無等和尚。真如寺に住す、入祖堂はその靈牌を祖師堂に入れて法要をなすこと。
⑪木馬嘶。我れ唱ふれば泥牛吼え、汝和すれば木馬嘶く。

⑫一莖草。世尊、地を指してこの處、梵刹を建つべし、帝釋一莖草を挿んで云く、「梵刹を建つことは白に竟んぬ」と、これは大小廣狹の二見を離れ、無限無礙の境界の妙用を示せるなり。
⑬千古。古今の人に看せてあるぞと。
⑭濟北。臨濟の宗風。
⑮東湧西沒。東に顯はれ西に隱る、出没自在を云ふ。
⑯麻三斤。洞山の。
⑰乾屎橛。雲門の。
⑱庭前柏樹子。趙州の。
⑲丈林山下。竹筍、しつこんとよむ。
⑳參支。撥草參支の上士。
㉑事無。物に表裏體用あり。
㉒罪重。其の中の重罪だけで刑罰を定める。
㉓馬載。馬が夢を載せ、牛が粟を載せて。

風冷しく夜光寒し、千古萬古人に與へて看せしむ。

開爐上堂、「噫嘻呼會すや也た無や。少室山空しく落葉ち、濟北風高く

浪蕩し。會するものは便ち火色を知る、會せずんば且く寒爐を守れ。」卓拄

杖して下座。

上堂、「終日茫茫として那事か妨なけん、東湧西沒、七圓八方、珠盤を

走つて分撥はざるに自ら轉じ、鳥空に飛んで分意に任せて翱翔す。龍門宿

客なく、官路私商あり。」拂子を撃つて下座。

上堂、「荒田に入つて揀ばず、手に信せて拈じ來れば差錯あることなし。

麻三斤、乾屎橛、庭前の柏樹子、丈林山下の竹筍鞭。」喝一喝、「只だ

事の眼前を逐つて過ぐることを知つて、覺えず老の頭上従り來ることを。」

冬夜小參、「主丈頭邊、破蒲團上、正與麼の時、也た一線半線の諸訛あり。

我が此の一衆、盡く是れ參立の上客、各各眉下眼を帶ぶ。人の緇素得出

するなしとは道はず、只だ恐らくは人の包裹し得去ることなからんこと

を。若し一一爆綻し出し來らば、但だ洞山の果子分文直らざるのみに非ず、

他の皓老の布褌を累して、醜拙尤も多し。事一向無うして、罪重ねて科

あらず。「拄杖を掛けて、拋向江南與三江北、從教馬載及三驢駝。」

擧す、南泉和尚、衆に示して云く、「心是れ佛にあらず、智是れ道にあらず。」師曰く、「心是れ佛にあらず、智是れ道にあらず。碧眼、黃頭、果然

として失照。」

至節上堂、書雲の佳節、法の説くべきなし、諸人に點向して、各自に

甄別せしむ。東は是れ東弗于岱、西は是れ西瞿耶尼、南は是れ南瞻部州、

北は是れ北鬱單越。莫把二綠雲、爲彩鳳、休將二飛雪、作中楊華。

上堂、「直下是、直下是、動着することを得ず。」拄杖を掛けて下座。

上堂、「新舊兩序監收、弘維那を謝す。」參禪伎倆なし、謾に住山の人と作る。且喜すらくは東序も

也た人を得、西序も也た人を得、監收も也た人を得、修造も也た人を得たり。灼然として相謝すべき

なし、主丈只だ響に效ふことを得たり。「卓拄杖兩下して、「茶は再請なし、酒は添巡を要す。」復た卓一

下して、「興化、克賓を打つに何似れ。」

臘八上堂、明星一見して轉た疑を添ふ、畢竟沙を蒸して飢を療さず。争か似かん儂家、脚を伸

べて睡らんには、從教あれ華は發く向南の枝。

歲除小參、「若し佛祖頂門の一著を論せば、造化の推移ると一般なり。新舊往來盡く今夜に在り、

碧眼。達磨をいふ。

黃頭。釋尊をいふ。

書雲。冬至をいふ。

弘。未詳なり。

興化。獎、臨濟に嗣ぐ。

克賓。興化に嗣ぐ。

伸脚睡。臥床題、豈に野鼻の

人を容れんや。

推移一較。時時夢を作し、一

日、一日を譲得す。

鬼神も亦其の蹤跡を知らず。「良久して云く、「山僧事已むことを獲ず、只だ

諸人に、點向することを得たり。看よ看よ二十四氣、七十二候、只だ三鼓

已前二鼓已後に在り。華は發く向南の枝、枯楊、左肘を生ず。阿呵呵、釣

魚船上謝三郎、拈得鼻孔一失却却口。」

趙州、蘿蔔の公案を擧す、頷に云く、「蘿蔔三斤重、誰云出鎮州、有

時乘好月、不覺過滄洲。」

歲旦上堂、一雨元正を潤し、萬物光彩を舒ぶ。春水虛碧を漾し、春山

潑黛濃なり。我が、鋪席の新なるを添へて、直に是れ人をして愛せしむ。

笑ふに堪へたり。長汀の老禿丁、手裏箇の破布袋を挖くことを。

奉聖の、慈安和尚至る、并せて石林藏主を謝する上堂、瑞雲山を出て

來り、青天白雨を撒す。蓮堂老龍蟄す、別に通霄の路あり。全放全收、全

寶全主。石林進出、珊瑚樹

上堂、翻身の師子、角を掛くる羶羊、面目見在、各各眼を帶ぶ。

佛涅槃上堂、當年不合手摩胸、累及二兒孫、赤骨窮、只箇死屍

無二著處、至今紅爛百華叢。

點向。時を知らず、爲に太鼓

をうつ、初夜より後夜に至る

まで一更を五分して五點とな

す、總じて二十五點となる、

點を報する向といふか。

左肘。後の符をいふ。

蘿蔔。前に出づ。

鋪席。店と同じ、住居を云ふ。

長汀。布袋和尚。丁は賤者の

稱なり。

慈安。未詳、石林も未詳。

瑞雲。奉聖の山號か。

面目。人天の眼目。

各各帶眼。明明に龍の如く虎

の如く、猶犬の如く、狸奴に

似たり、各各鬚長く肚裏空し

きこと莫れと。

不合。いらざることになり。

無著處。買手がな。

至今。狼藉たり年年二月の春

と。

未詳。未詳なり。

① 璉藏主。意藏主至る上堂、故人踏雨到。香山、何事燈籠也破頭、門外溪山千萬疊、灼然相見一番難。

上堂、有る時は行、説處に在らず、有る時は説、行處に在らず、有る時は行、説處に在り、有る時は説、行處に在り。笑ふに堪へたり。西來の碧眼、今に至るまで轉身を會せざることを。

浴佛、兼諸山及び道舊至上堂、隻手は天を指し、隻手は地を指す。爾あつて我れなく、我れあつて爾なし。眞如五逆、冤を成さず、又得たり諸公痛拳を下すことを。

結夏小參、今夏諸人と同じく此に結制す、四件の事あり、諸人に奉告す。第一に、進前して參することを得され、第二に、退後して領することを得され、第三に、者邊より來ることを得され、第四に、那邊に去ることを得され、坐は但だ坐し、行は但だ行じ、飢うるときは則ち同じく飯し、臥するときは則ち同床、金鶏の粟を啣むに一任す、且つ鼠糞の糞を汗すなし。甚に因つてか此の如くなる。卓拄杖して、「薰風自南來、殿閣生微涼。」文殊、三處に夏を度るの公案を擧す、頤に云く、「法筵箭令不二虛傳、百億文殊一申穿、要

- ① 香山。白居易の居りしところ。
- ② 西來。達磨を云ふ。
- ③ 至今不會轉身。但だ月の圓、月の缺を見て、未だ月の圓、月の圓を知らず。即ち行の説處に在るを見て、説の行處に在るを見ず。
- ④ 諸山。五山以外の各本山をいふ。
- ⑤ 不成冤。事、孤起ならず。
- ⑥ 進前。心所の路をいふ。
- ⑦ 退後。本來の會を著せず。
- ⑧ 者邊。正典隱になり。
- ⑨ 那邊。切に思むじや。
- ⑩ 薰風。東坡の句なり。凡そ弓に傷く鳥は、纒に曲木を見て回避す。
- ⑪ 法筵云云。無功者は賞せられ、有功者は罰せらる。

與老胡一重拔本上一聲砧杵落誰邊。」

結制上堂、大圓覺を以て我が伽藍と爲す、今日明日、前三後三。潘園が蹇驢華岳を看、善財の煙水百城の南。

都寺の齋、首座の秉拂を謝する上堂、都寺の辨齋如勝、中の如勝、首座の秉拂奇特中の奇特。教中に道ふ、「於食等者於法亦等、於法等者於食亦然。」食輪と法輪と齊しく轉じ、金烏と玉兔と交馳す。眼睫盲毛都べて落ち盡して、住山麻ち得たり慈癡を放にすることを。

端午上堂、文殊、善財をして薬を探らしむるの公案を擧す。我れ當初若し見ば、只だ他に向つて道はん、大士刀瘡は没し易く、惡語は消し難しと。若し者裏に向つて一轉語を下し得ば、卻つて許す。他の毘耶城裏に疾を問ふことを。

上堂、結夏已に一月、眞如法の説くなし、眼上各眉を安じ、口中各舌を含む。西天の人唐言を會せず、剛ひて烏龜を把つて證して鼈と作す。上堂、擧す、僧、古德に問ふ、「寒暑到來如何が回避せん。」德云く、「鑊湯

- ① 前三後三。前から數へても後から數へても違はぬこと。
- ② 潘園。此の兩句、謂つべし紅絹幼婦と、吾れ若し諸人に向つて説かば、恐らくは兒孫を喪せん。
- ③ 善財。童子華嚴經に出づ、五十三問の故事。
- ④ 都寺。前に出づ、辨齋は齋をふれまふ、秉拂の解も前に出づ。
- ⑤ 教中。淨名經なり。
- ⑥ 金烏。日、玉兔は月なり。
- ⑦ 住山。住持と同じ。
- ⑧ 他。諸人をいふ。
- ⑨ 眞如云云。無問の造業を招か

爐炭裏に回避せよ。僧云く、「鑊湯爐炭裏に如何が回避せん。」德云く、「衆苦
到ること能はず。」頌に云く、「老去他鄉見二故知、迢超擣手卻同
歸、夜深且盡二樽前酒、莫說三天涯脚痛時。」

上堂、是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、劈腹剜心、君に説與す、
恰も真如が舌の痛むに値ふ。大衆還つて會すや、即ち賣弄して果して是
れ瘡を生ずるに非ず。

上堂、即心即佛、赤脚にして刀山に上る。非心非佛、地を耕して莠藜
を種う。不是心、不是佛、不是物、黃檗樹頭木蜜を生ず。第一句下に薦
得せば、爾に許す真如が堂に升ることを。第二句下に薦得せば、爾に許す
真如が門に入ることを。第三句下に薦得せば、幕に拄杖を拈じて、「休みね
休みね、好語説き盡すべからず。道人道著すべからず。」卓拄杖して、「趙
州親見老、南泉、睦州拶折、雲門脚。」

解夏小參、僧問ふ、「僧、風穴に問ふ、「九夏賞勞、請ふ師言薦したま
へ。」穴云く、「一把の香菝拈するに未だ暇あらず、六鐙の金錫遙空に響
く」と、意旨如何。」師云く、「若し諸方に到らば、錯つて擧することを得ず。」

ざらんと要せば、如來の正法
輪加勝ること莫れ。
●莫說天涯。因地下、體なる
手形が出ると、從來の千辛萬
苦、皆是れ大法財なり。
●劈腹。滿腹の赤心を吐露す。
●即非賣弄。更に汝に向つて既
かば、舌頭兩片とならん。
●耕地。運地是れ刀鎗。
●黃檗。苦中に甘草のあきな
ひ。
●南泉。願なり。
●睦州。陳なり。
●雲門。眞なり。
●風穴。沼、南院頭に嗣ぐ。
●賞勞。慰なり、一夏中の功勞
を賞するをいふ。
●一把香菝。この二句は虛堂錄
の卷九、徑山檢録解夏上堂に
出づ。
●六鐙金錫。六鐙は錫杖の頭に
ある六つの環のこと。

拄杖を拈じて、「一夏已に滿つ、聖制圓を告ぐ。數日來、些少の佛法を闡接し、要今夜打開するに在り。
我が見前の大衆を供養して、以て九旬汗馬の勞を表す。粗分に差を知り恥を識る、古人に效ふことを
欲せず。拄杖頭上翦草影邊に向つて、胡亂に拈出せば、笑を識者に取らん。所以に道ふ、藜藿糞飯、
決して尊貴の珍とする所に非ず、風髓龍肝、是れ樵夫の食にあらず、我れ恰恰相當ることを要す、誰
か與に一轉語を代らん。」大衆を顧視して、拄杖を靠けて、「在舍只言爲客易、臨淵方覺
取魚難。」

擧す、僧、雪竈に問ふ、「達磨西來單傳心印、諸方其麼としてか各異端を説く。」寶云く、「誰そ。」僧
云く、「即今を爭奈何。」寶云く、「西天令嚴なり。」僧云く、「與麼ならば則ち水に入つて長人を見る。」寶云
く、「韓信、朝に臨む底。」師曰く、「雪竈一向の擧令、自身を虧了すること一半、者の僧麤心大膽、
也た屋を縛して天を蓋はんことを要す。」

解夏上堂、十五日已前、閻梨を坐殺し、十五日已後、閻梨を走殺す。
正當十五日、秋雲依依、秋草離離、蛩、古寺に吟じ、華、疎籬に放る。
高安灘上の客、臨濟、小厮兒、腦後猶ほ一椎を缺く。
中秋上堂、甚だ奇絶中秋の月、光皎潔として欠缺なし。巨耐なり謝
三郎、也た絲綸を把つて擧ぐ。

●雪竈。覺なり。
●韓信。方語に「生命別人の手
裏に在り、頭落ちたり死活を
知らず」と。
●虧了自身。北斗裏に身を藏
し、南辰後に膏藥を賣る。
●坐殺閻梨。坐者立者、喪身失
命することを免れず。

上堂、至道無難、言端語端、高亭橫に趨つて去る、雪峯九たび洞山に到る、鯨、釣魚竿を咬み、蛇、老鼠尾を啣む。

開爐、質藏主至上堂、浙浙霜林起、晚風、同人撥草訪巖叢、灰寒、火冷、休相笑、且向階前掃落紅。

巾峰、奚翁和尚、喜書記、鑑藏主、通侍者至上堂、「兄弟十字を添ふ、夫子書を識らず。左轉右轉、三應三呼、一等に、冤憎會苦、最も嫌ふ一箇眉麤なることを。」卓拄杖して、「利竿寒影轉、明月上平蕪。」

上堂、「大衆諸方一句を道へば、眞如も也た一句を道ひ、諸方兩句を道へば、眞如も也た兩句を道ふ。等しく是れ與廢の時節、中間の用處同じからず。忽ち箇の漢あり出で來つて、翳睛の法を用ふることは、須らく是れ眞如にして始めて得べしと道はゞ。」拂子を以て禪床を撃つて、「三千年に黃河一度清し。」

冬夜小參、僧問ふ、「寒暑不到の處、衲僧如何が歩を進めん。」師云く、「馬あれば馬に騎り、馬なければ步行す。」乃ち云く、「枯木巖前、冷灰堆裏、住山の活計苦多きことなし。三篋腰を束ねて分に隨つて過ぐ、甚の砂飛び石走るとか説かん。且つ看る凍茅簷より落つることを。」

衣穿ち肘露はる可憐生、免れず貧兒舊債を思ふことを。且く道へ甚麼の債をか思ふ。二祖見少林、無端禮三拜。

舉す、趙州一日、衆に示して云く、「至道無難、唯嫌揀擇、纔に語言あれば是れ揀擇、是れ明白。老僧は明白裏に在らず、是れ爾、諸人還つて、護惜すや。」時に僧あり、出でて問うて云く、「既に明白裏に在らずんば、又箇の甚麼をか護惜せん。」州云く、「我れも亦知らず。」僧云く、「和尚既に知らずんば、甚麼としてか道ふ、明白裏に在らずと。」州曰く、「事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了つて退け」と。師云く、「趙州勢に倚つて人を欺き、甲を棄て兵を曳くことを料らず。」

冬節上堂、一陽生じて萬物亨る、短者は自ら短、長底は自ら長。老胡如し此れを會せば、應に、蕭梁に見えざるべし。

臘八上堂、「六載雪山に坐す、巧を弄して拙謀を成す。賊を攤いて星月に與ふ、星月常に悠悠。賊を攤いて、含識に與ふ、含識、點頭せず。」卓拄杖して、「是非空落釣魚舟。」

新舊兩序を謝する上堂、「大衆、此の事は滄溟に舟を泛ぶが如く、蓬帆艫棹、釘舵釣竿、皆少くこと得ず。有る時は逆風に帆を張り、有る時は順風に舵を把る。只だ要す船上の人、同聲相應じ、同氣相

- ① 高安。大愚和尚の居處。
- ② 小厮兒。こわつばのこと。
- ③ 光皎潔。今夜一輪滿つ、清光何の處にか無からん。
- ④ 也把絲綸。依然として魚鰓を據る。
- ⑤ 言端語端。松濤と夕雨と。
- ⑥ 高亭。徳山に嗣ぐ。
- ⑦ 雪峯。存なり。
- ⑧ 質。未詳なり。
- ⑨ 奚翁。以下みな未詳なり。
- ⑩ 夫子。このやうな文字は、めづる。
- ⑪ 左轉。茶がにえました、なに雨がふる。
- ⑫ 冤憎會。汝負吾、吾負汝。
- ⑬ 篋。竹の皮、又わり竹なりといふ。
- ⑭ 衣穿。すりきりたる貧乏。

- ① 護惜。愛惜守護、大切にすること。
- ② 蕭梁。梁の武帝は蕭氏なり。
- ③ 弄巧成拙謀。久しく坐して働を思ふ。
- ④ 含識。含靈に同じ、有情則ち衆生をいふ、心識を具有するもの一切なり。
- ⑤ 點頭。がてんすること。
- ⑥ 釘舵。釘はいかり、舵は「かち」なり。

求む。同行同到、同放同收せんことを。「卓拄杖して、「一掣六龍、連二十洲。」

除夜小參、僧問ふ、「一言に道ひ盡す時如何。」師云く、「老僧が性命汝が手裏に在り。」乃ち云く、「一言に道ひ盡す萬法皆如なり、一句截流千差合轍。有る時は奪人不奪境、有る時は奪境不奪人、有る時は人境兩俱奪、有る時は人境俱不奪。」袖短うして臂膊長し、貧富の裝裹を作す。六隻の骰子滿盤紅なり、君前に撒向して活鱖々。「良久して、「謾に説く。北禪露地を烹ると、風流出格真如に讓れ。」

舉す、趙州、茶菓を訪ふ、莫云く、「箭を看よ。」州云く、「箭を看よ。」莫云く、「過。」州云く、「中れり。」師云く、「一看箭二看箭、茶菓と趙州と獨體兩片と成る。山悠悠、水悠悠。」閻闍聽三小子、談笑覓三封侯。」

歲旦上堂、「元正啓祚、庶物發生す、鳥獸魚鼈、咸若たり、森羅萬象、嶢嶢たり。且く道へ、誰が恩力をか承く。」卓拄杖して下座。

上堂、「垂絲千尺、三寸の釣頭、地轉じ天回り、風高く月冷じ。」卓拄杖、「會するときは則ち親しく、船子に見ゆ、會せずんば去つて、夾山に問へ。」

結制小參、僧問ふ、「大力量の人、甚に因つてか脚を擡げ起さざる。」師云く、「到江吳地盡、隔岸越山多。」乃ち云く、「有佛の處住することを、得ざれ、荒草天に連る。無佛の處急に走過し、獨體野に遍し。一條の路、

千人萬人共に行いて、千人萬人到らず、我れ今只だ諸人、籠頭を脱却し、腰帶を卸下せんことを要す。交渉なき處に向つて、力を盡して板を擔ひ得るも三十棒、一棒も也た較ぶること得ず。」

舉す、僧、趙州に問ふ、「學人乍入叢林、乞ふ師指示せよ。」州云く、「喫粥了や未だしや。」僧云く、「喫粥了。」州云く、「鉢盂を洗ひ去れ。」師云く、「趙州只だ順水に船を推すことを解す、後代の兒孫をして、箇箇句下に死在せしむることを致す。」

結制上堂、四月十五結、盡十方空、欠闕なし、店面を豁開して又重新、只だ金を陪して生錢を賣ることを得たり。

上堂、結夏已に一月、寒山子作麼生。乞は再面なし、語は要す。隨郷。上堂、山僧が受用、諸人と初めより兩様なし。諸人終日舎に在つて、途中を離れず、山僧終日途に在つて、家舎を離れず。大衆喚んで入理深談と作すことも也た得たり、喚んで向上の提持と作すことも也た得たり。各自に參取せよ。

上堂、副寺を叙謝す、至道無難日に萬端に應ず、柴を量り米を數へ、官を接し官を送る。是れ

- ① 船子。德誠なり。
- ② 夾山。善會なり。
- ③ 大力量。松源の三轉語。
- ④ 到江。物極まれば變通あること。吳越は國の名。
- ⑤ 籠頭。馬の「おもがし」、身心の自由を束縛してあるなり、煩惱妄想に喩ふ。
- ⑥ 豁開店面。有利無利、行市を離れず。
- ⑦ 只得陪金。わだん次第に、誰が買ふてくれるやうぞ。
- ⑧ この上堂。頭注に「此の段、恐らくは缺文ある歟」とあり。
- ⑨ 隨郷。他國のことでは關所は透れぬぞよと。
- ⑩ 自。これも「す」とよむくせなり。
- ⑪ 量柴。副寺の事務は、いそがはしいにより、列れ擧ぐ。
- ⑫ 官。官人なり。

牛、犁を牽き杷を拽く、是れ馬、鏡を銜み鞍を負ふ。一句大衆に、舉似せん。入水也。要占乾。

上堂、九夏豁開す天地の爐、若しくは凡若しくは聖、親疎没し。通紅百煉重ねて炭を添ふ。只だ要す。男兒是れ丈夫ならんことを。

上堂、舉す。風穴和尚、衆に示して云く、「若し一塵を立すれば家國興盛し、野老擧盛す。一塵を立せずんば家國喪亡し、野老安貼なり。此に於て明

め得ば、閑梨分なく全く是れ老僧、此に於て明めずんば、老僧分なく即ち是れ閑梨、閑梨と老僧と、亦能く天下の人を迷卻し、亦能く天下の人を悟

卻す。老僧を識らんと要すや。右邊手を以て拍一拍して、者裏即ち是、閑梨を識らんと要すや。左邊拍一拍して、「者裏即ち是。」頷に云く、「一鏃

破三關、乾坤盡開闢、南北東西十萬程、馬鞭不、過長三尺。眞如風穴、殺活不、同、端的誰收汗馬功。」卓拄杖。

上堂、涅槃煩惱何の形段ぞ、逆順知ぬ他。幾多に較る。頂上豁開す千聖の眼、何ぞ妨げん臘月に蓮華を看ることを。

除夜小參、僧問ふ、「明眼の人甚に因つてか井に落つ。」師云く、「高處は高平、低處は低平。」乃ち云く、

「朝、匆匆暮匆匆。南より北より、或は西或は東。黃鶴樓前に百戰し、頭を回せば歲盡さ年窮る。窮するときは則ち變じ、變するときは則ち通ず。金殿の鎖を掣開し、玉樓の鐘を撞動す。便ち見

る東隣西舍、交相慶賀し、燈籠露柱滿面の春風、甚に因つてか此の如くなる。睡足不知山月上、踏華方見馬蹄紅。」

舉す、僧、馬大師に問ふ、「如何なるか是れ佛。」馬云く、「即心即佛。」後來又道ふ、「非心非佛、不是心、不是佛、不是物。」師云く、「天地玄黃、宇宙洪

荒、日月盈昃。」拄杖を以て、劃一劃して、「若し住念を截つて口滑を得ずんば、幾乎ど念じて、新年に到らん。」拄杖を掛けて下座。

正旦上堂、新に鳳曆を頒つて堯庭より下る、山嶽齊しく呼ぶ萬歳の聲。拄杖は知らず甚麼をか見る、也た來つて隊を赴ふて新正を賀す。卻つて道

ふ我れ栗栗枳枳、稜稜層層たりと雖も、爾が與に、東に柱へ西に柱へ、横に撐へ堅に撐へんことを要す。撐撐拄拄、窮坑を跳出す。五湖煙浪の裏、別に好商量あり。

結夏小參、僧問ふ、「如何なるか是れ道。」師云く、「穀を種ゑて荳苗を生せず。」乃ち云く、「食輪轉すれば法輪轉じ、食輪轉せざれば法輪轉せず。眞如今夏、既に是れ糧を缺く、佛法禪道情を盡し、之を

● 舉似。似は示と同じ。
● 男兒是丈夫。人人皮袋子、那裡にか安著せん、丈夫にして始めて大器を成ぜん。
● 一鏃破三關。公案、階級を経ることなく、一超して本分の田地に到るをいふ、一鏃とは一筋の矢、三關とは三界三世、一切の差別を透得して一超直入如來地の意なり。
● 殺活。同生同死なり。
● 較幾多。どれほどのおもひぞ。
● 匆匆。匆匆はせはしいことなり。

● 自南自北。さて／＼客の多いことじや。
● 黃鶴樓。崔顥、嘗て詩を題す。
● 到新年。目出度い處でも念佛申すものじや。
● 東柱西柱。どの座にも開帳じや。
● 五湖。どこもかも、面白く五月じやと。
● 食輪轉。豐年は凶年に勝る。

東ねて高く聞く。有る底は道ふ、是は則ち是、水を換へて魚を養ふも、未だ尖新の頭角を見ずと。

行者、者の僧を認取せよ。」

擧す、世尊、外道論議す、外道云く、「我れ一切不受を以て義と爲す。」世尊云く、「爾受を見るや否や。」外道拂袖して便ち去る。途中に至つて乃ち悟つて云く、「當に回つて首を斬つて以て世尊に謝すべし」と。頰に云く、「香香、華源路不通、回頭方見藥鑪空、雪晴海濶千峰曉。」

同 上 天山十二重。」

解夏小參、僧問ふ、「大火西に流れ、涼風野に入る、正恁麼の時如何。」師云く、「天台・南岳・峨嵋・五臺。」僧云く、「便ち恁麼にし去る時如何。」師云く、「枯木巖前、差路多し。」僧禮拜す。乃ち云く、「箇の事を提持せば、蒼龍の珠を翫ぶが如く、地に墮せず、空に住せず、收放自在、吞吐自由。四方但だ見る光閃地なることを。只だ洞山示衆の如く、「兄弟秋初夏末、直に須らく萬里寸草なき處に向つて去るべし。」石霜云く、「門を出づれば便ち是れ草」と。者裏豈に爾が眨眼を容れんや。」

蚯蚓蝦蟇空しく自ら咄咄。」

擧す、僧、風穴に問ふ、「九夏賞勞、請ふ師言薦。」穴云く、「一把の香薷拈するに未だ暇あらず、六銀

の金錫遙空に響く。」師拈じて云く、「風穴好語、惜しいかな者の僧、更に一步を進むることを解せざることを。」

解制上堂、一結一切結、一解一切解、佛病も也た解し、衆生の病も也た解す。病既に解し了つて、混融せずといふことなし。水、水に入り、空、空を藏す。諸人但だ絲綸上を看て、蘆華の蓼紅に對することを看ること莫れ。

大行皇帝、升遐上堂、十載華夷樂晏然、旌幢忽返夜摩天、斷絃又得二鸞膠續、玉葉騰芳億萬年。

衡叟監寺及び新舊を謝する上堂、凍合千林萬木僵、飢荒老鼠齧生薑、祖翁活計無多子、相與扶持折脚鐺。

蕭八上堂、王宮を棄てて雪山に坐す、什麼を見てか便ち恁麼なる。既に恁麼ならば、是れ什麼ぞ、黃金城郭草離離、天上人間付與誰。

璋了居の三侍者至る上堂、「昨日同參來る、拄杖子敢て匙を搥き筋を亂さす。今日衣鉢道舊相訪ふ、拄杖子只だ響に效ふことを得たり。」横に拄杖を按じて、「一を分つて二と作し、二を破つて三と作す。滄海渺渺、泰山巖巖。」顧視良久して、「彭八刺札、怪しむこと莫れ空疎なることを。」

國譯佛光圓滿常照國師語錄 卷一

未見尖新。此の座敷を買ひ盡した者は、此の語の妄ならざるを委悉せん。

拂袖。そでをうちらはらふなり、怒つて立ち去る時の氣勢を云ふ。

華源。桃源なり。

天山。日本でならば富士や淺間の嶽の煙雲。

差路多。はきこそなふなど。

收放自在。おれも吞吐したいが、咽喉が窄くて出來ぬ。

蚯蚓蝦蟇。みみずやひきがへるが、井中の脱法、こゝもと暖か。

解更進。はきちがへるな、毒油筋じや、衲僧の布袋頭は、大行。天子の崩御せられて、未だ尊號なきあひだを申す。

玉葉。皇統、騰芳は隆昌。

衡叟。未詳なり。

凍合。すりきつたしんだいじや。

老鼠。方語に、「也た吞吐不下」とあり。

多子。俗にいふ、遺作なしの

三三

冬至小參、僧問ふ、「一物不將來の時如何。」師云く、「羅公鏡を照す。」僧云く、「便ち是れ和尚爲人の處なること莫しや。」師云く、「狗、赦書を銜む。」乃ち云く、「寥落たる叢林、拄杖子全く、巴鼻なし、空疎たる活計、法堂前葉空塔に滿つ。年盡き歲究るに、返到して、轉た覺ゆ寸は長く尺は短きことを。古人誰か道ふ、今朝ありと。我れも、亦知らず當日の事、有る底は與變に道ふことを聞いて、只だ道ふ山僧刀刮り水洗ふと。三十年前也た、曾て老鼠に七條を咬破せらる。」

舉す、僧、馬大師に問ふ、「四句を離れ百非を絶して、請ふ師西來意を直措せよ。」祖云く、「我れ、汝が與に説き得ず、智藏に問取せよ。」藏云く、「何ぞ和尚に問取せざる。」僧云く、「教へ來つて藏に問はしむ。」藏云く、「我れ今日頭痛、海兄に問取せよ。」海云く、「我れ者裏に到つて卻つて不會。」僧回つて馬祖に舉似す。祖云く、「藏頭白海頭黑。」師云く、「者の僧是れ默漢なりと雖も、馬祖父子、但だ、賊に和し款を納れて、便ち是れ、隱寄するのみに非ず、亦、他に勘將し出し來らる。山僧曾て、瓜田に履を納れず、大衆各自に歸堂せよ。」

- ① 棄王宮。金輪の位を棄ててなり。
- ② 是什麼。是れ臘月か是れ正月か。
- ③ 離離。裂けみだるること。
- ④ 璋了居。何れも未詳なり。
- ⑤ 撻匙不亂筋。はしを取つて食なくはす。
- ⑥ 彭八刺札。曲の拍子なり。
- ⑦ 羅公。方語に、「老不知羞。」會元十一、洛浦が臨濟に答ふるの句なり。
- ⑧ 狗銜。狗は尤も賤しく、書は尤も貴し」と方語にあり。
- ⑨ 巴鼻。つかまへどころないこと。
- ⑩ 返到。返は投に通ず。
- ⑪ 亦不知。今日、牛を牽いて價を求むる人が居るか、しかと見えぬ。
- ⑫ 曾被老鼠。これはおれも忘れた、吾が計較成らんことを待て。

上堂、「一氣自ら循環、萬化終始なし。拄杖杖條を抽んで、華開いて世界起る。」卓拄杖して、「老胡打失す常門の齒。」

除夜小參、去去實に不去、來來實に不來。去來、朕跡なし、今古雨つながら悠なる哉。所以に道ふ過去心も不可得、未來心も不可得と。道聲未だ絶えざるに、忽然として一隊の、驅讎、面前に突在す。朱衣畫袴、鬼面神頭、千般萬様、一齊に送り將ち出し來つて、直に是れ、活鱖鱖地なり。山僧、牙關を咬定して、看來り看去る、也た覺えず呵呵大笑す。甚に因つてか此の如くなる。將に謂へり黃連蜜似りも甜しと、誰か知る蜜は黃連似りも苦きことを。

舉す、張拙秀才、長沙和尚に問ふ、「百千の諸佛、但だ其の名を聞く、未審し何の國土にか居す。」沙云く、「黃鶴樓崔顥題して後、秀才曾て題すや。」拙云く、「曾て題せず。」沙云く、「無事一篇を題取せよ。」顥に云く、「萬里中原陪、版圖、中興事業隱樵漁、金鷄一拍扶桑曉、喚得英雄一出草廬。」

二月旦上堂、「寧ろ狐と裘を謀らんよりは、羊と羞を謀り難し。暗裏

- ① 不與汝説。口中がいたんで説く能はず。
- ② 賊頭白。智藏の頭は白く、懐海の頭は黒しと云ふ句の義なり、極めて平凡なるが如し、諸法實相の理を示す、柳は緑、花は紅と同じ。
- ③ 賊。賊が盗みたる物をいふ、賊物にまけて、納款は白狀した。
- ④ 隱寄。よりよするなり。
- ⑤ 他。百千年後に。
- ⑥ 瓜田。人に疑はるべき事を爲さざるをいふ、或抄に少しこくさい處もあると。
- ⑦ 老胡。達磨をさす、達磨を胡缺齒などといふ。
- ⑧ 朕迹。物の形迹。一切萬象の差別の相を云ふ。
- ⑨ 驅讎。鬼やらひ、驅疫なり。
- ⑩ 朱衣畫袴。あかれの衣、小倉じまの袴。

横骨を抽んで、明中舌頭に坐す。「卓拄杖」魯人は東家の丘を重んぜず。「元霄上堂」簡・聞・直の三侍者の至るを謝す、國師三喚復三應、燈火燒空月滿城、千簇畫樓歌管裏、與君攜手御街行。

佛涅槃、手を引いて胸を押しして云く、「眞如手づから胸を摩す、卻つて瞿曇と別なり。當初只だ道ふ黄金を得と、今日看來れば是れ生鐵。戸破れ家残ふて、百醜千拙、一回水を飲み一回咽ぶ。」

護國の象外和尚至るを謝する上堂、「眞如平昔鼓を打たんことを要す、三峯一味、嘍搜に隨す。些子の心肝五臟、其の抖擻都盡せらるること、我れも也た明明自知す、只だ是れ管し得ること能はず。今日既に尊訪を蒙る、鼓を搥つて陸堂、又是れ一番話墮す。且つ兩箇の舌頭なし。」良久して拂子を撃つて、「巖頭撐渡、雪峯輓毬。」

沿佛上堂、滿拂泥猪疥狗身、洋銅百灌恨方伸、眞如不惜湯添口沸、要下輟餘薪待後人上。

結制小參、「去らんと欲して去らずんば去に礙へらる、住まらんと欲して住まらずんば住に礙へらる。元上座、一條の拄杖、尋常硬きこと生鐵の

活鱖々。さつぱりとしてなり。因甚。なにを笑ふた。張拙秀才。前に出づ。長沙。景岑なり。無事。また風に別調の中に吹かる。版圖。原文、版を板に作るも、誤りならんか。寧與狐。狐は「くつれ」とよむ方雅ならん。與羊謀蓋。符子に「魯は孔子を用ひんと欲して、三桓を召し、之を謀す、左丘明云く、周人千金の裘を爲るものあり、狐と其の皮を購す、少牢の珍を見んと欲して、羊と蓋を購す」とあり。

魯人。丘は孔子の名なり。簡聞直。何れも未詳なり。摩胸。むねがいたいので。生鐵。眞金と生鐵と殊なること有り。

象外。未詳なり。嘍。嘍は「とりなく」、又は言多しなどなり。其。象外をさす、抖擻はかつさすなり。管得。管待なり。話墮。負け墮つるなり、論議などの時に敗を取ることをいふ。

巖頭。全體をいふ。輟餘薪。人人薪を添へて、熱鍋を扶けんことを要す。元上座。佛光自らをいふ。四稜蹋地。椽は椽、又は椽に作る、木の角のこと、椽は椽床、こしかけなり、こしかけの四隅の足が地につき居ること、不動者なるをいふ、安心の處に喩ふ。沒蹤跡。三千里外、錯つて擧げること莫れ。庭槐。さてさてまだ庭木は青

如し。今日四稜蹋地、身に和して放倒、也た諸人の知道せんことを要す。身を藏す處、沒蹤迹、沒蹤迹の處、身を藏さず。江山畫永く、殿閣涼高し、綠陰未だ庭槐に轉せず、清風先づ蘋末に起る。拂子を撃つて、「猛虎起屍、猫兒歎血。」

擧す、僧、古徳に問ふ、「如何なるか是れ道。」徳云く、「牆外底。」僧云く、「者箇の道を問はず。」徳云く、「甚麼の道を問ふ。」僧云く、「大道。」徳云く、「大道長安に透る。」師云く、「惺惺靈利を賣與し、懵懵瞋睡を賣與す。等しく是れ恁麼の時節、諸人且く作麼生。」

滿散 壽崇節上堂、妙徳莊嚴河沙の福、聚むる所種種の形を示現して、此の摩耶體に誕す。譬へば天樹王の如く、高廣世に比なし。一

國譯佛光圓滿常照國師語錄 卷一

華一佛坐し、三世一時に攝す。佛母陀羅尼功德不思議、我が大寶曆を福し、永く世の依怙と作らん。

乾會節上堂、九天閻闍貫流虹、曆應咸淳馭六龍、寶運更開三萬劫、須彌頂上一聲鐘。消災會、駱駝を焚く、佛一音を以て法を演説す、人天隨類各得解、汝既に身異類の中に行く、衆生處處の著を抜かんことを要す。點破す五濁如幻の事、煩惱を斷せず實相を證す。火を以て一圓相を打す。劫火海底常熾然、風鼓須彌自相擊。

國譯佛光圓滿常照國師語錄卷一 終

國譯佛光圓滿常照國師語錄卷二

住大宋台州真如禪寺語錄二

拈古

南泉示衆、昨夜文殊普賢、佛見法見を起す、各二十拄杖を與へて、二鐵圍山に賤向す。趙州、衆を出でて云く、和尚の棒、誰をしてか喫せしめん。泉云く、王老師、甚の過かある。州、禮拜す、泉、方丈に歸る。

「南泉、賊を抱いて判牘す、人口を塞斷すること能はず。趙州、評を以て直と爲す、爭奈せん也。曾て汁を呷ることを、如今還つて蓋覆する底ありや。良久して、若し頻に涙を下さしめば、滄海も也。た須らく枯るべし。」

滌山、仰山に問ふ、「妙淨明の心、汝作麼生か會す。」仰云く、「山河大地、日月星辰、滌云く、「汝只だ其の事を得たり。」仰云く、「和尚適來甚麼をか問ふ。」滌云く、「妙淨

- ①起佛見。まつすくに言へば、占波國に膏藥を賣る。
- ②和尚棒。和尚の賣りのこりの膏藥は誰か買ふぞ。
- ③判牘。判斷牘案なり。
- ④評。評曲なり。
- ⑤妙淨明心。楞嚴經の文なり。
- ⑥汝只其事。子を知ることは父に如かず。

明心。仰云く、「喚んで事と作し得てんや。」瀧云く、「如是如是。」

① 投子の道ふ底。

石樓因に僧問ふ、「未だ本來性を識らず、乞ふ師方便して便ち指せ。」樓云く、「石樓 耳朶なし。」僧云く、「某甲自ら非を知る。」樓云く、「老僧還つて過あり。」僧云く、「和尚の過、甚麼の處にか在る。」樓云く、「過汝が非なる處に在り。」僧禮拜す。樓便ち打つ。

棒あり、者の漢を打たずんば、也た平生に 孤負せん。

本生一日、拄杖を拈じて示衆、「我れ若し拈起せば、爾便ち未だ拈せざる時に向つて道理を作さん、我れ若し拈起せずんば、爾便ち拈起の時に向つて主宰と作らん。且く道へ山僧が爲人、甚麼の處にか在る。」時に僧あり出でて云く、「敢て 妄に節目を生せず。」生云く、「也た知る閑梨分外にあらざることを。」僧云く、「低低たる處、之を平ぐるに餘りあり、高高たる處、之を觀るに足らず。」生云く、「節目上更に節目を加ふ。」僧無語、生云く、「鼻を掩ふて香を偷み、空しく罪犯を招く。」

「指を以て指の指に非ざるに喩へんより、若かじ指に非ざるを以て、指の指に非ざるに喩へん

には也。馬を以て馬の馬に非ざるに喩へんより、若かじ馬に非ざるを以て、馬の馬に非ざるに喩へんには也。」喝一喝。

瀧山、仰山の方丈の外より過ぐるを見て、兩手を以て拳を握り、相交へて之に示す、仰山便ち女人拜を作す。

仰山の拜處、若し更に深きことを放さば、瀧山兩箇の拳頭、甚れの處に向つてか安着せん。

② 天仙因に僧來り參す、才かに坐具を展ぶ。仙云く、「時暄を通ずることを用ひず、我れに文彩未だ彰れざる時の道理を還し來れ。」僧云く、「口あり啞却す、即ち閑に苦死して箇の 臘月の扇子を覓めて甚麼か作ん。」仙、棒を拈じて打つ勢を作す、僧把住して云く、「我れに未だ拈せざる時の道理を還し來れ。」仙云く、「我れに隨ふ者は隨つて南北に之を、我れに隨はざる者は東西に死住す。」僧云く、「隨と不隨とは即ち且く從す、請ふ師東西南北を拈出し來れ。」仙便ち打つ。

「天仙、這の僧の肚腸を飽盡することを要す、者の僧、天仙の倉庫を空盡することを得んと要す。當初只だ道ふ、相逢ふことを喜ぶと。到底翻つて 怨離別と成す。」喝一喝。

- ① 向甚處。開帳ばかりあるま
- ② 天仙。仙の字は傳燈等には「偈」に作る。
- ③ 還我文彩。此の事は暗中に字を書するが如し。
- ④ 臘月扇子。無用物なり、何の渡世になると。
- ⑤ 成怨離別。中間の一步は寂然として物外に超ゆ。

- ① 投子道底。方語に、「漆桶不
- ② 石樓。石頭庵に關ぐ。
- ③ 耳朶。石樓は耳に蓋がない。
- ④ 也孤負平生。棒で育てぬ子は、門を出でて師に耻を與へるものなり。
- ⑤ 孤負。そむくこと、又辜負ともかく。
- ⑥ 我若拈起。暗裏に横骨を抽き、明中に舌頭を坐す。
- ⑦ 妄生節目。私は松風を唇皮にして是非を説いたことがない。
- ⑧ 掩鼻。李下に冠を笠さす、瓜田に屐を納れず、子は別人のそしりを招く。
- ⑨ 以指。莊子の齊物論にある語なり。

瀧山一日雨を見る、僧云く、「好雨」瀧云く、「甚れの處か是れ好處。」僧無語、瀧却つて云く、「大好雨。」僧云く、「什麼の處か是れ好處。」瀧雨を指して之に示す。僧又無語、瀧云く、「何ぞ大智にして黙することを得たる。」

等しく雨を見る、一人あり、身上濕はず、且く道へ、是れ那一人か身上濕はざる。或は云はん、者の僧身上濕はずと。納子謾じ難し。

天仙、因に僧參す、作禮せんと擬す。仙云く、「者の野狐、箇の什麼を見

て便ち禮拜す。」僧云く、「者の老和尚、箇の甚麼を見てか便ち恚麼に道ふ。」仙云く、「苦なる哉苦なる哉。」天仙失前忘後、僧云く、「要且つ時を得、終に補失せず。」仙云く、「爭か此の如くならざらん。」僧云く、「誰か甘ふ。」仙大笑して云く、「遠うして遠し矣。」僧目を以て回顧して便ち出づ。

天仙、照物の手あり、這の僧透消の眼あり、若し人辨得せば、也た是れ赤土牛、爛を塗る。

玄沙云く、「一法を見ざる、是れ大過患、且く道へ什麼の法を見ざる。」鏡清、露柱を指して云く、「是れ者箇の法を見ざること莫しや。」沙云く、「浙中の清水白米は汝が喫するに従す、佛法は未だ夢にだも見ざること有り。」

- ① 身上不濕。ふたり行く一人はぬれる昨雨かな。
- ② 赤土。赤土の清淨なるを、牛乳でぬつたがために、汚穢となりしかたち、これは説明すればするほど眞理に遠くなるをいふ。
- ③ 爛。乃咄の反、「れい」、母なり、乳なり、牛乳をいふ。
- ④ 一法。之れは玄沙が天下の純旨の悟りの垢を抜く毒油箭なり。

是は則ち是、樂しきときは則ち權を同じうす。知らず、家活を罄盡することを。瀧山坐する次で、仰山と香嚴と侍立す、瀧云く、「如今總に與麼なるものは少く、不與麼なるものは多し。」嚴、東より西に過ぐ。仰、西より東に過ぐ。瀧云く、「この則因縁、三十年後擲地の金聲ならん。」仰云く、「須らく是れ和尚の提唱にして始めて得べし。」嚴云く、「即今も亦少からず。」瀧云く、「狗口を合取せよ。」

「瀧山、子を養つて、恩威並び行ふ、只だ是れ二子向背異あり。且く道へ諸訛、甚麼の處にか在る。」喝一喝。

張拙秀才、因に禪月大師、指して石霜に參せしむ。霜問ふ、「秀才何の姓ぞ。」張云く、「名は拙。」霜云く、「巧を覓むすら尚ほ不可得、拙何れより來る。」公忽ち省あり、乃ち偈を呈して曰く、「光明寂照徧河沙、凡聖含靈共我家、一念不生全體現、六根纒動被三雲、遮、斷、除、煩惱一重増、病、趣、向、真、如、亦、是、邪、隨、順、世、緣、無、二、罣、礙、涅、槃、生、死、等、空、花。」

- ① 家活。いへのくらしむき、家計なり。
- ② 如今總。一年三百六十日は、冬至に至つて始めて一線の長きを添ふ。
- ③ 禪月大師。貫休、唐の昭宗時代の人。
- ④ 石霜。慶諸に嗣ぐ、諸は藥山嚴に嗣ぐ。
- ⑤ 礙。岩頭なり。

須彌、藕絲に繋がる。巖上座、徳山に到る、山見て便ち禪牀を下つて、坐具を抽んづる勢を作す。巖云く、「者箇は且く置く、忽ち心境一如底の人來るに遇はば、伊に向つて什麼と道ふてか、即ち諸方の檢責を被らざら

ん。「山云く、「猶ほ 昔日の三步に較ぶること有り、別に箇の主人翁と作り來れ。」歳 便ち喝す、山不語、歳云く、「這の老野狐の咽喉を塞却す。」後に僧あり、瀧山に舉似す。山云く、「歳公便宜を得と雖も、争奈せん耳を掩ふて鈴を偷むことを。」

「瀧山恁麼に 道地在り、殊に知らず、徳山、歳公に靠倒せらるること。を。還つて 歳公の與に屈を雪むる底ありや。」喝一喝。

米胡因に僧問ふ、「古へよりの上賢 還つて眞理を達すや也た無や。」胡云く、「達。」僧云く、「只だ眞理の如さんば、作麼生か達せん。」胡云く、「霍光、假銀城を賣つて單子に與ふ、契書是れ什麼人か做す。」僧云く、「某甲直に得たり口を杜ちて言なきことを。」胡云く、「平地に人をして 保を作らしむ。」

會すや、誰か知る歌舞の地、元是れ戰爭の基なることを。

栗樹因に僧辭す、乃ち云く、「若し諸方に到つて人あり、爾に老僧が此間の法道を問はば、作麼生か祇對せん。」僧云く、「他の問を待つて即ち道はん。」樹云く、「何れの處にか口なき底の佛ある。」僧云く、「祇だ者れ也た還つて難し。」拂子を豎起して云く、「還つて見るや。」僧云く、「何れの處にか眼なき底の佛ある。」樹云く、「只だ者れ也た還つて難し。」僧禪牀を遠ること一匝して出づ。樹云く、「善く能く祇對す。」僧便ち喝す。樹云く、「老僧子を識らず。」僧云く、「識らんことを要し。

- ① 昔日三步。外國の土を踏むやうな。
- ② 道地。佛道の種子、即ち成佛の種子を植うるところの義。
- ③ 歳公。歳公今日の鈍置。
- ④ 保。保は「とりで」城堡なり。
- ⑤ 誰知云云。日本でならば、大阪の道頓堀は、もと眞田が陣を張つた處じや。
- ⑥ 還見麼。風何の色をか作す。

て作麼せん。」樹、牀を敲くこと三下。栗樹と者の僧と也た行くこと七五歩を得、中間一兩歩、乾坤の外に出づ。見るや、葉零零兮秋暮半凋、草青青兮春暖齊發。

瀧山坐する次で、仰山侍立す、瀧云く、「寂子近日、宗門中の令嗣作麼生。」仰云く、「大いに 此の事を疑着す。」瀧云く、「寂子又作麼生。」仰云く、「某只管困じ來れば眼を合し、健なれば即ち坐禪す、所以に 未だ曾て説著せず。」瀧山云く、「者の田地に到ること也た得難し。」仰云く、「某が見處に據らば、此の一語を著くることも也た得じ。」瀧云く、「一人の爲にすること也た得ず。」仰云く、「古より聖賢盡く皆是の如し。」瀧山云く、「大いに人あり、汝が與麼の祇對を笑はん。」仰云く、「某を笑ふことを解するものは、是れ某が同參。」瀧云く、「出頭して作麼せん。」仰、禪牀を遠ること一匝、瀧云く、「古今を裂破す。」

仰山前頭は些子に較れり、後頭は又却つて深深、荒草堆頭に埋在す。瀧山力を盡して牽き得出で來るも、已に是れ 去死十分。還つて今日仰山に連累せらるる處を知るや。摘楊花摘楊花。藥山、僧あり到る、山問ふ、「甚れの處よりか來る。」僧云く、「南泉。」山云く、「三十年後、一頭の水牯

- ① 疑著此事。未だ安眠がならぬ。
- ② 未曾說者。二枚の舌で。
- ③ 大有人。大いに盲人の傀儡を関するあり。
- ④ 去死十分。十分に死に終ふせたるを云ふ、大死一番なり。
- ⑤ 還今日。まさぞびに出會つた。
- ⑥ 摘楊花。俗語のおさらばおさらば、支那にて別るる人に楊の枝を人の袂に入るる風あり之れを云ふ。

牛と作り去れ。僧云く、「彼の中に在りと雖も、曾て他の食堂に上らず。」山云く、「彌口西北の風を吸へ。」僧云く、「和尚錯ること莫れ、自ら把筋の人あること在り。」

者の僧、者裏に向つて、路を借つて經過す、藥山、那邊に在つて、物を観て税を收む。是れ千載一遇と雖も、只だ是れ土曠れ人稀なり。

仰山、東寺に問ふ、「一路を借つて那邊に過ぎ得てんや。」寺云く、「大凡そ沙門は只だ一路なるべからず、別に更に有りや。」仰山良久す、東寺却つて仰山に問ふ、「一路を借つて那邊に過ぎ得てんや。」山云く、「大凡そ沙門は只だ一路なるべからず、別に更に有りや。」東寺云く、「只だ此れあり。」山云く、「大唐の天子決定姓は金。」

一人は歸り了つて去ること得ず、一人は去り了つて歸ること得ず、何が故ぞ。牧羊河畔、女貞花、倚馬橋邊、望夫石。

仰山、中邑に問ふ、「如何なるか見性することを得去らん。」邑云く、「譬へば一室に其れ六窓あり、内に一獼猴あり、外に一獼猴あり。東邊より猩猩と喚べば、獼猴即ち應じ、六窓俱に喚べば俱に應ずるが如し。」仰山禮拜して起つて云く、「滴譬喩を蒙つて了知せずといふことなし、只だ内の獼猴瞋睡するが如きんば、外の獼猴見んと欲する時如何。」邑、禪牀を下つて、山の手を

- ① 他食堂。飯は食はぬ。
- ② 借路。婆が褌子を借りて幾年を拜す。
- ③ 觀物收税。飯を見て飢を忘れ鹽を見て渴を忘る。
- ④ 東寺。如會、馬祖に嗣ぐ。
- ⑤ 女貞花。れすみもち、白き花を開く、實はまるく、一名蠟樹といふ、葉は冬青(もち)に似たり、又さかきに似たり。
- ⑥ 望夫石。化石なり、遠方へ行く夫の離別を悲み、遙にその後姿を望み立ちて、そのまま死して化成せりといふ石。

執つて舞を作して云く、「猩猩、汝と相見し了れり也。」

中邑將に謂へり、仰山謾すべしと。他に一靠せられて、便ち見る尾巴俱に露はるることを。

本生因に僧、太原より來る、生云く、「近離那邊の風景如何。」僧云く、「此間と別ならず。」生云く、「且、道へ、此間の風景如何。」僧云く、「和尚と某甲と同じからず。」生云く、「草鞋を踏破して、當に何の事の爲ぞ。」僧無語、生云く、「即古即今、箇の問處を出づること也た難し。乃至老僧も亦出不得。」

本生這の僧に一坐せられて、天地黯黒。

瀉山、僧問ふ、「如何なるか是れ道。」瀉云く、「無心是れ道。」僧云く、「不會。」瀉云く、「不會底を會取せよ。」僧云く、「如何なるか是れ不會底。」瀉云く、「只だ是れ爾是れ別人にあらず。」

糞を擔つて茄子を栽うることは、須らく是れ瀉山にして始めて得べし。

性空因に丁行者來つて才に見ゆ、便ち打つこと一棒して云く、「汝が本來の眼を瞎却す也。」丁云く、「但だ今日のみ非ず、古人も亦此の令を行す。」空云く、「誰か汝に向つて古今を道ふ。」丁拂袖して出づ。空云く、「青天白日、路に迷ふ人あり。」丁云く、「指示を要すること莫しや。」空便ち打つ、丁云

- ① 被他一靠。他に一靠せられて、直に得たり忘前失後すること。
- ② 踏破草鞋。一法を見ずんば大過患、且、道へ、什麼をか見すと。
- ③ 瞎却汝本來眼。本道の契券を失ふ。
- ④ 青天白日。ああ性空、慈慧のための故に、話兩段となる。

く、人の眼を瞎却すること莫くんば好し。空云く、「俗人の眼を瞎却す、甚の過かあらん。」
丁行者只だ性空の舌頭を坐斷せんことを要す。性空の長處を見んと要せば、直に是れ天地懸に殊なり。

白水示衆、「眼裏沙を著くこと得ず、耳裏水を著くこと得ず。」僧問ふ、「如何なるか是れ眼裏沙を著くこと得ざる。」仁云く、「應真無比。」僧云く、「如何なるか是れ耳裏水を著くこと得ざる。」仁云く、「白淨無垢。」

綿綿密密、頭正しく尾正し、只だ是れ閻閻裏に坐在す。然りと雖も、分ち易きは雪裏の粉、辯じ難きは墨中の煤。

浮石上堂、「山僧箇の卜舖を開いて、能く人の貧富生死を斷る。」僧便も問ふ、「生死貧富を離却し、五行に落ちず、請ふ師直指。」石云く、「金木水火土。」浮石命懸絲の若し。

三平一日、侍者に問ふ、「姓は甚麼ぞ。」者云く、「和尚と同姓。」平云く、「我が姓甚麼ぞ。」侍者云く、「問頭何くにか在る。」平云く、「幾時か曾て爾に問ふ。」者云く、「姓といふ者は誰ぞ。」平云く、「汝が初機を念ふて、汝に三十棒を放す。」

若し是れ今日ならば、寧ろ僧堂を閑却すべけんや。何が故ぞ。石牛欄二古路、一馬没二雙駒。

丹霞・龐居士に見ゆ、門前に居士の女靈照、菜を洗ふを見る。霞云く、「居士在すや。」女、籃子を放下して手を斂めて立つ。霞又問ふ、「居士在すや不や。」女、籃を提げて便ち行く、霞便ち回る。居士外より歸る、女子前話を擧す。士云く、「丹霞在すや。」女云く、「去れり。」士云く、「赤土牛欄を塗る。」

只だ毒を以て毒を攻むることを知つて、知らず骨肉分離することを。

天仙因に披雲到る、才に方丈に入る。仙便ち問ふ、「未だ東越老人に見えざる時、作麼生か物の爲にす。」雲云く、「只だ雲の碧嶂に生ずるを見て、焉ぞ知らん月の寒潭に落つることを。」仙云く、「只だ恁麼ならば也た得難し。」雲云く、「是れ未だ見えざる時なること莫しや。」仙便ち喝す、雲兩手を展ぶ。仙云く、「錯つて人を怪むものは、甚麼の限りかあらん。」雲耳を掩ふて便ち出づ。仙云く、「這の漢の平生を死却す也。」

- ① 赤土塗牛欄。其の父を見んと要せば、先づ其の弟子を見よ。
- ② 以毒攻毒。此の赤土、靈毒癩を過ぐるが如し。
- ③ 不可以語上。中書堂程の事は未だ樵漁の家に入らず。
- ④ 鄭重。赤心片片。

天仙は非中に是あり、披雲は是中に非あり、各二十棒を與へん。何が故ぞ、中人以下には、以て上を語るべからず也。

來胡、僧に問ふ、「近離甚れの處ぞ。」僧云く、「藥山。」米云く、「藥山老子、近日如何。」僧云く、「大いに一片の頑石に似て相似たり。」米云く、「恁麼に鄭重なることを得たり。」僧云く、「爾が提掇の處なけん。」米云く、「但だ藥山のみに非ず、米胡も亦恁麼。」僧近前顧視して立つ。米云く、「看よ看よ頑石動せん。」

り也。」

這の僧恁麼に特達、是れ米胡にあらすんば、他の藥山多少の光彩を滅せん。

瀉山一日、野火を見て、乃ち道吾に問ふ、「還つて火を見るや。」吾云く、「見る。」瀉云く、「何れの處よりか起る。」吾云く、「經行坐臥を除却して、請ふ師別に道へ。」瀉便ち休し去る。

惜むべし瀉山最後の句なきことを、他の爲に一語を代らんと欲す。又

恐る瀉山甘はざらんことを、放過せば又恐る道吾に孤負せんことを。

必竟如何。赤脚にして桐城を下る。

石樓因に元康來る、樓才に見て便ち足を收めて坐す。康云く、「恁麼に

威儀周足なることを得たり。」樓云く、「汝適來箇の甚麼をか見る。」康云く、

「端なく人に領過せらる。」樓云く、「是れ恁麼ならば始めて眞見と爲ん。」

康云く、「苦なる哉、幾人をか 賺却し來る。」樓便ち身を起す、康云く、

「見ば即ち見よ矣、動せば即ち動かす。」樓云く、「力を盡して道ふとも定を出でず也。」康掌を拊つ

こと三下。僧、南泉に舉似す、泉云く、「天下の人、者の公案を斷ずること得ず、若し斷じ得ば他と同

參。」

石樓末後、箇の力を盡して道ふとも定を出でずと道ふ也。惜むべし前功俱に費すことを。元康

- ① 瀉便ち去。瀉山も死ねず、賊手、金を分つことを。
- ② 赤脚下桐城。又是れ袈裟に草鞋を裹む。
- ③ 石樓。汾州、石頭遷に嗣ぐ。
- ④ 賺。賺は「すかす、却は助字なり、だます」ことなり。
- ⑤ 盡力道。一事公門に入る、九牛拽(ひ)けども出でず。

掌を拊つこと三下、乞兒小利を見る、各三十棒を興へん。却つて是れ南泉 代つて喫す、何が

故ぞ、他の結款了せざるが爲に、累山僧に歎ぶ。屈あり也た 叫ぶ處なけん。

金峰示衆、「我れ若し舉し來らば、又恐らくは人の唇吻に遭はん、若し舉せずんば、又恐らくは 人

に怪笑せ遭れん。其の中間に於て、如何ぞ即ち是ならん。」時に僧あり出づ、金峰便ち方丈に歸る。別

に僧あり、請益して云く、「和尚甚麼に因つて、者の僧の話に答へざる。」峰

云く、「大いに失錢遺罪に似たり。」

衫を着け帽を裹むことは、他の三代相門に還す。

丹霞、龐居士に問ふ、「昨日の相見、今日に何似れ。」士云く、「如法に昨日

の事を舉し來れ、爾が與に箇の宗眼を著けん。」霞云く、「只だ宗眼の如きん

ば、還つて龐公に著得せんや。」士云く、「我れ爾が眼裏に在り。」霞云く、「某

甲眼窄し、何れの處にか安身せん。」士云く、「是の眼何ぞ窄く、是の身何ぞ

安せん。」霞無語、士云く、「更に一句を道取せば、便ち此の語の圓なることを得ん。」霞亦無語、士休し

去る。

是れ丹霞の兩黙にあらすんば、龐公爭か 葛藤楮子を露出することを得ん。

天仙因に僧來參、才に坐具を展ぶ。仙云く、「者裏に會得するも、早く是れ平生に孤負せん。」僧云

- ① 代喫。身がはりで面が赤い。
- ② 無叫處。こゑがわかれて了つた。
- ③ 人怪笑。客の挨拶さへ怪笑せらる。
- ④ 還他三代。お客の錢で酒丸買ふやうな真如の拈古じや。
- ⑤ 葛藤楮子。葛藤は文字言句にまとはれること。

く、「者裏に向つて會得せずんば、又作麼生。」仙云く、「者裏に向つて會せずんば、又甚れの處に向つてか會せん」といつて便ち打す。

柱に膠し絃を調ぶることは則ち故に是若し者の僧の口を塞斷せんと要せば、驢年ならん。

瀧山因に僧問ふ、「從上の諸聖より直に如今に至る、和尚の意旨如何。」瀧云く、「目前是れ甚麼ぞ。」僧云く、「只だ者れ便ち是なること莫しや。」瀧云く、「阿那箇ぞ。」僧云く、「適來祇對する底。」瀧云く、「爾那箇に擬し去つて事を生ずること莫れ。」

「釣錐不及の處、甚れの處にか瀧山を見ん。」喝一喝。

瀧山、僧問ふ、「如何なるか是れ百丈の眞。」瀧禪牀を下つて叉手す。又問ふ、「如何なるか是れ和尚の眞。」瀧禪牀の上つて坐す。

懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹る。

大川因に江陵の僧到る、川云く、「幾時か發足す。」僧、坐具を提起す、川云く、「特に遠來を謝す。」僧、禪牀を遠ること一匝して便ち出づ。川云く、「若し恁麼ならずんば、焉ぞ眼目の端的なることを知らん。」僧掌を拊つて云く、「人を苦殺して泊んど合に錯つて諸方を斷るべし。」川云く、「甚だ禪宗の道理を得たり。」後に僧あり、丹霞に舉似す。霞云く、「大川の法道は即ち得たり、我が這裏は即ち然らず。」僧云く、「和尚の此間作麼生。」霞云く、「猶ほ大川の三步に較ぶること有り。」僧禮拜、霞云く、「錯つて諸方を斷るもの多し。」

「丹霞徒に此の語あり、要且つ大川を識らず。」喝

瀧山、方丈の内に在つて臥す、仰山入り來り、瀧乃ち轉回して裏に向つて臥す。仰云く、「某は是れ和尚の弟子、跡を形ることを用ひず。」瀧起さる勢を作す、仰便ち出で去る。瀧召して云く、「寂子。」仰乃ち回り來る、云く、「老僧が箇の夢を説くことを聽け。」仰、低頭して聽く勢を作す。瀧云く、「我が爲に原せよ看ん。」仰、一盆の水、一條の手巾を取り來る、瀧面を洗ひ了つて才に坐す。香嚴入り來る、瀧云く、「我れ適來寂子と一上の神通を作す、小小到じからず。」嚴云く、「某下面に在つて了了として知ることを得たり。」瀧云く、「子試に道へ看ん。」嚴乃ち一椀の茶を點じ來る。瀧嘆じて云く、「二子の神通驚子に過ぎたり。」

山香嚴到底、惺惺にして、到底他に迷魂、裏裏に牽在せらる。然りと雖も、今日茶あり、也た一碗を著得せん。

仰山、東寺に參じて云く、「已に相見了也、上來することを用ひず。」仰云く、「恁のごとくの相見當ら

- ①柱。琴柱なり。即ち鐘聲鼓響を脣皮にして無根の談論をするは、之れでもよい。
- ②驢年。十二支の中になき年なれば、いつまでもはてしなきをいふ。
- ③眞。肖像なり。
- ④懷州云云。隻手の聲を聞くと粟も黍も京も田舎も、皆鼻孔下の腹じや、精を出せ。
- ⑤大川。石頭遷に嗣ぐ。

- ①猶較大川。大川行くこと三步なれば、丹霞行くこと半歩。
- ②有此語。大川、吸物に鼠の糞じや。
- ③惺惺。靜なり。
- ④裏裏。木橋なり、又疊なり。

ざることを莫しや。寺便ち方丈に歸つて門を閉却す。仰山、瀉山に舉似す、瀉云く、「寂子は是れ甚の心行ぞ。」仰云く、「若し恁麼ならずんば、争か伊を識得せん。」

東寺の險は、何ぞ瀉山の險に似かん。

丹霞、龐居士を見る、士面前に在つて立つこと少時あつて便ち出づ。霞顧みず、士却つて入り来る。霞と相對して坐す。霞却つて士の前に向つて立つこと少時、便ち方丈に歸る。士云く、「爾入り我れ出づ。未だ事あらざることに在り。」霞云く、「老人大大、出出入入、甚の了期かあらん。」士云く、「略些子の慈悲なし。」霞云く、「者の老翁を引き得て、者の

田地に到らしむ。」士云く、「什麼を把つてか引く。」霞乃ち把住し、^①幞頭を拈却して云く、「恰も箇の師僧に似たり。」士卻つて幞頭を將つて、霞の頭上に在いて云く、「一へに箇の俗人に似たり。」霞、應諾諾。士云く、「猶ほ昔日の氣息あること在り。」霞、幞頭を抛下して云く、「一へに箇の烏紗巾に似たり。」士、應諾諾。霞云く、

「昔日の氣息争か忘るることを得ん。」士、彈指して云く、「天を動じ地を動かす。」丹霞は是れ一代の龍門、分毫上に向つて利を取る。是れ龐公にあらずんば、幾乎と^②幞頭を失却せん。

貞溪、僧あり來參す。溪、拂子を豎起して云く、「貞溪老漢、還つて^③眼を具すや。」僧云く、「某甲敢て人の過を見ず。」溪云く、「老僧、閻梨が手裏に死在す。」僧、手を以て胸を指して便ち出づ。溪云く、「閻梨、先師に見え来る。」晚に至つて溪、請じて茶を喫せしむ。僧、盞を拈起して云く、「者箇は是れ諸佛出世邊の事。作麼生か是れ未出世邊の事。」溪、手を以て盞を撥却して云く、「閻梨、老僧が手裏に死在するに到る。」僧云く、「五里の牌は郭門の外に在り。」溪云く、「故なくして師僧を感亂す。」僧便ち起つて茶を謝す。溪云く、「特に相訪ふことを謝す。」

貞溪と者の僧と、皆是れ曾て^④霜雪を経るの人、猩猩酒を飲む、奈ともすることなし。忍俊不禁にして、未だ免れず一時に喪身失命することを。咄。幽州は猶ほ^⑤自ら可なり、最も苦なるは是れ新羅。

天童首座秉拂。除夜秉拂、僧問うて云く、「孟嘗門下、鷄鳴關を出づる時如何。」師云く、「汝は關を過ぐる客に非ず。」進んで云く、「法堂新創す、還つて新底の佛法ありや也た無や。」師云く、「梁は方に柱は圓なり。」進んで云く、「記得す、昔日僧、嵩山和尚に問ふ、「如何なるか是れ大修行人の人、擔枷帶鎖」と、此の意如何。」師云く、「青天電影なし。」進んで云く、「如何なるか是れ作業底の人、修禪入定と。此の意又作麼生。」師云く、「空室に居せず。」進んで云く、「山復た云く、「爾我れに善を問へば、善、惡に從はず、我れに惡を問へば、惡、善に從はず。」意旨如何。」師

① 幞頭。頭巾なり。
② 一箇箇烏紗巾。昔は此の頭巾に似たり。
③ 失却り頭。質に入れて遂に流して了つた。
④ 具眼。盲人の眼か具すや。
⑤ 幽州。中人以上は以て上を脱くべからず。
⑥ 青天無電影。おれの處には痰のつかへたものけない。

云く、「牛皮、露柱を 鞆る。」進んで云く、「者の僧悟り去る、又作麼生。」師云く、「錯。」進んで云く、「今日和尙に問ふ、如何なるか是れ大修行底の人と。」師云く、「獼猴、漆甕に入る。」進んで云く、「如何なるか是れ大作業底の人。」師云く、「汝が境界に非ず。」進んで云く、「兩頭俱に坐斷して、一劍 天に倚つて寒し。」師云く、「靴を隔てて痒を掻く。」進んで云く、「幾年か抱負す荆山の玉、今日方に才に賞音に逢ふ。」師云く、「果して是れ錯つて承當す。」

師乃ち云く、「一冬兄弟と火爐頭邊に眉毛厮結び、鼻孔厮挂ふ。大都そ家法森嚴、一語も敢て亂に發せず。新正改旦、滿頭の青灰、抖擻し落さざることを覺ゆるに似て、只だ諸人を引いて、宿鸞亭外、東行西行することを得たり。也た東家の籬落、西家の雞犬、風光高下平田に接し、暖日發生して春草 緑なることを知らしめんと要す。」左右を顧視して、「大衆還つて會すや、太白峰頭大いに雪の在るあり。」復た雲門乾屎橛の公案を頌す、乃ち云く、「劈腹剗心、千古無對、師子咬人、韓獺逐塊。」

結夏秉拂、師索話に云く、「古佛場開く、斬新の號令、當軒の布鼓、阿誰か撃つことを解す。」僧出でて問うて云く、「山前麥熟すること多時にしたる、一一機に當つて爲に擧揚す。正恁麼の時、請ふ師提唱。」師云く、「月子彎彎、幾州をか照す。」進んで云く、「護生は須らく是れ殺すべし、殺し盡して始

- ① 錯。ひきのばすの意なり、毛をむしりとるといふの字にして餘計なことをするをいふ。
- ② 倚天寒。電光影裏。
- ③ 太白。天童山なり。
- ④ 韓獺。極めて俊捷なる犬を云ふ、戰國策に故事あり。
- ⑤ 斬新號令。春風刀の如し。
- ⑥ 月子彎彎。月、彎弓に似ば、雨少くして風多し。

めて安居。箇の中の意を會得せば、鐵船水上に浮ぶ。如何なるか是れ護生は須らく是れ殺すべし。師云く、「五采、牛頭に畫く。」進んで云く、「如何なるか是れ殺し盡して始めて安居。」師云く、「牛頭は北に向ひ、馬頭は南。」進んで云く、「如何なるか是れ箇中の意。」師云く、「大地も載せ起さず。」進んで云く、「如何なるか是れ鐵船水上に浮ぶ。」師云く、「大石波斯看不破。」進んで云く、「九旬禁足魚網に遊び、物外の安身鳥籠に入る、生殺盡くる時蠶繭を作す。如何なるか這の三種を透得せん、應庵の意作麼生。」師云く、「三十三天氣毬を鞆す。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「機、機を奪ひ、智、智を遺る、雙放復た雙收、雙全復た雙破、大衆還つて會すや。萬松關、翠鎖亭前に到り、妙高臺、太白峰頂に到る。坦坦蕩蕩、岩岩蕩蕩、頭頭是れ生殺の機、處處 佛祖の路を斷す。圓覺伽藍、十風五雨、平等性智、水流花開く。所以に道ふ、峰巒峭時、鶴機を停めず、靈木岩然、鳳依倚なし。止不止、擬不擬、離邊の燕雀空しく呢喃、大鵬一展九萬里。笑ふに堪へたり西來の碧眼胡、人に 當門の齒を打落せらるることを。」

- ① 大地云云。地の山を載するが如し。
- ② 機奪機。去れば則ち印住し、住すれば則ち印破す。
- ③ 萬松關。翠鎖亭、妙高臺、かな天童の名所。
- ④ 斷佛祖之路。釋迦でも佛前でも面(つら)出しは出来ぬ。
- ⑤ 當門齒。こは寒いで話が出来ぬ。且く暖處に待て。
- ⑥ 眞金。眞金には自ら眞價あり、沙を和して人に賣與せず。
- ⑦ 不博論。諸人、餘を見て金を看す。

復た佛は是れ西天の老比丘の公案を擧す。乃ち頌に云く、「佛是西天老比丘、畢竟眞金、不博論、

放二是非一輕入一耳、從前知己反爲一讎、

冬至乘拂、師云く、「天童門下、古佛堂前、銅壺箭あり、誰をしてか敢て正眼に觀著せしめん。迦葉

の三昧、固より阿難の知る所に非ず。既に曰ふ、半座を平分すと。此れ

を外にして別に條章を立つべからず、只だ其の中間に就いて、子午卯酉を點

出することを得たり、還つて會すや。若し也た會せずんば、重新點出せ

ん。大衆一年十二月あり、一日十二時あり、一明一暗、一敲一唱、朝より

暮に至り、暮より朝に至る。情を盡して諸人に、攤向す、別に佛法の道理

なし、只だ諸人の知道せんことを要す。今年冬至定んで是れ十一月二十九

申の未未の初め、夜三刻を滅じ、晝九盞を添ふ、陰極り陽生じて、循環

住まらず。便ち見る無今無古、無去無來、無斷無續、無缺無餘。所以に道

ふ、一切過去劫、未來今に安置し、未來見在劫、過去世に安置す。玄機迅速、箭影回旋、斗轉じ星

移つて、眨眼を容れず。忽ち箇の久參の士あり、出て來つて道はん、爾は是れ東山下の兒孫、豈に知

らずや。瓜田に履を納れず、李下に冠を整へざることを。良久して云く、「若し頻に涙を下さしめば、

滄海も也た須らく乾くべし。」

鎖口訣

- ① 外此別云云。此の座敷を離れて、あきなひするでもない。
- ② 攤向。撒向に同じ、散の意。
- ③ 斗轉星移。盡く言ふ、今朝早を打して起くと、門前自ら夜行の人なり。
- ④ 瓜田不納履。是れが隻手の聲の中に居る人は見えぬ。
- ⑤ 鎖口訣。衲僧の口皮を鎖斷するの口訣なり。

諸佛妙門、

列祖の旨、

繼繼繩繩、

貴在二密契、

尺圍鑰合、

網紐沈細、

綿密無縫、

隱二括一幽秘、

遠兮非遙、

近兮非邇、

措無所遺、

舉無不備、

横亘十方、

豎窮三際、

理外無事、

事外無理、

具一切相、

含一切義、

啓無所開、

闔無所閉、

出無所從、

入無所詣、

二兮非一、

一兮非二、

用則雙用、

置則雙置、

隨處即宗、

如二身影一爾、

世尊拈花、

達磨分髓、

曹溪南嶽、

百丈臨濟、

楊岐白雲、

圓悟妙喜、

洎至二應庵、

五十一世、

或開或遮、

或權或體、

或逆或順、

或淨或穢、

或明或暗、

或行二異類、

激揚鏗鏘、

波流嶽逝、

如二師子筋、

如二象王鼻、

如二天鼓聲、

如二鳩鳥尾、

百千機緣、

河沙妙偈、

出沒卷舒、

三昧游戲、

深慈痛慈、

布二無緣施、

絕見絕聞、

絕情絶謂、

控二惡馬曹、

曰錯曰綜、

奪二魔王幟、

箭擲空鳴、

龍蛇天淵、

迷悟金屎、

不入二此宗、

徒勞二擬議、

曰放曰收、
風行塵起、

禮祖塔

禮二心鏡禪師塔

咒聲一出鬼神愁

甘露縵山百毒收

小白嶺分南北路

禮二宏智禪師塔

浮圖三透月明中

五葉重芳憶二遠公

古殿百年今又冷

鳳栖無三復到二梧桐

禮二應庵師祖塔

悞入二桃源深處路

灼然流水隔二天涯

一聲鷄唱千年後

老却劉郎幾度花

禮二密庵師祖塔

謾說二沙盆一重似山

不施三拜一也應難

黃金不鑄三黃金像

松竹相爭夜夜寒

禮二石門進禪師塔

一十九人齊悟道

下將二名字一上傳燈

我來聊爾伸三三拜

至今蛇咬三石饅頭

咒聲。禪師のまじなひには、

八萬の夜叉鬼神、九十六種の

外道も直に蹤か潜む。

小白。心鏡臺前に小白嶺、鏡

鏡として路が分る。

宏智。覺なり。

遠公。浮山なり。

鳳栖。鳳の如く麟の如き來宿

もない。

應庵。曇華なり。

悞入灼然。路に迷つて武陵桃

源に入つたが、目前の流水青

山は仙郷ではない。

一聲、老却。覆蹤は未だ鷄の

唱ふる邊に在らず、此の鷄聲

の中、劉郎眼中の繁花は、何

ん落ちたか數を知らぬ。

密庵。威傑なり。

松竹相爭。併し松聲雨竹、時

時に金玉を鳴すことあつて、

潤東の夜色未だ寂寥ならず。

石門進。傳は未詳なり。

伸三拜。坐具を伸べて三拜す

るより外はない。

乾溪。溪の流水に鉢盂を洗は

しめんことを要す。

陣陣。連ることなり。五臺山

上雲蒸飯より出づ。

物初。名は大觀、北欄簡に嗣

ぐ、大惠四世。

鄧嶺。天童の名所なり。

九龍。神龍擁護すれども、つ

らば出さぬ。

象潭。名は瀟湘、白雲に住す。

往來偈頌

壽二物初師兄

空山無人月入樓

空山無人月入樓

白玉齒菖吹二高秋

年年此日苦二炎熱

幾回同往不二同還

君方背二負須彌一至

一條古路沒二人行

耿然東望二鄧嶺頭

九龍蜿蜒不二敢傍

長與二塵寰一作二清冷

不知此夕是何夕

釋梵天邊花雨響

水遠山長太孤絕

消息盡時重會面

寄二 石林和尚

歲晚天寒信不_レ通、上方應_レ念白雲窮、柴頭米粒重敲點、

細雨斜風滿_二浙東_一、

寄二 龍石

方木從來不_レ逗_レ圓、幾回相拶下_二黃泉_一、回頭拽斷來時路、

塞北安南正悄然、

寄二 在庵

開_レ口明明是禍門、相逢彼此避無_レ因、三千條令從_レ頭舉、

今古希_レ逢不_レ犯人、

海中夜泊、懷_二仲舉師兄_一、

破頭船子打頭風、咫尺仙凡信不_レ通、

夜潮誰_レ在海門東、

送_三 橫川 主_二 鴈山 靈巖_一、

百戰金吾出_二 鳳城_一、不_レ論_二 滅_レ 竈_レ 與_レ 添_レ 兵_一、天高蕩月涼_レ 如_レ 水、

天巖法師、寄_二 示_レ 大禮禱晴疏_一、

柴門剝啄送_二 嘉音_一、

送_二 恩絕崖_一、

雖_三 然吐_二 得_レ 蔗頭甜_一、

送_二 章竺卿_一、

機先一探便抽_レ 兵、

薄沱風急正流_レ 水、

一語當頭略不_レ 分、

未_レ 到_二 黃昏_一 著_レ 閉_レ 門、

曲江夜話

大家相聚喫_二 莖齋_一、

水天空濶鴈聲微、

湖上諸庵闍辭、

教眼通身會者難、

擲_二 入_レ 鄴江_一 普請看、

塵塵刹刹布_二 全威_一、

國譯佛光圓滿常照國師語錄 卷二

六五

華雨堂前宿將旗、

刁斗只聞空劫外、

灼然誰敢犯_二 重圍_一、

一。有利無利、行市を離れず。

二。石林。名は行瑩、滅翁禮に嗣ぐ、松源三世、淨慈に住す。

三。細雨。細雨の浙東に今に断えれば業識の未だ断えざるがためなり。

四。黄泉。高々山頂行、深々海底行。

五。開口。如何なるか是れ臨濟下、口を開けば是れ禍門行。

六。三千。三千の威儀、八萬の細行。

七。横川。名は行洪、滅翁禮に嗣ぐ、松源三世、育王に住す。

八。天高。すみ渡つた空じや。

九。虚弓。雁の長空に過ぐるおと。

誰聴 虚弓落鴈聲

三冬黄葉地爐心。

不_レ堪_レ回_二 首_一 百城南、

驚失。あまり面白さに笑倒し破綻を續る針を失却した。

驚裏鹽。自然に相應して跡を見ずと。

彼彼。互に。

古劍。兩又交_レ 鋒。

山深。前途、虎に逢はば須らく回避すべし。

不_レ 敢_レ 堂。一度蛇に咬みて、斷井索を看るを怖る。

水天。然れども今何が目に入つてゐる。

刁斗。軍器、銅にて造る、晝は飯を焚き、夜は之を撃つて士卒を警む。

灼然誰敢犯_二 重圍_一、

六五

悼淨慈 斷橋和尚

去年一語不相當、
幾度思量再絕江、
不知契券落誰邊、
忽報藕絲牽玉象、
斷橋流水無人到、

寄東阜友山

齋魚粥鼓一般鳴、
三千里外垂鈎意、

莫去朝來送復迎、
端的何人別重輕、

題虛谷庵居

門外波濤正渺茫、
一笛斜陽釣艇橫、
斷橋無路與人行、
趙州曾到不曾到、

與一關葛藤

逆順門頭拶不開、
忽然平地起風雷、
德雲不下妙高頂、

慈氏宮中沒善財

打到南州與北州、
一錯證龜成鼈去、

納僧無處雪冤讎

寄象外

衲僧門下論知己

熱血相噴不露齒、
好花不肯當面貼、

各抱不平憤憤地、
幾回欲道道不及、
片板各自擔到底、
也是波斯入關市、

寄三少野主等慈席

棒頭翻覆雨傾盆、
雙放雙收用不停、
報化佛頭重按斷、

寒潮不取下滄溟

與雲溪一夜話

有作
一絲一線不相存、
通玄峰頂無人到、

揣剝家私徹骨貧

送東溟

無蟻難穿九曲珠、
一蹴瞎驢玄路絕、

兩滴巖花襯冷雲

慈雲諸公作頌

美玉凡物初和尚作塗之功、亦隨喜二偈
一蹴翻轉魚龍窟、

大海滔滔沒反回

香積不下從天外來

國譯佛光圓滿常照國師語錄 卷二

烏藤摩將又深藏、
松竹淒涼又一年、

斷橋。名は妙倫。無準に嗣ぐ、師と同參。

松竹。但だ雨竹風松、淒涼なる寒聲のみ。去年の空にさも似たり。

莫去朝來。寝ぬるも大地、起さるる大地。

別重輕。山よりも重く、葉よりも輕きことを。

虛谷。(ヒョク)。名は希陵、仰山の雪岩欽に嗣ぐ、無準三世。斷橋。驢を渡し馬を渡す石橋もまたぬ。

忽然。ここで關根子に便がある。慈氏。百千の彌勒、百千の善財也、電光中の紋書なり。

證龜成鼈。金瓦、價を同じうし、龜鼈、歩を并す。

論知己。士は己を知る者のために身を忘る。

不露齒。白い齒はみせぬ。

欲道。山を荷ふて驢穴に入るが如し。

棒頭。洞山三頓の棒、落處が見えると、三千大千世界の雨のかすかすに命絲をつなぐ。

報化佛頭。婆娑往來八千度。通玄峯頂。天台山にありと、親しき者は到らず、到るものは親しからず。

臥瞎驢。瞎驢を蹴つて斷溪橋を踏む。

玉凡。育王山なり。

物初。大觀、作塗はかべのぬりかへならん。

香積。世界、禪宗では庫司をいふ。

鐵鞭高舉越二耕牛、栗棘花開佛也愁、

別甌炊香只者是、

鉢盂無底更風流、

送二仁練溪國清後板

天台南石橋北、

三脚驢子弄蹄行、

未舉已是舌頭頰、

薦不薦兮落第二、

大野霜颺天宇空、

孤鴻標渺從何起、

勾頭有路滄溟窄、

坐斷當頭一付飽參、

南泉座上有二黃檗、

寄二南山維那平田

興化打二克賓、

克賓嗣二興化、

不知蜜苦似二黃連、

平田豈甘二同受屈、

倒却紅旗入他社、

纔見二他家令欲行、

直要堂頭老古錐、

眼睛耳聾并口啞、

更在二再三針筒看、

只恐癡聾元是詐、

阿呵阿呵阿魏無真、

水銀無假、

浩浩叢林如二海寬、

作麼爲君提二此話、

竹寄二古田軒扁

南陽一擊憩二窮塗、

客思難三將上二畫圖、

莫怪不除二當路筍、

與二象岑一夜二話天平兩錯

此をかりにたがへせんにしつす
差二之毫釐一失二千里、
不用那邊重斫額、

盡道一牛還二一馬、
一錘兩當便擒下、
仁練溪。未詳なり。
國清。寺號、十刹の一、台州
天台山教忠寺。
平田。名は洪、天封に住す、
斷橋に隔ぐ、無準三世、南山
は淨慈。
元是詐。盲人は眼開き、跛者
は快走し、啞者は能く言語す。

提此話。此の機な手形は弄す
る者があるまい。
南陽。香殿なり。
客思。旅愁の切なること。
尺短云云。人質にして智短
し、馬瘦せて毛長し。
轉姦生。一字公門に入れば、
九牛拔けども出です。
噬臍。臍をかむ程あせつても
何もない。
瑞侍者。不詳なり、この頃は
送行なり。
塵懸。瑞公が行つたならば、
あとで。
映斜陽。家裏の醜態。
莫説。おれが脚に大小あるか
ら、鞋袴の長短を語るな。
滿面慚。老眼にホロリと血の
涙が出た。
宛令江海。恐らくは海外の同
參、佛光が老婆禪を罵倒せ
ん。
媿深知。素寒貧で、家私も見

尺短終難比二寸長、年深法出轉姦生、饒君收二得當時款、
我要重還二赦後賊、

謝二玉几本末翁諸友相訪

放君不合到二巖栖、蕩盡生涯一只噬臍、有二箇自溪長柄杓、
也隨二明月一落二前溪、

送二瑞侍者

自笑塵懸折脚牀、又憐黃髮映二斜陽、山頭老漢如相問、

莫説蒲鞋有二短長、

送二昌兄行脚

因三君別我下二松庵、不覺回頭滿面慚、
去去却煩輕蓋覆、免令三江海罵二同參、

酬二月維那

遠臨寒谷、媿二深知、紅葉聲中踏二落暉、莫怪家風苦二岑寂、
十年松下掩二重扉、

次二足翁見招韻

提此話。此の機な手形は弄す
る者があるまい。
南陽。香殿なり。
客思。旅愁の切なること。
尺短云云。人質にして智短
し、馬瘦せて毛長し。
轉姦生。一字公門に入れば、
九牛拔けども出です。
噬臍。臍をかむ程あせつても
何もない。
瑞侍者。不詳なり、この頃は
送行なり。
塵懸。瑞公が行つたならば、
あとで。
映斜陽。家裏の醜態。
莫説。おれが脚に大小あるか
ら、鞋袴の長短を語るな。
滿面慚。老眼にホロリと血の
涙が出た。
宛令江海。恐らくは海外の同
參、佛光が老婆禪を罵倒せ
ん。
媿深知。素寒貧で、家私も見

青山斷處露雲凹、^①幾把家私入細敲、^②一夜北風雪沒屋、

主人太殺不相饒、

西天路滑人稀到、^③最苦難禁劈面風、

不敵機先謾擊展、^④白雲可是手頭窮、

寄二無文和尚、

歲晚天寒黃葉飛、^⑤飯糶無糝已多時、^⑥臨風幾度空惆悵、

只憶江西馬箠箕、

裔姪行脚、

出門荆棘已參天、^⑦不解騰身舉步前、^⑧放汝別參知識路、

快須洒落打行纏、

送小師一鏡行脚、

老矣叢林沒所成、^⑨聲前慚應本師名、^⑩行行牢記吾深囑、

三百年前有古靈、

天童琛五戒求頌、

嶺南消息又萌芽、^⑪米爲經籩飯沒沙、^⑫別有暗香遮不得、

團圓明月轉菱花

送三履姪見思溪石林和尚

拋出燈前一佛即心、^⑬十虛無地可容針、^⑭草鞋若也欺行色、

未失青若見石林、

龜蛇石

一石坡陀兩種紋、^⑮確然同隊不同羣、^⑯通身是汝通身我、

含毒那知左顧恩、

天庵

日月兩輪爲二戶、^⑰衲僧活計未蕭條、^⑱不知三十三重外、

爛却春風幾許芽、

佛成道

三更犬吠月沈時、^⑲酒冷茶寒彼此知、^⑳一笑面皮黃似我、

令人特地又相疑、

象潭見寄

湖山碧湖水碧、^㉑山靈水靈人共識、^㉒高禪著屋居其中、

せるが愧しい。

⑦十年松下。十年來、月外に人一人來ぬ、此の故に芳草の肥えたるを見てくれよ。

⑧足翁。名は麟、天童無際派に嗣ぐ、大惠三世。

⑨細敲。互に家裏の些子を論ず。

⑩劈面風。此の風の寒いので、而出しの人がないであらう。

⑪擊展は手も足も出ぬこと。

⑫手頭窮。今朝の霜風に手足がこころえ。

⑬無文。名は正傳、癡絶沖に嗣ぐ、松源四世。

⑭江西馬。江西の馬祖曰く、「溪邊の老婆子、我が舊時の名を呼ぶ」と。

⑮荆棘云。おれが金火箸を吞んで來い。でなければ年貢は入らない。

⑯古靈。名は神贊、百丈に嗣ぐ、これはおれが背中をうつ様になれと。

⑰五戒。五戒を受けたばかりの道心者なり。

⑱嶺南消息。嶺南は六祖、消息は應無所住。

⑲團圓明月。世界潤きこと一丈なれば、古鏡潤きこと一丈。

⑳草鞋未失。足に穿いた草鞋の上では相見は出來まいけれど、手に持った禿髻の上は相見が出來る。

㉑坡陀。不平の貌なり。

㉒通身是汝。吾れ汝を見ずんば焉んぞ吾れに率負せん。

㉓兩輪爲。兔飛び鳥走り、花開いて葉落つ。

㉔爛却。石爛れ松枯れ、黒火洞然たる後まで、天庵ばかり三災の愁がない。

㉕犬吠。一犬虚を傳へて、萬犬實を傳ふ。

㉖黃似我。其の弟子を見て其の師を知る。

精金不待增二黄色一、
一夏打發十三箇、
羅庵眼睛如二漆黑一、
妙中妙玄中玄、
意輪未動牙頰寒。

思彼妙喜洋嶼庵、
往往諸方爲二美談一、
大都黨理不黨親、
攬之不及鑽愈堅、
從來的的家法殿、
古之視今今視昔、
一路生機近不得、
殷勤欲語東風前。

迅雷轟破水晶宮、
錦標已在二畫橋東一、

經縵寒蛟上二碧空一、
一一眼睛方定動、

雪佛

一華擎出一如來、
摩耶宮裏不投胎。

六出團團笑臉開、
識得獨體元是水、

食二蒲萄一

珠回玉轉影團團、
若知二開口非干舌、

一夜滂澎雨未乾、
桂花數珠

秋風影裏走二摩尼一、
就中一線無二人見、

金粟全提向上機、

老兔推輪又過西、

送二廣南因上座一

祖師門下實堪悲、

千古雲埋少室衣、
此去風幡堂上去、

筆工

三寸圓齊藏二甲兵一、

光芒直與日爭明、
折衝只在毫端許、

送二正姪行脚一

荷擔此一著、

須還二筋力漢一、
直向二空劫前一、

一刀成二兩段一、

樵二殺老瞿曇一、
翻二轉魔王面一、
拋二下當頭熱鐵輪一、

塵塵刹刹風雷轉、

既明如二是復如二是、
白雲更有二

無絲線一、

莫教二觸二發流星箭一、

送二友人還廣

相逢眼上各安眉、

水遠山長彼此知、
閑憶趙州曾落節、

臺山路上勸婆歸、

瓦塔

要了二耽源未了緣一、

不二會引二玉甌拋磚一、

湘南潭北無二人到、

落在清溪淺水邊、

妙喜洋嶼。妙喜は大慈禪師、
號洋嶼は福州長樂縣にあり、
禪師ここに庵を建てて學徒を
説得す。
觀競渡。端午の日、龍舟を浮
べて標錦を争ひ取るなり。
寒蛟。舟をいふ。
在畫橋東。徒に競渡の人、已
に迷ひて物を逐ふ。
六出。六出は雪、雪佛に因む。
摩耶。勿論、雙樹下に涅槃は
ない。
滂澎。水の聲の形容、水波の
相撃つ聲。
珠回玉轉。宛轉又宛轉。
架下看。必ずしも珍しき風味
は蒲萄棚下ばかりではない。

何必防胡萬里城。
可憐無三語寄二閣黎一。
金粟。釋尊をいふ。
少室衣。達磨の風胸衣も潤色
はない。
可憐。佛光の道光を重んぜ
ず、人の爲に説破せざるを重
んず。
與口爭明。どこへも消息が通
ずる。
一刀。般若の一刀。
風雷轉。扇裏の緒餘は門外の
露布に同じからず。
觸發流星。流矢に當つて、深
村草裏に蟠ることなかれ。
落節。はめでなうつた。

亭山廟接待

堂前作舞呵呵笑、
看鐘鼓送殘暉、
餓飯知他欲餓誰、
窮鬼又來爭漆桶、

送三秋澗歸西州

五載相從伴寂寥、
月明後夜重回首、
又隔錢塘幾信潮、

送三友歸建寧

通身押得示一條條、
秋風又上洛陽橋、
背負乾薪被火燒、
更借一機看豹變、

送三僧承天見

入戶將何辨主賓、
絲毫有路休登陟、
須信雙峩不立塵、

天童侍者

堪笑耽源著賊時、
別放寒鷗不釣磯、
南陽武殺棒頭危、
爭知碧沼青松外、

送二隱監寺

楊岐門外滑如苔、
海山煙雨漲蓬萊、
大士開光明、
五蘊山頭鼓黑風、

撞牆磕壁證圓通

不不知眉底鬪體空、
悼穎侍者、
呼喚聲中懶出門、
拋下鬪體師子吼、

悼穎侍者

芽生舌上醜生脣、
南陽一路少行人、
碧海、
三千里外見魚龍、

碧海

蕩蕩天開水鏡空、
夜夜波心月似弓、
夢窓莊知客、
竿頭絲線不相到、

夢窓莊知客

屏簷關隔鎮深幽、
雙雙戲撲睡彌猴、
透出虛明六不收、
風暖化爲蝴蝶去、

勸婆歸。婆婆が身代を引つらへて取つて来た。
耽源。眞なり。
引玉亂抛磚。若し價を還さずんば、何ぞ眞偽を辨せん。
湘南。壽塔團團。
餓。餓はすゑる、すゑた飯は佛光が處の犬も食はぬ。
鐘鼓。かかる賑賑はしき接待も、昏睡と共に暮を引く。
相携。同行したけれども路はるかなるをいかんせん。迢迢は「はるか」なり。
又隔。錢塘からおれの處まで、何程の寒潮を隔てて、閑夢長からん。信は深なり。
更借。偷眼を開いて管孔の豹斑を見よ。
退耕。「ついかん」と讀む。名は德寧、靈隱に住す、無進に嗣ぐ、師と同參。

入戶。退耕の門戸に入つてなり。
雙峩。退耕山の山號か。
堪笑。丹霞、忠國師を訪ふの因縁。
棒頭危。二十棒にして越ひ出した。
爭知。ここに少し語訛がある。
放寒鷗。是れは龍子を生じたか、鳳兒を滅したか。
奪食驅耕。嘗て耕夫の牛を驅つて飢人の食を奪ふ、苗稼益盛んに、長く飢虚を忘す。
無路入。佛も祖も入不得。
眉底鬪體。無邊の利界も、おれが眼裡の點滴なり。
芽生舌上。之れが此の侍者の鬪體の穎錐じや。
南陽。國師三喚三應。
蕩蕩。平なる意、ゆんべりと。
見魚龍。魚龍も蝦鱗もすき透つて見える。
夜夜波心。寢夜、月のみ此の

庵中與二老母一守歲

燈前殘蕋 苦無多

三生煙冷舊磐陀

風攪長林雪滿牀

添得黃梁客夢長

東山消息久茫茫

饅頭無口孰添鋼

送古田住吉州祥府

廬陵米價又翻新

月明也有三醉歸人

送伏虎巖住石霜

出門便是草萋萋

何人猶聽五更鷄

鐺人小徐生求

嘉汝從師藝亦精

牽蘿伐我雪鬢

一錯路頭一啞峽遠
一錯路頭。猿の叫びを聞くに
ついて、路を錯つて昔の壩峽
や巴峽を遠方にし、母と歳を
守る。
③ 三生。南岳の三生岩、定めし
舊遊の地ならん。
④ 黃梁客夢。黃梁の一炊。隣で
やき米を作る夢を見る。
⑤ 東山。東山の左邊底。
⑥ 廬陵。青原志の因縁。古田の
出處のよき米が出ると價が騰
る。
⑦ 肅。ぞつとすることなり。要
津を斷すとは、川留めで、買
手を寄せつ竹漣。

意を知る、故に特特として見舞に来る。

⑧ 化。莊知客めが、ばけてなり。故事は莊子にあり。

⑨ 戲撲。窓内の睡獼猴と窓前の蝴蝶と相撲をとらせる。

⑩ 苦無多。餘命いくばくもなき母の身。

⑪ 一錯路頭。猿の叫びを聞くに

ついて、路を錯つて昔の壩峽

や巴峽を遠方にし、母と歳を

守る。

⑫ 三生。南岳の三生岩、定めし

舊遊の地ならん。

⑬ 黃梁客夢。黃梁の一炊。隣で

やき米を作る夢を見る。

⑭ 東山。東山の左邊底。

⑮ 廬陵。青原志の因縁。古田の

出處のよき米が出ると價が騰

る。

⑯ 肅。ぞつとすることなり。要

津を斷すとは、川留めで、買

手を寄せつ竹漣。

莫道曾逢二垢面僧

兵後、徐待詔求

世事興亡海上漚

留得青山對白頭

分水嶺接待

建了精藍一海塗

不爲看山展畫圖

戒犬

汝自耽耽擁砌莎

門前不用頻頻吠

漁樵耕牧

波濤險處見魚身

盲龜猶自隔重津

末上還他腕力能

依舊清風屬老盧

馬嘶荒草夕陽秋

寫成一幅似真如

一將謂山僧有二幾多

任從客賊自經過

三寸鈎頭百萬鈎

霹靂一聲天外去

一肩擔荷更無餘

黃梅七百閑枝葉

一聲彈鑼空三際

一響

一響

一響

一響

① 青原白家。青原は支那の酒の名産地、泉州といふところ、此の語は曹山録にある「青原白家三盞酒云云」に原づきていふ、青原の酒家に三杯の名酒を飲みながら、尙ほ嘗めもせぬといふ意にて、富貴にして尙ほ其の身の不足を訴ふるは何事ぞとなり、この意を轉じてここに用ふるなり。

② 月明。月明中に、又かかる米で造つた三杯の酒に酔ふて通る人がある。

③ 虎巖。淨伏、虛舟度に嗣ぐ、度は夢得並に、通は松源に嗣ぐ、徑山に住す、明極俊は師に嗣ぐ。

④ 千年折鐵。昔し李將軍も此處で鐵を損じ、自分も泥滑に躓倒した。

⑤ 鐺人。あたまそりなり。

⑥ 雪鬢。白髮頭なり。

⑦ 青雲客。上方の雲の上人。

祖師心印 鐵牛機、覆雨翻雲正此時、喜得衆生已成佛、
 黃金殿上脫二簑衣、
 黃犢村村睡二暖煙、
 誰在白雲青嶂邊、

水簾谷

千尺琉璃到地寒、中有二谷神呼得應、

洞門晝夜不曾關、
 不下將二面目一與人看、

天衣舊居

是師當日舊生緣、烹金爐鞴無二今古、

茅屋三間一釣船、
 莫看秋風鴈字邊、

栽松

一寸青青一屈伸、只圖鏤下起二龍鱗、
 白頭入草渾相似、

不二是 周家借宿人、

題二 巾峰

雨後閑登塔院秋、下二看危磴、
 海門月出 舒二長嘯、

① 彈鑊。鑊を彈じて、三世古今決算が出来た。

② 一幅。畫圖一幅。

③ 摩詰。維摩居士に慕ふて、王摩詰といふ名畫人あり。

④ 山。分水嶺なり。

⑤ 自。一本には自を目に作る。

⑥ 耽耽。垂れ耳のこと。

⑦ 霹靂。霹靂閃電光中、鑊を釣り去る。

⑧ 擔荷。何でも荷ひ起した。

⑨ 老盧。六祖大師なり。

⑩ 鐵牛機。去れば印住し、住すれば印破す。

⑪ 孤桐。絲篋の聲、蕉桐琴の聲が如し。

⑫ 琉璃。瀧のこと。

⑬ 天衣。懷禪師。

⑭ 茅屋。師は幼時、父に従つて漁す。

⑮ 烹金。茅屋釣船が金爐火未だ冷えず。

⑯ 莫看。師云く、譬へば雁の長

十萬人家盡擧頭、
 日者求二月斧號、

梅莊

不待二寸鐵一快如風、
 廣寒宮殿百千重、

一回爛熟便登場、
 彈二破 老龐牙頰一後、

鑄鐘

百鍊不三相干、
 喪却 燭 燼 邊、

拍拍歌兮拍拍吹、
 一笑千金付二與誰、

讀二 松源語一

一句無二前後、
 千差水 逆流、

機先打二獨脫、

鑼聲鼓韻不停撻、
 寸絲牽著和 棚動、

騰身烈燄前、
 騎聲蓋色漢、

錯落黃金 透核香、

至 今行旅 不賣糧、

空を過ぐるが如し、

① 白雲。いつも秋の白い雲がうかぶ。

② 舒長嘯。藥山の縁あり。

③ 日者。天文者のことなり。

④ 信手。吳剛月中の桂を斬つて月光増す。

⑤ 廣寒宮。月のみやこ、廣寒清虛の府。

⑥ 梅莊。うめのある下屋敷なり。

⑦ 一回。梅の實が。

⑧ 錯落。交加の貌。

處處錯安頭。

月居

通身都是廣寒宮、

可憐漏泄我家風。

煉丹道人

煉得靈丹一妙入神、

賣與諸方不病人。

月蓬

午夜撐船憶謝郎、

兩岸蘆花白似霜。

休復

黃閣簾開殺氣收、

也有三將軍打劍頭。

獨照

只這孤明何歷歷、

竊幽極暗發光輝。

更無一法堪遮障、

白日青天十二時。

空極

一抹斜陽萬里秋、

天光長與水同流、

欲標那裏爲疆界、

雁影回邊是盡頭。

冷泉聽猿

萬里吳江萬里天、

誰在巴山暮雨前。

夢中作

百丈當年捲起時、

不在東風著意吹。

送二姪姪行脚

千峯雪後望江湖、

又還聞子上京都。

題虎

獨坐枯木巖、

一嘯風悄悄、

衆生界未空、

我心終不飽。

老處。龐居士、大梅常訪ふの故事。

不覺。能く萬劫の飢を消す。

喪却。隻手の聲をきくと、三百六十の骨節骨節盡く失却し、八萬四千の毛髮毛髮共に盡す。

一笑。厚面の佛光も一笑して。

松源。崇岳なり。

逆流。順行逆行、圓轉縱橫。

真空。眞空、喉を透ること難し。

不病人。眼中に屑か添へて人には手渡すな。

難遮掩。四方八面、遮漏を絶す。

蘆花。月明の中にある。

作排牛。田地専らと成つた。

天光。秋水與長天、俱一色。

標。標出なり。

雁影。雁影に於て、おれが涙の乾いた時に言ふて聞かせよう。

冷泉。靈隱寺にあり。

巴山暮雨。おれも知らぬ、是の音聲を認め得る者、試みに請ふ之を道へ。

捲起。席を捲起した時。

東風。どこから來て、どこへ行つたやら。

脚底龜紋。老僧がひびあかきれが一年ましに多い。

破襪。あかされを隠す破れ足袋のひよさへない。

衆生界。佛の三不能の中。

我心。ここに二虎、口を開いてゐる。

重賞。無功の者は賞し、有功の者は罰せらる。

碎珊瑚。晋書の石崇傳にあり。

八陣圖。孔明の八陣圖。

寂寞。十年歸ることを得たり。

臨濟再參黃檗

重賞功前見勇夫

鬼哭神號八陣圖

主賓依位

蟬鳴木葉動

迎風當嶽立

寒夜

誰復問行藏

寄象外淨頭

壁根石帶重千鈞

阿誰堪上糞箕脣

無象

太平不用斬癡頑

不知天子作何顏

梅堂

朱涇口。船子の渡子と作りし處、朱水、涇水なり。

一點暖。深く深くはらへば、一點暖なり。

糞箕脣。塵取なり。何を拂つてちりとりに上す。

不知。無象和尚に子細に參ぜよ。

冰霜。是れ一番寒、骨に徹せず。

雪裏。分ち難きは雪裏の梅、辨じ難きは煤中の墨。

不干春。七佛以前は四時春色。

長異苗。家業を富ます。

後代。後代は兒孫、前代は先祖。

南壠。其の子を見て其の父を知る。

白雲菴。行狀の中にあり、邑の宰羅季莊、東湖の白雲菴を以て招く、師移りて母を食ふ、居ること七年、母亡す。

氷霜直與死爲憐

灼然花綻不干春

存耕

深深耕墾在今朝

後代不知前代力

白雲庵居咄咄歌

描不成兮畫不成

靈草無人滿地青

參禪不識主人翁

海天空闊有孤鴻

拶得文殊下五臺

古廟香爐上綠苔

刮盡毛兮折盡皮

撒手傍邊獨自歸

破屋修然萬境忘

雪裏何人認得親

壁倒籬圻君自看

雞犬聲中白晝間

四海只知天子貴

貴在三他年長異苗

却在南壠自肥饒

白雲影裏又新正

寒巖殘雪消將盡

癡拙無三人在下風

一曲村歌爲誰發

滿身風雪幾千回

灼然不負平生眼

骨頭迥迥任風吹

蕭牆禍起憑誰救

十年松下一蓑牀

滿地青。誰か鼠に象牙を抜いて、滿地青し。

不識。主となることは今はやめた。

癡拙。百不知百不能。

有孤鴻。村歌の和韻をする。

幾千回。しらが頭を何べん開帳するやら。

蕭牆。異類中行がこでない。

萬境忘。無喜無瞋。

何似。猪が短くて云へぬ。

蘿蔔。此の調、黃絹幼婦じや可深剛。兎角、産業を没却して年貢を入れよ。

清風。方に知る吾に辜負すと。

禁足安居。高高たる處、之を仰げば足らず、深深たる處、之を見れば餘りあり。

羚羊。子は父の爲に隱し、父は子の爲に隱す。

不勞更彫琢。本自天然、何假

露柱從他自放光

○

しらすなにももつてか、^①ふかくむくゆけん、^②たまくぢやうすをらつてしようじゆをた、かは

羅蔔拈來憶趙州、

不^①知將^②底、可^③深酬^④、偶將^⑤二丈子^⑥一敲^⑦二松樹^⑧、

浩浩清風起二樹頭、

長松雨過綠陰重、^⑨莫^⑩言圓覺伽藍小、

禁足安居誰似我、

掛^⑪角^⑫、^⑬羚羊不^⑭露^⑮蹤、

不^⑯勞更^⑰彫^⑱琢、

本體自^⑲天然、懸崖機路絕、^⑳枯木夜啼^㉑、^㉒猿、

揭地風雷、

日月奔、^㉓塵沙海口一齊昏、^㉔快哉、^㉕臨濟辭^㉖二黃檗、

三頓烏藤、

贈^㉗出門、^㉘待^㉙なさい、未^㉚だ言^㉛ひ殘^㉜したことがある、

千山風雪、

偃^㉝孤蹤、^㉞西天路不^㉟通、^㊱憶^㊲着^㊳、^㊴普通年遠事、

老猿啼上、

最高峰、

浩浩叢林擊、

法雷、^㊵飯羅無^㊶底、^㊷可^㊸憐^㊹生、^㊺風流出^㊻格^㊼誰^㊽相^㊾肖、

引^㊿得燈籠一笑口開、

守^㊽盡今宵一^㊾是^㊿一陽、

月下、

擇^㊽船有^㊾二謝^㊿郎、^㊽家風^㊾凄^㊿冷客^㊽蹤^㊾希、^㊽當^㊾門^㊿撞^㊽破^㊾蜘蛛^㊿網、

一納蒙頭息、

二萬機、^㊽獨有^㊾二春^㊿深^㊽燕^㊾子^㊿歸、

彫琢の古語より出づ。

① 猿。猿に同じ。

② 日月奔。日月光を沈め、乾坤色を失す。

③ 臨濟辭黃檗。子は父に負き、父は子に辜く。

④ 贈出門。待ちなさい、未だ言ひ殘したことがある。

⑤ 西天路不通。佛も祖も路が斷つてゐる。

⑥ 普通年遠事。遠磨西來のこと。

⑦ 最高峯。最高峯高うして人見えず、猿啼白日又黄昏じや。

⑧ 法雷。諸方は賑はしい。

⑨ 飯羅無底。めしざるに底がないので。

⑩ 擇船。蜆を撻し蝦を弄す。

ひとりあるふかうしてえんのかへるあり、
獨有二春深燕子歸。

烏藤突兀冷粘雲、

貴爾無^①慚、^②道用^③親、^④只合^⑤二橫^⑥肩^⑦入^⑧深^⑨去、

莫留影跡礙行人、

破瓶頸短嘴何長、^⑩松火微鳴野菜香、^⑪畢竟不^⑫堪^⑬二^⑭為^⑮世^⑯獻、

衆毒交橫日夜煎、

法身病在^⑰二色^⑱身^⑲前、^⑳藥翻^㉑二沙^㉒銚^㉓一^㉔成^㉕二狼^㉖藉、^㉗火亂^㉘灰^㉙飛^㉚落^㉛二枕^㉜邊、

黃皮裹骨露深坳、

木落^㉝山^㉞空^㉟病^㊱轉^㊲聲、

醫不得時誰下手、

從^㊳他^㊴突^㊵兀^㊶挂^㊷二青^㊸霄、^㊹就^㊺中^㊻曲^㊼直^㊽誰^㊾分^㊿辨、

三喚何曾拔一毛、

三應無^㊽地^㊾著^㊿二秋^㊽毫、

雨過秋山露石凹、

擬^㊽二欲^㊾遮^㊿藏^㊽一^㊾沒^㊿處^㊽安、

未言二爺諱、

膽^㊽先^㊾寒、^㊽白^㊾蘋^㊿紅^㊽蓼^㊾自^㊿分^㊽攤、

不用西風苦爭戰、

誰^㊽云^㊾無^㊿二電^㊽不^㊾乘^㊿龍、

選佛高科貴識空、

拚^㊽二得^㊾身^㊿一^㊾行^㊽二異^㊿類^㊽中、

道吾不^㊽負^㊾二^㊿雲巖^㊽間、

生^㊽柴^㊾燒^㊿火^㊽泣^㊾二寒^㊿蟲、

門掩二長林、

雪^㊽攪^㊾二^㊿空、^㊽因^㊾思^㊿達^㊽磨^㊾當^㊿門^㊽齒、

打落神州赤縣東、

石^㊽上^㊾開^㊿敲^㊽一^㊾兩^㊿聲、^㊽潤^㊾底^㊿沙^㊽禽^㊾忽^㊿飛^㊽出、

黃泥黏^㊽二^㊿鏝^㊽雨^㊾初^㊿晴、

石^㊽上^㊾開^㊿敲^㊽一^㊾兩^㊿聲、^㊽潤^㊾底^㊿沙^㊽禽^㊾忽^㊿飛^㊽出、

① 烏藤突兀。山形となり、雲影とたる。

② 道用親。扶過斷橋水、伴歸無月村。

③ 破。異本「砂」に作る。

④ 爲世獻。門外には出し悪い家私じや。

⑤ 幾回提掇。只だ氣の毒なことには、淨瓶の水か出し手がな

い。

⑥ 衆毒。砒霜、狼毒など。

⑦ 藥翻。急急に須らく回避すべし。

⑧ 木落。やせかれて。

⑨ 聲。強情なるをいふ。

⑩ 誰下手。換骨の靈方にて。

對人如喜 又如驚

●膽先寒。禪杯震却す。

莫魁種得大如拳

不怕深冬百衲穿

火冷雲深消息絕

●選佛高科。心空及第して始めて得べし。

從教黃葉滿二塔前

試問時人會也麼

白日豺狼趣二麋鹿

●道吾。眞なり。

住山活計苦無多

秋來老竹添二新笋

雨後長松墮二爛柯

●當門齒。缺齒の故事

青霄鬼魅出二煙蘿

不自興來歌二一曲

不知濟北起二寒波

●潤底沙禽。鑿聲に驚いて鳥が飛んで出た。

每自興來歌二一曲

燈盡無二油紙燃乾

坐到三更室生白

●從教。閑人のために生簪を舉する意もない。

閑思 鍋竈幾千般

冷灰隨二分展二陽和一

壓頭老瓦雖二無幾

●濟北。諸方の佛法浩浩たり。

壁邊主丈照人寒

更 剪二長條一引二薜蘿

呼二童妾一草小窓前

●今歲。去年猶ほ卓錫の地あり。

迅機顛 蹶欲翻二天

不依二本分一要二參禪一

也能著二屐上二簷竿一

●剪長條。邪魔になる枝を剪る。

呼二童妾一草小窓前

雨歇黃泥軟二似綿

不覺觸二他蚯蚓一怒

●封皮。上書きばかり。

錯把二 封皮一作二信傳一

不識 東山左邊底

不識 東山左邊底

●東山左邊底。五祖法演禪師の故事、東山は師の住庵地。

也能著二屐上二簷竿一

萬里清風付二與誰一

工夫不到二冰霜外一

●交參。朝暮暮參。

預將二消息一報二春前一

莫說吾家 主丈邊

莫說吾家 主丈邊

●萬里。脚前脚後清風。

千歲孤根石一拳

交參那貴著鞭遲

萬里清風付二與誰一

●主丈邊。紛紛として多くは半途の中にあり。

梅巖

萬里清風付二與誰一

萬里清風付二與誰一

●主丈邊。紛紛として多くは半途の中にあり。

葉葉冰霜動二四維一
目前不解推二門入一

交參那貴著鞭遲
萬里清風付二與誰一

萬里清風付二與誰一
工夫不到二冰霜外一

莫說吾家 主丈邊
萬里清風付二與誰一

國譯佛光圓滿常照國師語錄卷二終

國譯佛光圓滿常照國師語錄卷三

住日本國相州巨福山建長興國禪寺語錄

侍者 德溫 等編

日本國副元帥平 時宗請帖 [見存二圓覺]

時宗、意を宗乘に留むること積んで年序有り。梵苑を建營し、緇流を安止す。但だ時宗毎に憶ふ、樹は其の根有り、水は其の源有りと。是を以て宋朝の名勝を請じて、此の道を助行せんと欲し、詮・英二兄を煩す。鯨波の險阻を憚ること莫く、俊傑を誘引して、本國に歸り來るを望と爲す而已。不宜。

弘安元年戊寅十二月二十三日

時宗 和南

詮藏主禪師 英典座禪師

① 德溫。もと蘭溪の徒弟なり。
② 時宗。北條時頼の子、相模太郎、法名は道果、法光寺殿と稱す、北條八代の執權なり、弘安七年薨す、年三十四。
③ 詮・英。皆隆嗣溪の徒弟なり。
④ 弘安元年。南宋の帝、祥興元年、元の世祖至元十五年なり。

師、大宋國天童山景德禪寺に在つて受請す。辭衆上堂、天童 環谿和尚、衣を付し罷んで、師、衣を拈起して云く、「世尊、金襴を傳ふる外、別に箇の甚麼をか傳ふ。」手を以て指して云く、「師兄が過爾に在り、殃我れに及ぶ。」遂に座に就く。時に僧有り、出でて問うて曰く、「動くことは行雲の若く、止まることは猶ほ谷神の如し。既に彼此に心無し、豈に去來に象有らんや。今日和尚遠く扶桑に赴く、且く道へ有心か無心か。」師云く、「一片の月海に生ずれば、幾家の人が樓に上る。」進んで云く、「和尚、大唐東山の宗旨を將つて徒に示す、今扶桑に往いて、何の方便をか作さん。」師云く、「爾海を隔てて聽取せよ。」進んで云く、「但だ扶桑、雨露を承くるのみに非ず、大唐國裏も亦恩に霑ふ。」師云く、「將に謂へり人無しと。」
師乃ち云く、「祖師海を逾え、漢を越えて中華に至る、大法の傳ふ可き有り。今日日本の平將軍、遠く山僧を招く。山僧知らず何の巴鼻か有る。」良久して、大衆を顧視して云く、「所以に道ふ、羽嘉應龍を生じ、應龍鳳凰を生ず、鳳凰衆羽を生ず。但だ看よ雲駛して月運ることを。説くこと莫れ舟行いて岸移ると。諸人若し也た會得せば、朝々相見、其れ或は未だ然らずんば、遠く孤帆を引いて依戀に勝へず。」

結座、世路艱危にして故人に別る、相看手を握つて頻なることを知らず。今朝宿鷺亭前の客、明日扶桑國裏の雲。

山門疏

日本國建長禪寺本寺住持、見に闕く、大將軍元帥の鈞命を奉り、恭しく太白首座前真如和尚を請じて、開堂演法せしむる者なり。

右伏して以れば、此土大乘の器有り、老胡廻ち西より來る。我が國闡提の人無し、聖教東に漸流し去る。白叟黃童咸く洵汰に歸す。重臣世主、力めて咨參を爲す。端に導師を請じて、遠く勤命を將つて、共しく

惟れば、新命堂頭和尚大禪師、氣佛祖を呑み、眼乾坤を蓋ふ。圓照向上の關を透る。芝溪水千尋浪激す、環谿の第一座を分つ。曇華室萬仞墻高し、日本の爲に司南車と作る。盡大地成佛の分有り、

建長に向つて濟北の道を弘む。阿那箇か命根を斷せざる、蘭漿江阜に近し、即ち誠を開士に傾く。金風杖屨に生じ、徑に望を將軍に尉す。正令全提せば、輿情胥悅ばん。

知事比丘

禪

山門疏

江湖疏

江湖恭しく審にす 前任真如無學和尚、日本巨福名山建長禪寺虔請の命に榮赴して、大いに家風を振ひ、益正續を隆にす。詞を合して勸勉する者なり。

右伏して以れば、日本國、佛法に尊事し、以て聲を馳するに足れり。平將軍家風を嚴肅す、特に爲に主を請す、大いに四明の開士を以てす。偉

いなる哉巨福の叢林、明社輝を増し、宗門慶多し。冀しく惟みれば、新命巨福名山建長寺無學和尚、道、人天に冠らしめ、行氷雪を欺く。

靈隱・長庚の半座に據り、圓照北磻の全機を起す。台山を拂袖す。未だ磻陸に考槃することを許さず、機を宿鷺に忘る、豈に園林に坦腹すべけんや。半天の帆薰風に展ぶるを見る、萬里の波夜月を

搖すを咲ふ。權聲道を載せ、衣冠人物競つて奔迎し、瑞氣空に凝る、海岳神靈俱に擁衛す。時々授道、處々度生。慧日を中天に掲げ、慈風を大地に扇ぐ。故園の松菊恙無し、應に佳音を寄すべし。晚學衣孟未だ承けず、當に回駁を觀すべし。謹疏。

普明 克明 定燦 修義 大章 清曉 師夔 慧鏡 淨因 了坤 法通 梵志

國譯佛光圓滿常照國師語錄 卷三

如濟 悟慈 覺心 正心 惟一 聞思 可信 了樞 正致 宗建 智祥 處恭
弘安二年八月二十一日入院。

山門を指して云く、「兎走り鳥飛び、山高く水急なり。一步相 到らず、手把つて拽けども入らず。」

佛殿を指して云く、「釋迦・地藏、曲を拗して直と作す。今朝狭路に相逢ふ、從頭勸過して始めて得ん。」良久しく云く、「將に謂へり候白と、元是れ候黒。」

據室、云く、「大冶の紅爐 蚊蚋を容れず、一鎚の下に翻身せば、方に金毛の獅子を見ん。」

拈筈、筈を呈起して云く、「山僧平日、木榎子を將つて、天下の人の眼晴に換御す、今日甚に因つてか卻つて這箇に鼻孔を穿御せらる。大衆會すや。鞍を負ひ鐵を銜む、方に對頭に遇ふ。」

山門の疏を拈じて云く、「木を撃てば聲無し、空を敲けば響を作す。海濶く山遙に、風高く月冷し。」

江湖の疏を拈じて云く、「毀也毀盡し、讀也讀盡す。佛殿に東司を掘り、茅屋に鴟吻を安す。」

法座を指して云く、「身は虚空に等しく、座は虚空に等し。」良久して云く、「鶴に九阜有り、翼を

げ難く、馬に千里無く、謾に追風す。」驟歩して登座す。祝 聖拈香して云く、「此の一瓣の香、恭しく爲に祝延したてまつる。

今上 皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭しく願はくは日の明かなるが如く、天の普きが如し。九州共貫、有截の區を幷包す。三景同光、無疆の祚を申へ錫はんことを。」

次に拈香して云く、「此の一瓣の香、仰いで 大將軍都元帥國公を祝す。伏して願はくは福は大地の春の如く、壽は劫石の固さに同じ。祿算を資倍し、永く邦家を祚せんことを。」

次に拈香して云く、「此の一瓣の香、仰いで 相模太守都總管を祝し、伏して願はくは福、滄海に同じく、壽、須彌に等しく、長く佛法の 金湯と爲り、永く皇家の柱石と作らんことを。」

次に拈香して云く、「此の一瓣の香、懷にし來ること三十餘年、未だ嘗て容易に拈出せず。爐中に熱向して、前任大宋國徑山佛鑑禪師 無準大和尚に供養す。用つて法乳の恩に酬いたてまつる。」

師、衣を斂めて座に就き、索話、「垂絲千尺意深潭に在り、釣を離れて三寸、道ひ得る底有ること莫しや。」僧問ふ、「平生自ら笑ふ閑なること能はず、迢遞として來登す巨福山、只だ少林の無孔笛を把つ

①弘安二年。この年五月、天皇が離れ、六月日本の太宰府に著く。
②不倒。親しきものは到らず、到るものは親しからず。
③拗曲。いろいろせわをしてなり。
④蚊蚋。大いに蚊蟲、手脚を侵す。
⑤金毛。丈夫の漢の意。
⑥木榎子。菩提樹の實なり、多くは數珠の珠とす。
⑦毀也。惡を以て惡を遣る。
⑧讀也。善を以て善を抜く。
⑨佛殿。金屎、光を交ふ。

⑩有截。窮屈で氣がつまる。
⑪三景。日月星、是れなり。
⑫大將軍。惟康親王をいふ。
⑬祿算。壽命のこと。
⑭相模太守。北條時宗公なり。
⑮金湯。金城湯池なり、攻むべからざるをいふ。
⑯無準。師範、破庵先に嗣ぐ。

て、聲聲吹き出せ萬年歡。學人上來請ふ師祝。聖。師云く、「南嶽峯頭八字の碑。僧云く、「未だ宋朝を離れず、已に扶桑に到る。如何なるか是れ不動尊。」師云く、「五月太白を離れ、八月建長に到る。僧云く、「既に扶桑に到る、願はくは提唱を聞かん。」師云く、「銅沙羅裏の滿盛油。」僧云く、「記得す、寶壽開堂、三聖、一僧を推し出す、此の意如何。」師云く、「書に據つて客を請す。」僧云く、「寶壽便ち打つ、又作麼生。」師云く、「家貧にして素食を辨じ難し。」僧云く、「只だ三聖道ふが如き、與麼に人の爲にせば、但だ這の僧の眼を瞎卻するのみに非ず、鎮州一城の人の眼を瞎卻し去ること所在らんと。意作麼生。」師云く、「怪むこと莫れ、坐來頻に酒を勸むることを、別れてより後、君を見ること稀ならん。」僧云く、「只だ寶壽拄杖を擲下して、便ち方丈に歸るが如き、又作麼生。」師云く、「一場の狼藉。」僧云く、「且く道へ、今日堂頭和尚、開堂演法、還つて爲人の處有りや也た無や。」師云く、「有り。」僧云く、「如何なるか是れ和尚爲人の處。」師云く、「虎を射る真ならざれば、徒に羽を没するに勞す。」僧云く、「只だ相模の太守、和尚を請じて名山を坐鎮せしむるが如きんば、畢竟何の祥瑞か有らん。」師云く、「九包瑞彩を呈し、獨角滄溟を出す。」僧云く、「還つて學人が讚嘆を許さんや也た無や。」師云く、「何の不可か有らん。」僧云く、「近水樓臺先づ月を得、向陽の華木春に逢ひ易し。」師云く、「一半を道ひ得たり。」僧禮拜す。師乃ち云く、「我が法印、世間を利益せんと欲するが爲の故に説く、在所遊方、妄に宣傳すること勿れ。釋迦老子、

●南嶽。夏の萬の碑あり。
●印。去れば印住し、住すれば印破す。

此の印を將つて摩訶大迦葉に付囑し、摩迦大迦葉二十餘傳して菩提達磨に至り、菩提達磨二十餘傳して此に至る。大衆を顧視す。良久して云く、「山僧未だ大唐を離れざる已前、將に謂へり日本の禿僧白日に燈を點じ、鹽を將つて渴を止むと。到來するに及んで、箇箇眼横鼻直、人人立地頂天。山僧當初也た如何若何と要す。此に到つて一場の懺懺、只だ便ち此の印を將つて諸人と一印に印定するを得。更に敢て一絲毫許りを移易せず、甚としてか此の如くなる。」卓拄杖一下して云く、「秋高うして天影直く、海濶うして浪に聲無し。」復た擧す、
●白侍郎。鵲巢和尚に問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」巢云く、「諸惡莫作衆善奉行。」白云く、「三歳の孩兒も也た道ひ得たり。」巢云く、「八十の老翁も行不得。」白、省有り。師拈じて云く、「鵲巢の用處、龍王宮殿の千波萬浪の外に在るが如し。若し白侍郎、海に航し山に梯するに非ずんば、鎮海の明珠、争か國に到ることを得ん。然り是の如くなりと雖も、我れを笑ふ者は多く、我れを晒ける者は少し。」
當晚小參、僧問ふ、「鐘已に鳴り鼓已に絶え、人天普集龍象交參す、正與麼の時、請ふ師提唱。」師云く、「八角の磨盤空裏に走る。」僧云く、「記得す、徳山小參、答話せず、意旨如何。」師云く、「舌頭、地に捲く。」僧云く、「越州小參、却つて答話す、又作麼生。」師云く、「參天の荆棘。」僧云く、「二大老の如き

●如何若何。どうかと怪んだ。
●到此。日本に来て顔が赤くなつた。
●白侍郎。樂天居士のこと。
●鵲巢。鳥窠和尚をいふ。
●八角磨盤。前に出づ。磨盤は石白なり、石白も圓なれば轉ぜざるにはあらねども、八角にては轉じ難し、然るに空裏を走るといふのは。

一人は答話し、一人は答話せず、意何くにか在る。師云く、「針筒不入。」
是が不答者是か。師云く、「黄河連底の凍。」僧云く、「和尚今夜小參、是れ答
話せんか答話せざらんか。」師云く、「已に是れ 龜毛長きこと三尺。」僧云
く、「樵子の徑に因らずんば、争か葛洪が家に到らん。」僧禮拜す。師云く、
「未だ敢て相許さず。」師乃ち横に主杖を按じ、大衆を顧視して云く、「與麼
に来る者も鐵壁鐵壁、不與麼に来る者も 鐵壁鐵壁。兩重の關を透得す
るも、鐵壁復た鐵壁。爾に饒す須彌頂上、金鐘を撃ち、娑竭宮中日月
を見ることを。諸方 明窓下に按排せば、老僧一棒も也た恕すこと得ず。
所以に道ふ、直に盡乾坤大地、織毫の過患無きことを得るも、猶ほ是れ轉
句、一色を見ざるも、始めて是れ半提。全提の時節を見んと要すや。」卓
拄杖して云く、「鐵壁鐵壁。」復た擧す、僧、曹山に問ふ、「璞を抱いて師に
投ず、請ふ師雕琢。」山云く、「雕琢せず。」僧云く、「甚と爲てか雕琢せざる。」
山云く、「須らく信す可し、曹山好手。」師拈じて云く、「曹山好手、不合に重ねて 註脚を下す。山僧に
璞を抱いて師に投ず、乞ふ師雕琢せよと問ふこと有らば、棒を喫せしめ了つて、連夜趕ひ出して、三
十年後、足を舐るの歎を興すことを免れん。」

僧云く、「且く道へ、答者

- 針筒不入。本分の地には針を入るの餘地なし。
- 龜毛。龜には元來毛なし。
- 樵子。樵の通ふ險路を通らねば、思ふ人には逢へぬ。
- 鐵壁。攀ち登ることできぬをいふ、難關難關。
- 從上の鐵壁が見える。
- 明窓。明窓下に古教照心するの義。
- 全提。全分提示なり。
- 川足の歎。今日、頭であるくやうな坊主はあるまい。

上堂、快人の一言、快馬の一鞭、便ち恁麼に去るも、此土西天。豈に見ずや、華嚴會上、善財童子、五十餘員の善知識に參す。末後に毗盧樓閣の前に到つて、方に念を歛めて聞く。彌勒彈指すれば、樓閣門開いて、善財入ることを得、入り已つて還つて閉づ。一步を移して不可説不可説、微塵の佛刹を過ぎ、無量無邊の智慧海、無量無邊の解脱門、無量無邊の 光明藏、無量無邊の福德聚を見る。又塵塵彌勒、刹刹善財なることを見る。彌勒復た云く、「善男子、法性を起すことは是の如し。」善財、兩眼を豁開して睡夢の覺むるが如し。從前の所證、所悟底、一場の 懺懺、能證能悟底、亦消息無し。便ち見る黄金と泥土と同價、古佛と白牯と同參なることを。山僧、只だ諸人一塵を撥せず、一念を動せず、便ち與麼に荷擔し將ち去つて、庶はくは今日遠く毛手を伸ぶるに辜かざらんことを。

- 快人一言。快人は一言にして人を感ぜしめ、快馬は一鞭にして能く走るの意。
- 光明藏。自己の本心。
- 懺懺。「はち」なり。
- 宿。幕、はたのるゐなり。
- 橫屍。死人ばかり。
- 拔山力盡。兵糧されがしたと。

重陽上堂、重陽九日菊華新なり、高く青 帘を掲げて遠賓を接す。
又覺ゆ晚來風色の好きことを、知らず落帽是れ何人ぞ。
上堂、「意能く句を刻り、句能く意を刻る。意句交馳するも萬里に 横屍す。昨日風黄河に起り、今日馬青塞に嘶く。盡く道ふ 拔山力盡くと。灼然として功、三分を蓋ふ、大衆還つて老僧敗闕の處を知るや。」拂子を擧つて云く、「咄、亂世英雄少く、太平奸賊多し。」

上堂「再び釣竿を整へて水月明かなり、再び探る波底有無の情。」良久して云く、「六熬一掣す三山の曉、潮千江に落ちて四海鳴る。」

上堂、馬祖陞堂、百丈捲席。藕絲竅裏、大鵬に騎る、九萬里の風一息と作す。南兮北兮、荒草天に連る、古兮今兮、誰か荆棘を剪る。

開爐上堂、僧問ふ、「記得す、大滌、百丈に侍立する次で、夜深けぬ。丈云く、「看よ爐中火在ること有りや也た無や。」此の意如何。」師云く、「夜深けて火を撥ふ、也た是れ尋常。」進んで云く、「滌、撥つて云く、「無し」と。又作麼生。」師云く、「他に許す半隻眼を具することを。」進んで云く、「丈躬ら爐に至り、深く撥つて火を得ること少し許。夾起して之を示し、「爾無しと道ふ、這箇、響」と。師云く、「螢火の光拈出するに勞せず。」進んで云く、「滌、豁然大悟、響。」師云く、「失脚して黄泉に陥る。」進んで云く、「後又百丈に侍して行く次で、丈云く、「火を帶得し來るや、」意何にか在る。」師云く、「兒を憐んで醜きことを覺えず。」進んで云く、「滌云く、「帶得し來る。」丈云く、「火什麼の處にか在る。」滌、一莖柴を拈起し、三吹して百丈に度與す、又作麼生。」師云く、「虚の多からんより、如かじ實の少からんには。」進んで云く、「百丈道く、「蟲の木を禦むが如し。」且く道へ、他を肯するや、他を肯せざるや。」師云く、「轉た醜拙を見す。」進んで云く、「和尚今日開爐、還つて這箇有りや、也た無や。」師

●響「それ見よ」「それだ」のそ
●螢火。貧なる讀書は。
●失脚。汝會得せば地獄に入
こと箇の如し。

云く、「也た只だ常の如し。」進んで云く、「試に學人が撥ひ看ることを聽さんや。」師云く、「松炭囉囉、面孔を照願す。」進んで云く、「寒爐初めて焔を發し、煖氣人に逼つて多し。」師云く、「爾我れを嚇すこと莫れ。」僧禮拜す。師乃ち云く、「簇出玲瓏面面紅なり、滿堂の衲子。春風に坐す。東山山下人の到る無し、火冷しく雲深うして祖翁を憶ふ。」

達磨忌上堂、僧問ふ、「達磨、梁の武帝に見ゆ。帝云く、「如何なるか是れ聖諦第一義。」祖云く、「廓然無聖。」此の意如何。」師云く、「黄金糞土の如し。」進んで云く、「帝云く、「朕に對する者は誰を。」祖云く、「不識。」又作麼生。」師云く、「賊は貧家を打せず。」進んで云く、「帝契はず。祖直に少林に往いて、終日冷坐す、又且つ如何。」師云く、「梁生つて箭を招く。」進んで云く、「既に是れ不生不滅、甚に因つてか熊耳峯に葬る。」師云く、「爾亂統すること莫れ。」僧禮拜す。師乃ち云く、「記得す、吾が祖、將に示寂せんとする時、門人をして各所解を呈せしむ。道副云く、「我が所見の如きは、文字を執せず、文字を離れざるを道用と爲す。」祖云く、「汝吾が皮を得たり。」尼總持云く、「我が所解、慶喜の阿闍佛國を見て、一見して更に再見せざるが如し。」祖云く、「汝吾が肉を得たり。」道育云く、「四大本空、五陰有に非ず、而も我が見處、實に一法の情に當る無し。」祖云く、「汝吾が骨を得たり。」師良久して云く、「祖翁已に去つて千年、鸞膠斷絃を接ぎ難し。」手を舉して云く、

●坐春風。暖かなる様子じや。
●梁生。的が出来たら、箭射る、これは老胡の性命。
●莫亂統。此の事は樛蒲に似たり。
●慶喜。阿難尊者をいふ。
●難接斷絃。知音がない。

「和する者は、一臂斷却す、汝等諸人什麼を將つてか飯を喫せん。」

達磨忌拈香、「咄、者の老胡、當門齒缺く、蕭梁の武帝投機せず。可師空しく立つ庭前の雪、一華五葉兮烏焉馬と成る。二十七傳分龜を證して鰲と作す。絲毫も問つること無きも、天地懸絶す。」大衆を召して、手を以て斫額して云く、「翩翩たる隻影擬へども何にか従はん、一回水を飲み一回噎ぶ。」

上堂、「葉落ち根に歸し、萬物皆蟄す。我が納僧家、蒲團頭上、正定に入れば、須彌頂上、定より起たん。須彌頂上、正定に入れば、百草頭邊、定より起たん。百草頭邊、正定に入れば、拄杖頭上、定より起つ。」拄杖を拈起して、喝一喝して云く、「捏怪することを得ざれ。」

上堂、山僧夜來、些の麤禪を搥んで大衆を供養せんことを擬欲し、百般思量し、千樣計較攪得して、大地震動し、海水波を翻すとも、一句も也た思量し來らず。禪床角上に移到して、直に得たり言の對すべきなく、理の伸ぶべきなきことを。只だ一場の懺懺を成して、大衆の鶴望に辜くと有り、諸人且く相怪むこと莫れ。

長樂一翁を證據する上堂、如來の正法眼、今に非ず亦古に非ず、父子親しく不傳、千歲密に相

- ① 一臂斷却。諸老の門庭を敲磕して語言三昧が能く手に入らば此の調は出來ぬ。
- ② 二十七傳。佛光に至りて。
- ③ 一回飲水。獨り建長、ここで水を呑むことは許すが、小便はならぬ。
- ④ 正定。止定なり。
- ⑤ 捏怪。奇怪を提弄するの義。
- ⑥ 大衆鶴望。へんてつもない響應じゃ。
- ⑦ 長樂一翁。名は陸豪、寛元中、宋に入り、禪山に登り、無準に參じ、歸朝して上野の長樂に住す、弘安四年八月寂す、佛光に嗣ぐ。

付す。香嚴擊竹の偈、幾人が錯つて指注す。昨朝長樂に問ふ、直答臆語無し、人の白晝に行くが如く、火炬を將ふることを用ひず。又香象王の如く、鐵鎖を擺壞し去る。摩醯正眼開き、大いに塗毒鼓を搗ち、普く大衆に告げて知らしめ、偈を説いて證據を作す。公驗甚だ分明、鵝王自ら乳を擇ぶ。

冬至小參、「二冬二冬、歲盡き年窮り、化工密に運り、消息潛に通ず。」

諸人還つて會すや。若し也た會せずんば、山僧解注すること一遍せん。這箇之を、隨波逐浪の句と謂ふ。又之を、函蓋乾坤の句と謂ふ。又之を百味具足の句と謂ふ。又之を、截斷衆流の句と謂ふ。諸人若し也た會得せば、暖幽谷に生ず、若し也た會せずんば、凍寒潭を鎖す。「復た擧す、「僧、陸州に問ふ、「一重を以て一重を去ることは則ち問はず、一重を以て一重を去らざる時如何。」州云く、「昨日茄子を栽る、今日冬瓜を種う」と。」師拈じて云く、「或は人有り、建長に一重を以て一重を去ることは則ち問はず、一重を以て一重を去らざる時如何と問はば、劈脊に便ち打たん。銅鑿上豈に鐵を添ふべけんや。」

冬節上堂、「獨り沙頭に立つて故人を望む、故人元是れ去年の春。」拄杖を拈じて云く、「吾れに隨つて拄杖三島に歸り、胡馬空しく嘶ゆ塞北の雲。」

- ① 塗毒鼓。如來眞實の説法に喩ふ。
- ② 化工。斗轉じ天旋つて、未だ眨眼を容さず。
- ③ 隨波。師家の隨機の手段をいふ、以下雲門の三句。
- ④ 函蓋。函は「はこ」、蓋は「ふた」、「函と蓋とは相契合して、少しも間隙なき意を取る、師弟の機々相合するをいふ。
- ⑤ 截斷。衆流は煩惱、一切の煩惱を截斷すること。

書記藏主を謝する上堂、擧す、古へ僧有り、經堂の中に在つて坐す。藏主云く、「如何ぞ看經せざる。僧云く、「字を識らず。」主云く、「何ぞ人に問はざる。」僧又手して云く、「是れ什麼の字ぞ。」主無語。師云く、「我れ當初若し藏主と作らば、只だ他に向つて道はん、去つて書記に問へと。這の僧眼子若し活せば、便ち知らん此の中人有ることを。」

事に因つて上堂、老夫用ひ盡す腕頭わんとうの力、諸公に輸與しゆよす者の一籌いちちゆう。六窓を打碎して虚豁きくわつ豁、夜深けて驚起す睡獼猴すいみこ。

中秋上堂、仙桂叢叢露を帯びて開く、廣寒宮闕幾樓臺ぞ。東西南北門相對す、自らはれ遊人到来せず。

上堂、針頭に鐵を削り、水裏に波を尋ね、應真不借、也た多きことを較べず。黄葉飄飄兮青山漸く瘦せ、蒼頭滴滴兮還つて舊窠に落つ。阿呵

呵。趙州嘗て勘す臺山の婆。

上堂、八月二十五、直截君が爲に擧す、水行一里一文、陸行七里一鋪、脚瘦せて草鞋寛く、雲收つて山岳露る。飯袋子、江西湖南便ち恁麼に去れ。

上堂、高抛、天に至らず、下擲、地に到らず。諸佛と祖師と、忒殺だ巴鼻無し。巴鼻有り、巴鼻無し。唵嘛嚩囉唵唵唵唵唵唵。

上堂、丁一卓二、千里萬里、古を説き今を説かず、海底に針を摸る。釋迦老子、甚に因つてか燃燈の記を受けざる。良久して拂子を撃つて云く、「蠱食は飽き易く、細嚼は飢る難し。」

重陽上堂、今朝九月九、葉落ちて山容瘦す、古に效ひ戯に高に登れば、萬象朋友と爲り、滿泛大海の波、且つ重陽の酒と作る。一吸すれば大海乾き、虚空笑口を開く。阿呵呵。茶奠日本無し、黄菊東籬有り。拂子を撃つて、「誰か道ふ、相逢ふて手を出さずと。」

上堂、清淨本然、山河大地、一塵を撥動すれば、天回り地轉す。諸人還つて會すや、「良久して拂子を撃つて云く、「舍に在つて只だ言ふ、客と爲ること易しと。淵に臨んで方に覺ゆ魚を取ることの難きことを。」

上堂、一去ること莫く、二留まること莫し。深處淺處、明頭暗頭、阿呵阿。因に思ふ、五祖師翁道ふ、我れ四十年行脚、今日方に始めて差を識ると。

開爐上堂、「今日開爐了に説くべき無し。香匙は太だ短く、火筋は太だ長し。千林葉落ち萬壑雲收る。少林の面目、刀斫れども入らず。喝一喝して下座。初祖忌上堂、「中天に住せず、大乘の器を求む。一錫飄然として十萬里に走る。」左右を顧視す、良久して云く、「扶桑日出づ海門の東、熨斗茶を煎すれば銚同じからず。」

輸與。まけること、籌は物を量る具の名より來る。
針頭。すりきつた身代りや。
應真。羅漢のこと。
囉囉囉囉囉囉囉囉。大悲呪の中にあり、譯して「蕩進せしめよ」といふ、唯は譯して「おわ」といふ秘密語なり。

① 丁一卓二。丁は一、卓は二と、一二と算ふ。
② 細嚼。淵に臨んで魚を得難し。
③ 茶奠。くみなり。
④ 五祖。法演なり。
⑤ 刀斫不入。中きれぬ。
⑥ 熨斗。ひのしのことなり。

同じく拈香、大衆を召して云く、「故に吾が初祖隻履西に邁く、霜露幾か降り、木葉幾か脱す。首を回せば、音容、言猶ほ耳に在り。何に因つてか打落す當門の齒。」

上堂、行不到の處、只だ此の如く行じ、説不到の處、只だ此の如く説く。徳山の棒、臨濟の喝、白日青天、眼中に屑を著く。

上堂、「山僧法の説くべき無く、道の譚すべき無し。通身三百六十の骨節、八萬四千の毛竅、只だ一句と作して、諸人に説與す。」良久して拂子を撃つて云く、「黃連未だ是れ苦からず。」

上堂、「至道言端語も亦端、刹竿頭上風幡颯る。幾回か望斷す千山の碧、

人を見ずして歸り又關を掩ふ。」卓拄杖。

上堂、西來の祖意揀擇を用ひず、一馬二羊三線四白。趙州の普、雲門の隔。笑ふに堪へたり李將軍、南山に白額を射ることを。

上堂、二は一に由つて有り、一も亦守ること莫し。七郎八當、半前落後、三分の妍、四分の醜、臨濟徳山、我が家の猫狗。

冬夜小參、僧問ふ、「記得す、洞山、泰首座に問うて云く、「一物有り、黒きこと漆に似たり、常に動用の中に在つて、動用の中收不得、過什麼の處にか在る」と、意何にか在る。」師云く、「白雲影の中怪

霜露幾降。物換り星移りて。
音容。かほつきも音聲も。
不見人。行人更に青山外に在りじや。
七郎八當。之れは人の前でははづかしうて云へぬ。

石露る。」僧云く、「泰首座云く、「過、動用の中に在り、漚」と。」師云く、「添へ得たり一場の愁。」僧云く、「洞山喝す、侍者、果卓を撥退す、又作麼生。」師云く、「鄭州の梨、青州の棗。」僧云く、「泰首座、果子を喫することを得ざれ。」漚。師云く、「富んでは千口も少きと嫌ふ。」僧云く、「今夜和尚、盤に和して撥出す。」師云く、「傍觀を笑殺す。」僧禮拜す。師乃ち云く、「三九二十七、離頭、鬻栗を吹く、衲衣下の事可憐生、無心にして箇の波羅密を念す。與麼與麼、不與麼不與麼、古木流水に隨はず、春風暗に南枝に著く。東山の舊話又重新、少室從教あれ霜雪の冷じきことを。然も是の如くなりと雖も、建長與麼の告報、還つて救ひ得んや也た無や。」良久して拂子を撃つて云く、「鬼は持す千里の鈔、林下道人孤なり。」擧す、僧、洞山に問ふ、「寒暑到來、如何が回避せん。」山云く、「何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。」僧云く、「如何なるか是れ無寒暑の處。」山云く、「寒の時は寒殺

鬻栗。ひちりきなり。上來の一曲が行けば、墻壁も露柱もつけて歌ふ。
春風暗。智恵のあるものは、此の咄の中に春が来る。
東山。東山の左邊底。
書雲。冬至のこと。
天堦。朝廷なり。

閣梨、熱の時は熱殺閣梨。」師頌して云く、「何人か透得す建長が關、獨座寥寥として洞山を憶ふ。的的身を藏す寒暑の裏、灼然として寒暑相干らず。」

書雲上堂、新に頌つ鳳曆、天堦より下る、何物か福壽の基を培するに堪へん。富士山高きこと三萬丈、一年一度靈芝を長す。

上堂、一人眞を發して源に歸せば、十方の虚空悉く皆鎮殞す。若し一法の涅槃に過ぐる有るも、吾

それは説かん即ち夢幻の如しと。この兩轉語、諸人分得すや。那箇か是れ主、那箇か是れ賓、若し也た分得せば、汝に許す是れ半箇の衲僧なることを。其れ或は未だ然らずんば、且く心竊なること莫れ。

上堂、箇の事は急流水の如く、^① 眨眼することを得ざれ。雪峰は一向に鞞毘、紫胡は一向に看狗、秘魔は一向に擊叉、禾山は一向に打鼓、建長會て勢に倚つて人を欺かず。有る時は行くに因つて臂を掌ふ、諸人若し也た會得せば、同じく鉢盂を展べて喫飯せん。其れ或は未だ然らずんば、三段同じからず、收めて^② 上科に歸す。

東福開山和尚の計音至る上堂、昨夜虚空忽ら鎖殞す、東福山頭法幢折る、盡大地の人俱に哽咽、唯だ建長のみ有りて心鏡に似たり。何が故ぞ、東山左畔の老松樹、臘月華開いて深雪に在り。

薦八上堂、六年冷坐棲泊し難し、伎倆窮る邊急計生ず。今古一條來往の路、門を出づれば^③ 時節正に三更。

上堂、止止不須説、我法妙難思、釋迦老子力を盡して道へども、建長が^④ 圈積を透ること不出、建長力を盡して跳れども、釋迦老子の影子を透ること不過。三步は較べ易く、兩歩は較べ難し。難難。離亭^⑤ 柳を折る是れ陽關にあらず、青山礙へず行人の路。且く放す溪

- ① 眨眼。偷鼠、油盞を抽く。
- ② 紫胡。利縱なり。
- ③ 三段。一は影を移し、二は身を移し、三は身影共に移す。
- ④ 上科。官試の一等。
- ⑤ 東福開山。聖一國師の寂するは弘安三年十月十七日、壽七十九。
- ⑥ 時節。隻手を聞くと日午に三更を打す。
- ⑦ 圈積。わな、則ち孟「まげも」の「積は「ひも」なり。
- ⑧ 折柳。知音なればなり。
- ⑨ 青山不礙。春山亂青を疊んで中に書信を通ずる。

聲別灘を過ぐることを。

四頭首兼拂を謝する上堂、星斗滿空一月に如かず、^① 衆角滿野一隣に如かず。主中に主を辨じ、賓中に賓を定む。規を絶し矩を絶して分眼金塵を透る、百歩に穿楊して分逸群を見んことを要す。

上堂、爐に當つて火の迸ることを避けず、言に當つて舌を截ることを避けず。是れ汝等諸人^② 接手の句を道ひ得ば、爾に許す天下に横行すること。苟し或は未だ然らずんば、且く林下に歸り去つて、更に月明の時を待て。

- ① 衆角滿野。奇言妙句なり。
- ② 接手。手形を手から手に。
- ③ 一氣。二十四氣でも、萬化は七十二候でもなり。
- ④ 休休「やれ、だまれ」なり。
- ⑤ 看看。見よと、あまり唇皮を鼓するので頭が白くなつた。
- ⑥ 明朝。此の白い頭で、明日は歳徳を迎へる。

除夜小參、主丈を拈じて、大衆を顧視して云く、「諸人還つて這箇の時節を知るや。乾坤の内、宇宙の間、^① 一氣無作にして作、萬化然らずして然る。驢鳴犬吠、古佛の家風、一場の漏逗、年窮り歳盡く。衲僧の鼻孔轉た見るに瞞預することを。茅屋清溪三曲四曲、古松流水千株萬株。建長薄處先づ穿つことを道はず、諸人自ら各時節を知るべし。^② 休休 看看 白盡す少年の頭。明朝又是れ新年頭。」復た丹霞、木佛を焼く公案を擧す、拈じて云く、「黃面の老漢、百千萬劫捨身布施す、今日方に作家に遇ふ、院主甚に因つてか眉鬚墮落す。」良久して云く、「道ふこと莫れ院主と、建長も也た些子有り。」

元日上堂、「道、一を生じ、一、二を生じ、二、三を生じ、三、萬物を生ず。不是心、不是佛、

不是物。」良久して、「南岳峰頭、八字の碑、千古萬古長く巍巍たり。」

上堂、長袖善く舞ひ、多財善く買ふ。李廣山頭石虎を射る、秘魔杖

下老鼠を捉ふ。彼兮此兮、無端無端、高兮低兮、大難大難。去年の殘雪

春寒に到り、壓倒す門前の華藥欄。

上堂、方に見る正月初一、匆々として十日を過したる。雪銷して春園

林に入る。建長が關鎖密ならず、諸人に問ふ、委すや委せずや。之を毫釐

に差へば之を千里に失す、也た是れ波斯開市に入る。

上元上堂、今朝上元の夕、的的來由有り。天地、青眼無し、乾坤

自ら白頭。滄溟一油甕、日月兩燈毬。明白分明に在り、何ぞ須ひん趙州

を見んことを。

上堂、荆棘叢林、荆棘圍繞し、梅檀叢林、梅檀圍繞す。可憐生建長老、

爲に愛す巖前碧草の青、興來つて覺えず衣に和して倒る。諸人に問ふ、好

不好、東土逢ふこと罕に、西天尤も少し。

上堂、福山本據無し、一味脫空を説く。有る時は暗中拋號、有る時は換手點胸、朝に南北を看

- ① 不是心。そんな拄杖が。
- ② 八字碑。碧落碑無質本。
- ③ 李廣云云。昔は老僧とむだ骨を折つたと。
- ④ 杖。「やす、」魚を捕ふる具なり。
- ⑤ 大難。ああ、たいぎたいぎだと。
- ⑥ 華藥欄。花畑の意、藥欄は圖の意にて「かき」なり。
- ⑦ 今朝。絶妙の好辭。
- ⑧ 無青眼。青眼で見るやうな知音はない。
- ⑨ 可憐生。鼻尻に思ふてくれい。
- ⑩ 福山。建長の山號、巨福山のことなり。

暮に西東を看る。風に乗するは月に歩むに如かず、竹を種うるは松を栽うるに如かず。

上堂、菩薩龍王行雨潤ふ、身を遮る向上萬重の雲。一聲の霹靂天下を驚す、散じて千邦萬國の春

を作す。大衆還つて見るや。所以に道ふ諸仁に顯はれ、諸用に藏る。萬物を鼓して而も聖人と憂を同

じうせず、盛徳大業至れる哉。

上堂、般人は柏を以てし、周人は栗を以てす。一二三四五、五四三二一、

手を伸べて掌を見ず、大地黒うして漆の如し。屈述ぶるに堪へたり、

大鵬一展九萬里、老鼠從教あれ開啾啾すること。

上堂、三句前兩句後、無は同じく無と説き、有は同じく有と説く。一著

不到の時、南に面つて北斗を看る、甚に因つてか此の如くなる。徳山牌を

卓げ、定光手を招く。

佛涅槃上堂、今朝二月半、瞿曇寂滅を示す、人天悲み徹せず、波旬喜び

徹せず。同不同、別不別、船漏つて水満つ、桶漏つて水竭く。

上堂、道は知にも屬せず、不知にも屬せず。鐵蒺藜鎚轉た弄すれば轉

た危し。笑ふに堪へたり臨濟小厮兒、電光影の中紅旗を卓つることを。

上堂、「鼻頸は太だ長く、鶴頸は太だ短し。四七二三、賊に和して款を納る。老夫が罪犯、諸人還

- ① 大地。八月十五夜でも。
- ② 屈述。須らく知るべし、是れ好手と。
- ③ 定光。佛は燃燈佛のこと。
- ④ 船漏水満。雪隠の踏板をふみ落したやうな上堂じや。
- ⑤ 鐵蒺藜。「いばら、」戰爭の時に敵を防ぐためにつくる具、今の鉄條網。
- ⑥ 和賊。盗み物を出して白状する。

つて救ひ得んや也た無や。良久して云く、「三生六十劫。」

上堂、與麼も也た得たり、不與麼も也た得たり、與麼不與麼總に得たり。與麼も也た得ず、不與麼も也た得ず。與麼不與麼總に得ず。畢竟如何してか即ち得ん。我れも也た理會し得ず。

上堂、牛頭は北に向ひ、馬頭は南に向ふ。釋迦・彌勒是れ同參にあらず、甚に因つてか此の如くなる。前三三後三三。

上堂、「山に上つて虎豹を避けざるは樵夫の勇なり、水に入つて蛟龍を避けざるは漁人の勇なり。建長大いに門戸を開き、只だ要す諸人。單刀直入せんことを。」良久して云く、「玄沙道底。」

- ① 與麼。さうじやさうじや。
- ② 單刀直入。背水の陣じや。
- ③ 玄沙道底。或時は去死十分、或時は未徹在。

除夜小參、僧問ふ、「家家歳を守つて長筵に接す、人人早に起きて新年を

賀せん。學人上來願はくは提唱を聞かん。」師云く、「露柱笑ひ吟吟。」進んで云く、「如何なるか是れ人中の境。」師云く、「門を出でて唯だ恐る先づ到らざることを。」進んで云く、「如何なるか是れ境中の人。」師云く、「爾は是れ草賊。」進んで云く、「如何なるか是れ扶桑國。」師云く、「日出でて山に連り、月圓にして戸に當る。」進んで云く、「如何なるか是れ關東の境。」師云く、「貔貅三十萬、宿將重圍に坐す。」進んで云く、「如何なるか是れ巨福山。」師云く、「天高うして蓋不盡。」復た僧有り問ふ、「記得す、北禪除夜小參、衆に示して云く、「年窮り歳盡き、諸人と分歳す可き無し、箇の露地の白牛を烹る。」此の意如何。」師云

く、「村裏の獅子。村裏に弄す。」進んで云く、「深夜維那上來して報じて云く、「縣裏、公人の到る有り、和尚を勾す」と、意作麼生。」師云く、「家富んで甲嬌る。」進んで云く、「禪云く、「什麼をか作す。」維那云く、「和尚私に耕牛を宰して皮角を納めず」と、又作麼生。」師云く、「但だ東土のみに非ず、西天令嚴なり。」進んで云く、「北禪便ち帽子を將つて地上に擲向す。」師云く、「賊に和して款を納る。」進んで云く、「維那地に就いて帽を捨てて便ち行く、意作麼生。」師云く、「一字公門に入る。」進んで云く、「北禪、禪床を跳下して擲胸に扭住して、叫んで云く、「賊賊」と、意旨如何。」師云く、「對面 翻款。」進んで云く、「維那便ち帽子を將つて、師の頂上に覆ふて云く、「天寒和尚に帽子を還す、此の意又作麼生。」師云く、「越得轉じ來つて一半を打失す。」進んで云く、「今日巨福年窮り歳盡き、未審し和尚什麼を將つてか大衆と分歳す。」師云く、「殿前の雪獅子。」進んで云く、「遠つて學人箇の消息を通ずることを許さんや也た無や。」師云く、「好。」進んで云く、「嫌ふこと莫れ冷淡滋味無きことを。一飽能く消す萬劫の飢。」師云く、「偶然として 瘞著す。」僧禮拜す。師乃ち云く、「聲前の一句、踏著不噴。波波波浪、刹利塵塵、鉢裏飯、桶裏水、主中の主、賓中の賓、一對の眼睛雪白く、悠然たり萬里の孤身、大白峰頭足を疊んで打坐し、扶桑國裏雪を踏んで春を迎ふ。今歳の梅、明歳の柳、新者は自ら新、舊者は自ら舊、南來北來、東走西走、一條の拄杖鐵刺梨。但だ山に登ると狗を打するるとに

- ① 弄村裏。他國では繁昌する。
- ② 翻款。反覆なり、款は誠なり、罪人の事實を白狀することなり。
- ③ 瘞。投と同じ。瘞著は諸方より澤山あつて來たなり。

あらず。復た擧す、馬大師、藏和尚をして徑山の欽和尚に傳語せしむ。十二時中何を以てか境と爲す。山云く、「汝回る時を待つて、我れ却つて信有らん。」藏云く、「即今便ち回る。」山云く、「傳語す、馬大師、曹溪に問取せよ。」師拈じて云く、「馬大師一隻の破草鞋、東擊西擊、也た是れ其の便を得るに慣ふ。徑山、胡蘆馬杓を將ちて、一時に翻轉す、也た是れ事。急家より出づ。福山恁麼の批判、還つて過有りや無や。」喝一喝して下座。

上堂、鳴鼓了也、祝香了也、問訊了也、叙謝了也、諸人若し病僧、佛を説き法を説くことを聽かんと要せば、且く別時を待つて。

上堂、參禪妙訣無し、只だ打して、徹せしめんことを要す。疑情若し斷せん時、生死の路、自ら絶ゆ。諸人に問ふ、警不警、富士山頭、六月雪を下す。

上堂、印の泥に印するが如く、印の水に印するが如し。四七二三、是れ甚の而驚ぞ。咄。

上堂、結夏已に半月、水牯牛作麼生。驚、驚に對し、蹄、蹄を踏む。大衆見るや、昨夜清風八極に生じ、今朝流水前溪に漲る。

上堂、「佛法人の説くなし、慧と雖も了すること能はず。」又云く、「當に無師智、自然智を求むべし。」

釋迦老子、三道寶街に布く、諸人那一門中に向つて、建長と相見せん。良久して喝一喝して下座。

上堂、「一去ること莫れ、二留むること莫れ。子湖狗を看、雪峰毬を輓じ、雲巖獅子を弄ず、滄山水牛を牧す。良久して膝を拊つて、一片の月海に生ずれば、幾家か人、樓に上る。」

上堂、吾れに一句有り、千門萬戶、遠くして西天に在らず、近うして東土に在らず。曲底は曲兮直底は直、甜き者は甜く兮苦き者は苦し、甚に因つてか此の如くなる。鷓鴣鶴に語る。

大覺忌辰拈香を請ふ。昔年今日恁麼に去り、今日昔年恁麼に來る。來去去今昔に非ず、太虛處として安排すべきなし。鉤を四海に垂れ、塔戸長く開く。一爐香散じて千山碧に、千古萬古雲雷を生ず。

上堂、參禪は須らく是れ悟るべし、悟り了つて須らく是れ人を見るべし。人を見るは須らく是れ今時を盡却すべし。若し今時を盡却せずんば、十箇五雙有り、獨體前に鬼を見る。甚に因つてか此の如くなる。雪峰道底。

太守、諸經を血書し、國士を保扶す、陸座を請ふ。若し此の事を論ぜば、只だ當頭を貴ぶ。若し戰を論ぜば、妙は轉處に在り。金剛寶劍の如く、之を擬するときは則ち萬里に横屍せん。帝釋幢の如く、一切の邪風傾動すること能はず。輪王の珠の如く、一切の惡毒悉皆遠離す。獅子王の如く、一

- ①藏。四堂智藏、馬祖に嗣ぐ。
- ②欽。國一法欽、牛頭派なり。
- ③急家。實急家なり。
- ④徹。但だ捨命し得ず。
- ⑤六月。道理で今朝は冷えた。
- ⑥是。是而驚。猫に似たか杓子に似たか、似たならば頭腦を打破せん。

- ①三道。聲聞、緣覺、菩薩なり。
- ②上樓。登樓とも是れ吾が土にあらず。
- ③曲底曲。誰か道ふ、物理齊しと、曲中却つて直あり。
- ④鷓鴣。方語に「只缺一點。」
- ⑤大覺忌。建長開山の忌日なり、弘安元年七月二十四日寂す。
- ⑥垂鉤四海。曲鉤には蝦蟹を釣り、直鉤には鯢鯢を釣る。
- ⑦貴當頭。短兵急に、大死一番底。

吼するときは即ち百獸腦裂す。大日輪の如く、一照するときは則ち陰魔跡を絶す。高うして上無く、大にして雙無し、横に十方に亘り、豎に三際を窮む。護法護民、全鋒敵勝を見んと要し、摧邪顯正、虎穴魔宮を掃開す。佛力と天力と共に運し、聖力と凡力と齊新なり。正恁麼の時、奏凱の一句作麼生か道はん。萬人齊しく仰ぐ處、一箭天山を定む。

結座、菩薩大心を發す、不可思議の力、剝皮と析骨と、書寫佛功德、苦衆生を拔濟して、皆勝妙樂を獲せしむ。我が此の日本國主帥、平朝臣、深心般若を學ぶ、爲に億兆の民を保んず。外魔四に來り侵す、國を擧げて怖畏を生ず。朝臣勇猛を發し、血を出して大經を書す。金剛と圓覺と及於諸の般若、精誠所感の處、滴血滄海と化す。滄海渺として無際、皆是れ佛功德、重重の香水海、照見す浮幢刹、諸佛寶蓮に坐す。常に如是經を説き、一句と一偈と、一字と一畫と、悉く化して神兵と爲る。猶ほし天帝釋と彼の修羅と戰ふが如し。此の般若力を念じて、皆勝捷を獲たり。今此の日本國亦佛の加被を願ふ、諸聖神武の威、彼の魔悉く降伏し、生靈皆安を得る。皆佛の神力の故に、世々般若を學ぶ、佛の威猛力に報ず。

上堂、八月の秋何れの處か熱し、雨顛せず、風颯せず、狼烟已に掃除、五穀皆成結す。好箇太平底の時節、石人笑ひ徹せず、木人喜ひ徹せず、燈籠歌徹せず、露柱舞徹せず、大地山河掌よりも平なり。十方世界一團の鏡、諸人に報ず打して徹せしめよ。頂門、瞿瞿是れ何人ぞ、的的、天、第二の月無し。良久して云く、「達磨西來、口有り舌無し」と。

上堂、現成公案思算を用ひず、鶴頭は自ら長く、鳧頭は自ら短し。離中虛、坎中滿。大衆を召して云く、「會すや、人心、水の長流似りも難し、世事但だ公道を將つて斷る。」

上堂、尋常一句を説き一步を行ず、未だ嘗て諸人の與に方便門を開かずんばあらず。若し也た有所得の心を將つて接泊せば、大空を將つて蝶蟻穴中に入るが如し。却つて山僧を怪むこと得ざれ。

東山、日長老相訪ふ上堂、「東山下の事、雞犬斜陽、清谿七里五里、松竹千莖萬莖、祖翁の活業更に隱藏すること没し。良久して云く、「家肥えて孝子を生じ、馬瘦せて毛の長さを見る。」

長樂一翁の訃音至る上堂、火裏清泉を汲む、已に七十二年、蟪蛄蠶身し去つて大千を觸破す。黃梅渡口、雞足山前、甜きこと木蜜の如く、苦き

- ① 摧邪顯正。或は正を廢し、或は邪を示す。
- ② 一箭。両手を放開して中るを知らず。
- ③ 天山。邊境にあり。
- ④ 苦衆生。五塵六慾なり。
- ⑤ 皆是佛。捨身放命の地。
- ⑥ 報佛。佛恩を報ずること。

- ① 露柱。めでたい御代じや。
- ② 瞿。音は「ちやく」、刺なり、いたむなり。
- ③ 天無第二月。國に二王なし。
- ④ 水長流。河水は下に流るるやうで、素直には行かぬものなり。
- ⑤ 公道。亂世の太平。
- ⑥ 與諸人。語なしとは言はず、只だ是れ如來に二種の語なし。
- ⑦ 日長老。高峯顯日、師の法嗣なり、佛國國師、東山は建仁なり。
- ⑧ 祖翁。破庵なり。
- ⑨ 家肥云云。富貴なる家では犬ころまでが肥え、貧乏なる家の子供は正月でも鼻平が長いものじや。
- ⑩ 黃梅。六祖、雞足は迦葉なり。

こと黃連に似たり。賊物現在、父子不傳、過鋒疾燄、一步先に在り、正宗滅却す瞎驢邊。然も五逆と雖も冤を成さず。

上堂、「尺璧寸陰、車鐵寸金。」大衆を召して、「會すや、閑學解を將つて祖師の心を埋没すること莫れ。」

重陽上堂、「堂前鳴鼓了也、大衆問訊了也。」良久して、「若し是れ陶淵明ならば、眉を擡めて便ち歸り去らん。」

上堂、「一を識得すれば萬事畢る、金剛杵打して鏡山摧く、大地漫々黒うして漆の如し。彌勒呵呵大笑すれば、文殊額上汗出づ。陝府の鐵牛蹄跳すれば、嘉州の大象拇指を咬斷す。甚に因つてか此の如くなる。家肥えて孝子を生じ、國霸にして謀臣有り。」

上堂、歴歴寂寂、寂寂、益益昔昔昔昔。方者は自ら方、圓者は自ら圓、曲者は自ら曲、直者は自ら直。扶桑の人、陝西の田を種ふ、文殊殿裏に彌勒を見る。

上堂、「老胡西來、茅を擔つて火を引く、白日堂堂、漆桶話墮。」良久して、「俊鶻空を拵め、瞎驢磨を推す。」

①祖師心。佛光は始め無準及び北簡・石溪諸老の室に出入し、末後に鷲峰庵に於てす。
②陶淵明。晋の隱人。性恬淡、菊を植ゑて酒を嗜む。掛は「しばめる」なり。
③陝府。今の河南省に屬す、黄河を守護する神として、鏡牛を造る、頭は河南に、尾は河北にあり、不動著の意。
④嘉州大象。唐の玄宗帝の時、沙門海通、嘉州の大江に高さ三十六丈の彌勒佛の石像を作る。これを云ふ。

開爐上堂、「山寒く水冷かにして衰形を見、獨坐時に開く落葉の頻なることを。又地爐を撥つて宿火を開く、嶺南猶ほ未歸の人有り。」卓拄杖して下座。

上堂、吾が家向上の機を透らんと要せば、急に須らく我れに惡錯鎚を薦むべし。風雷迸出す那吒の面、賣與す翻身の獅子兒、一轉語を下し得ば、明窓下に安排せん。其れ或は未だ然らずんば、南北に一任す。

上堂、火燄三世の諸佛の爲に說法す、三世の諸佛立地に聽く。門前の大案山を推倒すれば、九州四海鏡の如く平なり。君に饒す兩眼流星に似たるも、未だ免れず白日深井に落つることを。

上堂、「作麼生休得すや、沒處去、之乎者。釋迦老漢、六年雪山、達磨老胡、九載少林。鷲に大衆を召す、卓拄杖して云く、「漆桶、喫茶去。」

解夏小參、「山僧別に長處無し、四十餘年行脚、一丈を見得して一丈を行じ、一尺を見得して一尺を行ず、曾て古人陳年の破草鞋を將つて、拄杖頭上に掛在して、東拋西擲、以て宗乘に當てず。而今長期已に滿つ、聖制已に圓なり。兄弟東去西去、南來北來、兩件の事有り、諸人に說與せん。第一舊路再行すべからず、第二新路踏破すべからず。甚に因つてか此の如くなる。枯木龍吟有り。」復た擧す、乾峰示衆、「法身に三種の病、二種の光有り、一一透得せば、儼に許す歸家穩坐することを。」雲門云

①宿火。昨日の焼きのこりの火に探り逢ふて見ればとなり。
②喫茶去。此處は寒い、暖所に歸つて茶でも呑め。
③一丈一尺。長と短となり。

く、「庵内の人、甚に因つてか庵外の事を知らざる。」峰呵呵大笑す。門云く、「猶ほ是れ學人が疑處。」峰云く、「子是れ何の心行ぞ。」門云く、「也た和尚の委悉せんことを要す。」峰云く、「若し與麼ならば始めて穩坐を解せん。」師頷して云く、「曲曲たる蘆汀蓼灣に對す、山水を藏し了つて水山を藏す。誰か云ふ寂寞たる煙磯の外、更に漁翁釣竿を把る有り。」

解夏上堂、一夏諸人と東語西語、只だ諸人、各生涯有らんことを要す。今日聖制已に滿つ、還つて悟證、諦當を得る者有らば、出で來れ、老僧爾が爲に證據せん。其れ或は未だ然らずんば、丈頭且く自ら挑げ去らん。

太守、興國山の額を掛くる事を請ふ。「正に邪を格すべし、小能く大に敵す、皇天私無く、功有徳に歸す。日本千年の社稷、遠邦萬里の孤征、風雷一掃して空となり、佛天震怒遏め難し。一箭を發せずして煙塵息み、一刃に血ぬらずして天地清し。偉なるかな雄猛の尊、乾坤の運を再造す。鳥獸魚鱉咸く若ひ、漁樵耕牧新なるが如し。此の興國の名を掲げ、昭に太平の業を示す。」良久して云く、「萬古千秋雲雨を出し、十洲三島清風を起す。」

太守、夢に虚堂和尚に見ゆ、翌日師を請じも拈香。虚堂背面無く、在無く不在無し。夜來扶桑に過りて、夢裏妖怪を興す、夢中の形、像中の眞、夢中像中、兩彩一賽。老和尚一香、聊か是れ慰懃に當つ、師の遠來を謝す誠に易からず。

- ① 諦當。諦は明實、當は眞正の意。
- ② 興國山。建長興國禪寺といふことか。
- ③ 小能敵大。泰山高く恒河深し。
- ④ 萬古。此の額の字。
- ⑤ 十洲三島。早魃を救ふて社稷を安んず。
- ⑥ 虚堂。智愚なり。
- ⑦ 兩彩一賽。二つの骰子を投げて、目の齊しきないふ。

に當つ、師の遠來を謝す誠に易からず。

冬夜小參、僧問ふ、「堂前鳴鼓已に三通、蹴踏す人天と象龍と、時節因縁今夜に在り。願はくは師一句家風を振はんことを。正與麼の時、願はくは法要を聞かん。」師云く、「露柱證明、燈籠失笑す。」進んで云く、「記得す洞山和尚、冬夜、泰首座に問うて云く、「一物有り、黒きこと漆に似たり、常に動用の中に在つて、動用の中收不得、過甚麼の處にか在る、意作麼生。」師云く、「貧にして富の装裹を作す。」進んで云く、「泰首座云く、「過動用の中に在り」と、還つて洞山の意に契ふや也た無や。」師云く、「若し涙を下さしめば、滄海も也た乾かん。」進んで云く、「洞山行者をして菓卓を撥退せしむ、又且つ如何。」師云く、「手を翻せば雲、手を覆へば雨。」進んで云く、「只だ和尚の這裏の如き也た菓子無きや也た首座無きや。且く道へ、洞山と相去ること多少ぞ。」師云く、「牙を咬んで雍齒を封じ、血に泣いて丁公を斬る。」進んで云く、「望むらくは和尚更に古人説不到の處に向つて大衆に指示せよ。」師云く、「猶ほ少きを嫌ふことな在り。」進んで云く、「便ち這箇眞の消息を將つて、且く去つて。」三條椽下に參ぜん。」師云く、「天寒日短く、飯滿つることを要せず。」師乃ち云く、「冬至寒食一百五、甜き者は甜く兮、苦き者は苦し。寒潭を凍鎖して蹤を見ず、達磨會せず轉身の句。」大衆を召して云く、會すや、一句は寒暑の外にあり、一句は寒暑の内な在り、若し寒暑の外に在つて薦得せば、他に許す寒暑を受用せんことを。若し寒暑の内な在つて薦

- ① 三條椽下。六尺單前をいふ。
- ② 冬至。冬至より百五日目を社日といひ、一日火食せず。

得せば、爾に許す寒暑を、擺脱（はいたつ）することを。便ち見る仰山の叉手、香殿の進前、昨日と今日と同じか
 らず、溪山と雲月と異なる有り。「良久して云く、「精陽剪らず霜前の竹、水墨徒に誇る海上の龍。」復
 た擧す、馬祖、一圓相を寄せて、徑山に與ふ。山、封を開き圓相、下に就いて一點して封回す。忠
 國師云く、「欽師却つて馬師に惑はさる。拈じて云く、「忠國師其の便を得るに慣ふ、爭奈せん、馬祖甘は
 さることぞ。我が此の衆、還つて馬祖の爲に屈を雪ぐ底有りや。」喝一喝。
 記夢上堂、空中に字を書き、水底に文を成す、金光晃耀、星月平分、無
 情說法不思議、汝諸人眼を著けて看んことを要す。

除夜小參、僧問ふ、「南泉僧有り問ふ、「如何なるか是れ本身盧舍那。」泉云
 く、「我が爲に淨瓶を過し來れ、」意旨如何。」師云く、「爾半く話頭を記せよ。」

進んで云く、「僧、淨瓶を過す。泉云く、「舊處に安著せよ、」意又作麼生。」師云く、「爾若し打倒せば一場
 の好笑。」進んで云く、「僧舊處に安じ了つて、復た來つて是の如く問ふ。泉云く、「古佛過ぎ去つて久し
 矣。」又只如何。」師云く、「爾背後底是れ甚麼ぞ。」進んで云く、「南泉恁麼の答話、還つて和尚の意に契
 ふや也た無や。」師云く、「猶ほ老僧が三步に較ぶること有り。」進んで云く、「學人、和尚に問ふ、如何な
 るか是れ本身盧舍那と。」師云く、「觸著すれば爾が腦を打破せん。」僧禮拜。師云く、「我れ爾が與に兩手
 を捻つて汗す。」師乃ち云く、「一年窮り歲盡く、諸人と分歳すべき無し、未だ免れず破囊を抖擻せんこと

- ① 擺脱。擺は開なり、撥なり、排なりとあれば、自由を得ること。
- ② 徑山。國一法欽なり。
- ③ 下。異本に「中」に作る。
- ④ 思。南陽をいふ。

を。陳年の曆日を把つて、諸人に念與して、箇の關熱を作さん。正月雨水、二月穀雨、三月清明、

四月夏至、五月小滿、六月大暑、七月秋分、八月白露、九月霜降、十月小寒、十一月小雪、十二月大雪、

大衆を召して云く、「還つて會すや、若し也た會得せば、日日是れ好日、時時是れ好時。其れ或は未だ然らずんば、舊歲今宵去り、明年明日來る。」復た擧す、僧、歸宗に問ふ、「此の事久遠、如何が用心せん。」宗云く、「牛皮露柱を靴る、露柱啾啾として叫ぶ。凡耳聽不問、諸聖呵呵笑ふ。」拈じて云く、「歸宗大いに貧子の、樗蒲に似たり、動著すれば臂膊便ち露る。然

- ① 陳年。ふるごよみのこと。
- ② 日日是好日。鹽を見て湯を止め、飯を見て飢を止む。
- ③ 歸宗。智常なり。
- ④ 樗蒲。彩走驪家。
- ⑤ 動著。人の金著を足の拇指であける。

も此の如くなりと雖も、阿誰か免れ得ん。」上元上堂、「氷霜自ら寒からず、日月自ら照さず。一句千門を透る、萬象齊しく踔跳す。」卓拄杖して下座。

雲巖の吉長老を謝する上堂、「本是れ射鵬の手、曾て百戰の功を收む。再び鐵旗鐵鼓を整へて、同じく日本の宗風を扶く。奔流度刃、疾骸過鋒、旋風岳を偃し、鴈眼も蹤に迷ひ、何ぞ似かん東山の大脱空。拂子を撃つて下座。

- ① 千門。萬祖の關鎖。
- ② 雲巖。那須の雲巖寺、吉は未詳なり。
- ③ 鴈眼。すばやきけたらき。
- ④ 九賢。未詳なり。
- ⑤ 拈。ひのき、びやくしんのことなり。
- ⑥ 鐵茶。酢、又はこきさけのこと。

允賢の二上人、松を栽うるを謝する上堂、黃檗會裏、巨福山前、松を栽る、栝を種う。公案苑已に見る龍蛇影動き、重重翠蓋參天、和風四合、禽鳥聲喧し、醞茶三五盃、意饒頭邊に在り。

上堂「道不及之處萬機齊しく赴く、落華流水太忙生、嶺上の白雲欄不住。」良久して拂子を撃つて云く、「甜瓜は蒂に徹して甜く、苦瓠は根に連つて苦し。」

上堂「偏中正、正中偏、千華影裏、一色明邊。」良久して云く、「幾度か醉歸す明月の夜、笙歌擁し入る畫堂の前。」

佛槃涅上堂、最初の句、末後の句、枯木裏の龍吟、鐵蛇古路に横ふ。若し也た悟り去らば、親しく如來を見ん。其れ或は未だ然らずんば、
未だ是れ苦からず。

上堂、擧す、僧、古徳に問ふ、「泗州の大聖甚に因つてか楊州に出現す。」

徳云く、「君子財を愛す、之を取るに道を以てす。」若し 福山に問はば、只だ他に對して道はん、事、三に過ぎずと。更に意旨如何と問はば、向つて道はん、無孔の鐵錘、甚の共に語る處か有らんと

上堂、「昨日山僧、拄杖を將つて一揮す、諸人呼ぶに隨つて至る。今日鼓を打つこと三通、諸人簇簇として上來す。是れ汝が脚頭到る處、諸佛の法藏盡く空し。山僧身を隠すに地無し。且く道へ、箇の甚麼をか嫌ふ。」卓拄杖して下座。

上堂、是れ目前の法にあらず、耳目の到る所にあらず。直鉤鯢鯨を釣り、曲鉤は魚鱉を釣る。諸

人に問ふ、警不警、無孔の鐵錘、楔を下すことを休めよと。

上堂、靈雲、客路に 玄沙に遇ふ、直に今に至つて未だ家に到らず。迷却す武陵深き處の路、一溪の流水天涯を隔つ。

上堂「夜來山僧一夢を得たり、一機の中、四輪俱に轉ずることを夢見す。或は豎轉の者あり、或は横轉の者、或は左轉の者、或は右轉の者あり。此の夢此の輪、此の輪此の夢、是れ汝諸人那裏に向つてか 山僧と相見せん。」

喝一喝、卓拄杖して下座。
上堂、「密說顯說、直說曲說、横說豎說、事說理說、一切智智清淨、無二無二分、無別無斷故。」良久して云く、「西河獅子を弄じ、南泉猫兒を斬る。」

上堂、「無も也た將來すること莫し、有も也た將去すること莫し、懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹る。」卓拄杖して云く、「蝴蝶夢回る家萬里、子規啼き斷ず月三更。」

佛鑿禪師忌日拈香、六十の拄杖、一瓣の兜樓、恩冤を將つて報じ、甜苦を將つて酬ゆ。山悠悠、水悠悠、大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし。
最明寺殿忌日上堂、「一靈の眞性、通徹虛玄、三際朕跡を留めず、十方更に中邊に没す。處處全

① 黃連。あつくちが苦い。
② 福山。巨福山、即ち佛光自ら
③ 不是目前法。夾山、船子に對ふる語なり。

① 玄沙。敢保す老兄の未徹在」といつた。
② 與山僧相見。豎か横か左か右か。
③ 西河。この解、前に出づ。
④ 懷州牛。懷州と益州とは地遠くはなる。
⑤ 蝴蝶。花に舞ふ蝴蝶を夢に見る故。未だ家に歸らず。
⑥ 佛鑑。無準師範、南宋の淳祐九年三月十八日寂す。
⑦ 最明寺。時頼公のこと。
⑧ 三際。過、現、未なり。

彰、頭頭顯露。所以道ふ、極大は小に同じ、邊表を見ず、極小は大に同じ、境界を忘絶すと。便ち見る大海は、風無きに金波自ら湧き、古鏡磨せざるに万象齊しく照すことを。空に能照の影無く、境に観るべきの形無し。這裏一跳に跳出し、面皮を翻轉して、金剛の正眼は乾坤に輝き、刹刹塵塵、異類を行ず。諸人還つて見るや、白雲 迸斷す青山の外、七佛の靈蹤 上方に在り。復た云ふ、「人間抛卻す舊榮華、慈氏宮中是れ故家。菩提果熟す菩提樹、子孫孫自ら華を著く。」大衆を召して云く、「什麼を喚んで 菩提樹と作す。阿那箇か是れ菩提の果。」拄杖を卓して云く、「恩を知る者は少く、恩に負く者は多し。」

上堂、參禪は當に悟を以て期と爲すべし、悟らずんば重ねて添ふ滿肚の癢。借問す五湖雲水の容、南泉甚に因つてか猫兒を斬る。「喝一喝、卓拄杖して下座。」

上堂、「正中來、兼中至、鐵壁銀山、通身泥水、是れ汝等還つて 護惜すや也た無や。」卓拄杖して云く、「有智無智、較ぶること三十里。」

上堂、拄杖を拈じて云く、「拈拄杖子長きこと七尺、也た汝に累され、也た汝が力を得たり。我れ且く爾に問ふ、只だ黃蘗、臨濟を打つこと六十下するが如きんば 爾還つて記得すや。云く、記得す、爾我

① 無風金波。無處には水有つて月澄み、有處には風無くして波起る。
 ② 翻轉。騰躍の略、自由自在のこと。
 ③ 進。異本には「送」に作る。
 ④ 上方。界分、維摩の香積なり。
 ⑤ 慈氏。彌勒をいふ。
 ⑥ 作菩提樹。今日什麼の色なか作す。
 ⑦ 護惜。大切にすること。

が與に擧すること一遍せよ看ん。「卓拄杖一下して云く、「我が見處と略相似たり、中間也た些子の 説有り。」

浴佛上堂、黃面老漢才に母胎を出でて、便ち萬千 不啣喙の事有り、千古の下累兒孫に及ぶ。建長が香水一杓、也た恩有り、也た怨有り、也た褒有り、也た貶有り。諸人若し也た緇素得出せば、爾に許す親しく如來を見たてまつることを。其れ或は未だ然らずんば、坐具頭邊に摸索せよ。

結夏小參、僧問ふ、「句裏に機を呈し、言前に旨を定む、請ふ師親切の一句。師云く、「半句も也た無し。」進んで云く、「記得す、龍牙、翠微に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」微云く、「我が與に 禪版を過し來れ。」微、接得して便ち打つ、意旨如何。師云く、「猶ほ建長が三步に較ぶることあり。」進んで云く、「牙復た臨濟に問ふ、濟云く、「我が與に蒲團を過し來れ。」濟、接得して亦打つ、此の意如何。師云く、「喚び來れ、我が與に洗脚せしめん。」進んで云く、「後來 雪竇が頰に云く、「龍牙山裏龍に眼無し、死水何ぞ會て古風を振はん。」此の意如何。師云く、「死虎人の看るに足れり。」進んで云く、「又云く、「盧公付了るも亦何ぞ憑まん、坐倚將つて祖燈を繼ぐことを休めよ。」此の意又如何。師云く、「私酒人の喫すること多し。」進んで云く、「學人和尙に問ふ、如何

① 請訛。錯雜して分ち難きを云ふ。
 ② 不啣喙。馬鹿野郎。
 ③ 龍牙。居遁なり。
 ④ 翠微。無學なり。
 ⑤ 禪版。この解、前にあり。
 ⑥ 雪竇頰。この頰は碧岩に出づ。
 ⑦ 盧公。これも碧岩に出づ。

なるか是れ祖師再來意と。師云く、「汝が證明を謝す。僧便ち禮拜す。師乃ち拄杖を拈じて云く、「拄杖邊戸牖を豁開す、沙界に廓周して遮闌を沒す。圓覺伽藍空しく蕩蕩、便ち見る釋迦彌勒文殊普賢。大海江河、昆蟲草木、同じく此に安居し、同じく此に禁足することを。智を以て知るべからず、識を以て識るべからず。所以に道ふ、一塵、正受に入れば、諸塵三昧起る、諸塵、正受に入れば、一塵三昧起ると。幽巖華笑ひ杜鵑啼く、牛頭出でて兮馬頭沒す。然りと雖も只だ拄杖、拄杖に關卻するが如き、還つて這箇の消息有りや也た無や。」拄杖を以て畫一畫して云く、「泥團を弄する漢。」擧す、僧、投子に問ふ、「大死底の人却つて活する時如何。」子云く、「夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」拈じて云く、「擔枷過狀は者の僧無きにあらず。款に據つて案に結することは、他の投子老人に還す。中間些子の誦說有り、今夜四頭首を請じて、再び興に評定せしめん。」

- ① 謝汝證明。老僧多少の感光を減すと。
- ② 牛頭出。神出鬼没の義。
- ③ 不許夜行。夜間は暗くして事物の分明ならず、故に天明に來るべしとの意。
- ④ 擔枷過狀。枷は首かせにて、罪人の首にかけて自由に動くことの出來ぬやうにする機械なり、過狀は自ら白狀すること、この手かせ足かせをになひながらとなり。
- ⑤ 據款。案は公府の案略にて、款は情實の意にて、民情をいふ、罪人の白狀によつてその罪料を決するなり。

結夏上堂、僧問ふ、「趙州、南泉に問ふ、「如何なるか是れ道。」泉云く、「平常心是れ道。」意旨如何。」師云く、「月弓を彎るに似たれば、雨少く風多し。」進んで云く、「州云く、「還つて趣向を假すや也た無や。」泉云く、「向はんと擬すれば即ち垂く、又作麼生。」師云く、「地を踏つば塵飛

ぶ。進んで云く、「州云く、「擬せざれば争か是れ道ふことを知る。」泉云く、「道は知にも屬せず、不知にも屬せず」と。師云く、「八角の磨盤空裏に走る。」進んで云く、「州大悟す。響。」師云く、「畜生の行を行ふと雖も、畜生の報を得ず。」僧便ち禮拜す。師乃ち大衆を召して云く、「文殊門より入る者は、墻壁瓦礫、汝が爲に機を發し、觀音門より入る者は、蝦蟆蚯蚓、汝が爲に機を發し、普賢門より入る者は、歩を動さずして到る。九旬一夏、一線雙勾、月冷かに風高し、山青く水綠なり、是れ汝等諸人作麼生。」良久して云く、「向に道ふ山下の路を行くこと莫れと、果然として猿叫ぶ斷腸の聲。」

- ① 八角。前に出づ。すりばちのこと。
- ② 爲汝。圓通門扇じや。
- ③ 月冷。未だ必ずしも人に渡與せず。
- ④ 鞘略。六鞘三略。
- ⑤ 蟻鵝。はしくまだかが托鉢米をくはへて空を飛ぶ。
- ⑥ 不隱身。丹の隠す處、漆の隠す處、覆藏せず。

頭首の乗拂を謝する上堂、王庫の寶刀、千鈞の弩、是れ陳年の器具なりと雖も、妙處之を用ふること人に在り。四人の頭首、法戰場中、鞘略雙び全く、全鋒敵勝、萬人悚觀す。大家喝采して賞を樹てず、功を立てず、四海狼煙靜に、鵬鵝秋空に在り。拂子を撃つて下座。上堂、「二乗の人、身を三界に藏して、身を菩提に藏すこと能はず、祖師身を藏す處沒踪跡、沒踪跡の處、身を藏さず。」良久して云く、「事を知ること少き時煩惱少く、人を識ること多き處是非多し。」

上堂、擧す、黃檗、衆に示して云く、「達磨、中國に來つて、佛を以て佛を傳へて、餘佛を説かず、

法を以て法を傳へて、餘法を説かず、法は即ち不可説の法、佛は即ち不可取の佛。拄杖を拈じて大衆を召して云く、「燕雀は巖竇に棲まず、虎豹は城市に行かず、鳳凰は枳棘に宿せず、蛟龍は死水に臥せず。」喝一喝、拄杖を擲けて下座。

上堂、「法に定相無し、縁に遇ふて即ち宗。拂子在らざれば、拄杖子自ら神道を展ぶ。」拄杖を擲下して云く、「風は虎に従ひ、雲は龍に従ふ。」

端午上堂、拂子を豎起し、大衆を召して云く、「見るや、山僧が拂子頭上寛廣にして、四十二恒沙の佛國、三十三天、二鐵圍山、總に裏許に在り。

吾れ今收攝すれば、行病鬼王、五蘊鬼王、盡く這裏に向つて、安居禁足す。一切の災疫、老僧身自ら代つて受く。汝等鬼王再び國內の人民を惱害すること有ることを得ざれ、吾が令を聽く者は、三十三天、其の往來に任す、

吾が令を聽かざる者は、永く二鐵圍山に鎖さん。吾が呪を聽け、云く、「揭諦、揭諦、波羅僧揭諦、波羅僧揭諦、誦揭僧羅波諦、誦揭僧羅波諦、揭諦揭。」急急如律令の敕を違犯することを得ざれ。」

上堂、「大圓鏡智性清淨、平等性智心無病、妙觀察智見功に非ず、成所作智圓鏡に同じ、三六七果因轉ず。但だ名言有つて實性無し、若し轉處に於て情を留めず、繁興永く那伽定に處せん。」大衆を召して云く、「一會すや、能く者裏に向つて透得して玲瓏、斬得して淨潔ならば、便ち告香底の消息を知らん。」

上堂、現成底造作すること勿れ、也た凡を憎み聖を慕ふこと莫れ、亦覺を續いで鶴を截ること莫れ。雲岫を出で、水壑に歸す。達磨西來、千錯萬錯。

上堂、「一切諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提、皆此の經より出づ。」良久して云く、「僧は寺裏に投じて宿し、賊は不防の家を打す。」

上堂、青絹の扇子風涼足れり、二八の佳人畫堂を出づ。雙陸暗に抛つ紅瑠璃、紫微華下。潘郎を打す。

上堂、熱熱熱熱、農夫田を耘つて、背皮裂く、滿鉢盛り來り取つて飽いて喰ふ。粒粒農の汗血に非ざる無し、諸人に報ず打して徹せしめよ。杷を拽き車を牽いて飯錢に酬いんことを。道ふこと莫れ老夫曾て説かずと。

上堂、「一句は江南、兩句は江北、清風月下株を守る人、涼兔漸く遙にし、春草綠なり。建長老漢、發癡發狂、白日青天、牛に騎つて屋に上る。」喝一喝して下座。

上堂、「一夏將に滿ちんとす、汝等諸人還つて自己の契券分曉することを得るや也た未だしや。若し分曉することを得ば、出で來つて説き看ん。老僧が與に合同文印を捺起せよ。」拄杖を擲けて下座。

解夏小參、僧問ふ、「南泉兩堂首座、猫兒を爭ふ、南泉提起して云く、「道ひ得ば即ち斬らず。」衆無

①法即。止だ止だ説くを須ひす。
②遇縁。始より衆數に墮せず。
③風從虎。猶ほ是れ衲僧の窠窟、何の處にか救ひ得ん。
④急急如律令。必ず守るとの誓言。
⑤大圓鏡智。以下、那伽定に處せんまでは六祖の語なり。
⑥便知告香。隻手に衆香國の飯を取つて、十方國土に布施す。

①勿造作。向はんと擬すれば觸件す。
②潘郎。三國一の風流男。
③背皮裂。誠に農夫の血汗じや。
④滿鉢盛來。法身却つて飯を喫するや也た否や。
⑤發癡。大いに醉漢に似たり。

語、泉、猫兒を斬卻す、意作麼生。」師云く、「奸し與に猫兒を奪卻するに。」進んで云く、「泉、趙州に舉似す、州草鞋を戴いて出で去る、又作麼生。」師云く、「卻つて鶴唳を將つて悞つて驚啼と作す。」僧禮拜す。師乃ち云く、「萬里寸草無し、門を出でては便ち是れ草。洞山は則ち固に是、石霜還つて免れ得んや。若し這裏に向つて見得せば、便ち洞山を見ん。洞山を見得せば、便ち石霜を見る、石霜を見得せば、便ち無學老漢、過犯彌天なることを見得せん。所以に道ふ、九鳥射盡して一翳猶ほ存し、一箭地に墮ちて天下黑暗。」

霧に拄杖を拈じ、畫一畫して云く、「阿刺刺。」復た擧す、僧、曹山に問ふ、「塵を撥つて佛を見る時如何。」山云く、「直に須らく劍を揮ふべし、若し劍を揮はずんば漁父巢に棲まん。」拈じて云く、「趙孟の貴ぶ所、趙孟能く賤んず、五日前觀光すべきに足れり、十日の後敢て相許さず。何ぞや、建長從來、柳下惠。」

- ① 一翳。一法を見ざれば大過患か。
- ② 阿刺刺。おやおやと云ふ驚きの語。
- ③ 趙孟。孟子の句。
- ④ 柳下惠。その述を師とせずといふ人が多い。
- ⑤ 獲。きりぎりす。
- ⑥ 眞常。眞空常寂の義にて、人具足の本性をいふ、不增不減、不變不動。
- ⑦ 發機。洒脱なものもや。

上堂、一毗盧の師、法身の主、白骨積んで山を成し、寒蟄秋露に泣く。是れ法爾如然にあらず、是れ眞常の流注にあらず、是れ背覺合塵にあらず、是れ迷を抛つて悟に就くにあらず。拂子を擧つて云く、「機を發することは須らく是れ千鈞の弩なるべし。」

中秋上堂、若し此の事を論ぜば、午夜の月の如し、空に住せず、空を離れず、或は東或は西、

乍ち缺け乍ち圓なり、高低俱に到るも、十萬八千、謝家の人は、漁船に在らず。上堂、釋迦の慳、彌勒の富、八十の老人分夜燈、烏龜鑽破す須彌の柱、象骨阿師空しく輓毬、何ぞ似かん禾山の解打鼓。咄、寐語することを得ざれ。

觀音長老至る上堂、人は京師より來り、去つて住山翁と作る。説き盡す山雲海月、聲前の一語通ぜず、事函蓋を存し、理箭鋒を拄ふ。爾は啞の如く、我れは聾の若し。虎南山に在つて大蟲を咬む。

上堂、竺土大仙の心、東西密に相付す。芳草、萋萋たり鸚鵡洲、秦川歴歴たり漢陽の路。天水に似、月勾の如し、少年客と爲る處、今日君が遊ぶを送る。

上堂、一夜上堂せんことを思量して、黃昏より坐して三更に到る、抖擻すれども更に一句無し。今朝口裏膠生ず。良久して云く、「人貧にして智短く、馬瘦せて毛長し。」

上堂、多得は少得に如かず、少得は現得に如かず。現得は不得に如かず。拂子を擧つて云く、「我見燈明佛、本光瑞如此。」

上堂、「獅子吼無畏の説、河沙の諸佛同一舌、針頭用ひず重ねて鐵を添ふることを。」良久して云く、「大小の建長、巧を弄して拙となす。」

- ① 竺土。この句、石頭の參同契の語なり。
- ② 萋萋。はえしげること。
- ③ 歴歴。分明なること。
- ④ 我見。法華の句、佛が因地に燈明佛の時、記別されたが、今は事實となつたと。

開爐、太守至る上堂、火爐頭邊一轉語有り、胸中に蘊在して、未だ曾て容易に拈出せず。檀那到來、拈出して、箇の暖熱を作さん。「拄杖を拈じ、移つて東邊に向つて云く、「山悠悠水悠悠、幽州江口、采石渡頭、華山に馬を歸し、桃林に牛を放つ。與麼の告報、拄杖子還つて甘ふや也た無や。」卓拄杖一下して云く、「曾て霜雪の苦を経て、楊華の落つるにも也た愁ふ。」

達磨忌拈香、^① 嗚啞嗚啞、對面是れ誰ぞ、眼圓に齒闕く。我れ伊を識らず、^② 徳の報すべき無く、恩の酬ゆ可き無し。^③ 茫茫たる滄海浪石頭を打す。

上堂、祖師未だ來らざる已前、諸人醋を喫して未だ曾て鹹と道はず、既來の後、諸人山に上つて脚濕ふと道はず。大都を法爾如然、何ぞ必ずしも此の荆棘を添へん。建長數へて吾が祖に到る、已に二十七代を得たり。阿師數へて迦文に到つて、已に是れ二十八枝。東西兩段同じからず、知らず甚の傳授か有らん。諸人若し也た會得せば、祖師猶ほ在り、若し也た會せずんば、蒼天冤苦。

上堂、千種の言、萬般の語、三尺の竹篋頭、黃金糞土の如し。諸人若し也た盡く掀翻せば、也た是れ、泗州の人、大聖を見る。

上堂、「光陰箭に似、日月梭の如し、雲少室を埋め、凍黄河を鎖す。」良久して云く、「衣穿つて肘露

る也、^④ 靜處薩婆訶。」

上堂、入理深談全く照對無し、迦葉鈴を聞いて舞を作し、老盧半夜、^⑤ 碓を踏む。白雲斷ずる處是れ青山、行人更に青山の外に在り。

冬至小參、「^⑥ 枯桑天風を知り、海水天寒を知る。祖師門下の客、只だ觸體乾くことを貴ぶ。與麼與麼、威音那畔全く來由を没す、不與麼不與麼、濟北の家風、却つて些子に較れり。衲僧家自らはれ彼無く此無し。飽參の人、何ぞ須ひん短を按べ長を論ずることを。青山往來を礙へず、夜深けて狗露柱を吠ゆ。張公却つて李公に報ず、説いて道ふ石牛子を生ずと。」拄杖を以て畫一畫して云く、「勞して功無し。」復た擧す、僧、投子に問ふ、「大死底の人却つて活する時如何。」子云く、「夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」拈じて云く、「金針眼を刺す、之を擬すれば還つて差ふ、烈士成功、^⑦ 狂矢を發つ。是れ汝等諸人甚れの處にか古人と相見せん。」運喝兩喝。

上堂、拄杖を拈じて云く、「這裏に透得せば、^⑧ 儼に許す。地獄を出づることを。那邊に透得せば、儼に許す地獄に入ること。其れ或は未だ然らずんば、^⑨ 驢唇先生の道ふ底。」拄杖を靠く。上堂、月冷かに、^⑩ 霜天道者孤なり、五台山上文殊有り、諸人若し也た悟り去らば、一生參學の事

- ① 箇暖熱。あまり愛想がない。
- ② 嗚啞。あああとなげくと。
- ③ 無徳可報。水一滴、粟一粒。
- ④ 茫茫滄海。缺齒の老僧、未だ澄潭と激浪とに在らず。
- ⑤ 猶在。肉尚ほ温なり。
- ⑥ 泗州人。方語に云く、「可可地、又慣れ見る。
- ⑦ 雲。或は雪の字の誤か。

- ⑧ 也。おき字なり。
- ⑨ 靜處。無心眞の境界。
- ⑩ 入理。唇齒中の緒餘じや。
- ⑪ 踏碓。出生入死八十生。
- ⑫ 枯桑。この語は會元にある句なれども未詳。
- ⑬ 桑。四料簡、三句、四喝。
- ⑭ 却較。すこしははなせると。
- ⑮ 不許夜行。狗、露柱を吠ゆ。
- ⑯ 發乎狂矢。箭的的に在るが如し、當つて自ら知らず。
- ⑰ 出地獄。調達を救ひ得ん。

畢んぬ。其れ或は未だ然らずんば、三條椽下^①、暫盧都^②。且く看よ、趙州狗子無佛性、忽然として手を伸べて掌を見ず、烈燄光中、鯉魚を釣る。

除夜小參、僧問ふ、「圓悟禪師、佛燈珣禪師を推して、水潭の中に入つて問うて云く、『牛頭未だ四祖に見えざる時如何。』燈云く、『潭深うして魚聚ると、還つて諦當なりや也た無や』と。」師云く、「焦瓶打著す連底の凍。」進んで云く、「見て後如何。燈云く、『樹高うして風を招く。』又作麼生。」師云く、「賊空屋に入る。」進んで云く、「見と未見との時如何。燈云く、『脚を伸ぶることは只だ脚を縮むる裏に在り。』此の意又作麼生。」師云く、「紅爐に入らずんば、争か眞偽を辨ぜん。」進んで云く、「和尚毎に室中、百丈捲席の話、香嚴擊竹の頌を擧げて、道聲未だ絶えざるに、竹篋随つて至る。意作麼生。」師云く、「猛火龜を灼いて吉凶を見んと要す。進んで云く、『還つて衲僧の痛癢を知る有りや也た無や。』師云く、『點。』僧便ち禮拜す。師乃ち云く、『化工才に動じて凍痕開く、露柱燈籠笑ひ滿腮。』消息盡くる時重ねて會面す、赤、洪崖、白洪崖を打す。大衆會すや、一句は新年頭に在り、一句は舊年尾に在り。新年頭に薦得せば、便ち知らん舊年去らざることを。舊年尾に薦得せば、便ち知らん新年來らざることを。舊既に去らず、新既に來らず、南に泰華有り、東に天台有り、西に峨眉有り、北に五

① 暫盧都。默然として言はず。
② 鯉魚。淵に臨んで多くは見る魚を得ることの難きことを。
③ 點。點破のことなり。
④ 消息盡時。三百六十の借鏡のされた時分。
⑤ 洪崖。頭の赤いせきぞろが頭の黒いせきぞろの鼻をれちつた。せきぞろは「節季にて候ふ」の意、歳末の乞食のいふことば。

台有り。阿呵呵。富んでは、千口も少きを嫌ひ、貧にしては一身も多きを恨む。復た云く、「流泉は是れ命、湛寂は是れ身、子湖狗を看、夫子鱗を獲たり。」

歲旦上堂、僧問ふ、「記得す、大慧禪師、毎に竹篋を擧げて云く、『喚んで竹篋と作すときは則ち觸る、喚んで竹篋と作さざるときは則ち背く』と、如何。』師云く、『坑に墮ち墜に落つ。』進んで云く、『只だ背觸外の如きんば如何が相見せん。』師喝して云く、「爾が頭、什麼の處にか在る。』僧禮拜す。師乃ち云く、『元正、喜色を添へ、瑞雪、長空に滿つ。爲に祝す邦君の壽、華は開く萬歲松。』

上堂、「一二三四五、從頭君が爲に擧す、謹んで參玄の人に白す、光陰虚しく度ること莫れ。』卓拄杖して下座。

上堂、「道不及の處、一句を説く、説き了つて還つて不説の時の如し。冰泮け雪銷して春色、動く、老梅紅拆く去年の枝。拂子を撃つて下座。

元宵上堂、天上月圓に、人間、月半なり。燈明如來、賊に和して款を納る。上堂、山萬朶水萬支、明月乍ち圓に乍ち缺け、白雲乍ち合し乍ち離る。老胡九年面壁、無孔の鐵鎚を賣弄す。

上堂、山僧方丈の内より出づれば、諸人僧堂の中より來る。坐底は自ら坐、立底は自ら立、甚の

① 嫌千口。鉢飯で十方法界を供養する。
② 夫子獲鱗。春秋を書き止めた。
③ 爾頭。者裡頭上に頭を安んず。
④ 説一句。目出度い一句を行得す。
⑤ 月半。半明半暗。
⑥ 甚虧缺。きね針ほども朕迹はない。

虧缺の處か有る。若し也た好肉に瘡を剝るは、過諸人に在り、山僧が事に干らず。

上堂、「二は一に由つて有り、一も亦守ること莫れ。十里の牌、五里の埃、張婆が店、李公が酒、水北雲南、驢前馬後。是れ汝等諸人、還つて護惜すや也た無や。」良久して云く、「正狗油を偷まず、雞燈蓋を銜んで走る。」

上堂、内より放出せず、外より放入せず、全火祇候、且つ階級無し。然も此の如くなりと雖も、枯木巖前差路多し。

上堂、「山僧別に長處無し、衆に對して曾て脱空せず。所以に道ふ、文殊普賢・觀音・彌勒・狐狼・野干・豺狸・鼯鼠・守宮・百足・蜻蜓・蜈蚣。」卓拄杖して云く、「依倚として曲に似て才に聽くに堪へたり、又風に別調の中に吹か

る。」佛涅槃上堂、「瞿曇、今朝寂滅を示す、波旬は舞を作し、人天は悲しむ。」拄杖を拈じて云く、「南去北來、人自ら老い、夕陽は長く釣船の歸るを送る。」卓拄杖して下座。

東福の無關至る上堂、慈明、神鼎を訪ひ、東福、福山に見ゆ。西河の獅子を弄せず、哮吼更に兩般無し。盤珠を走らしめ珠盤を走る、古今今諸人自ら看よ。

建仁の虚庵至る上堂。賓、主を看、主、賓を看る。爾底我れ會せず、我れ底爾聞かず。一對の鐵錘無孔打成す。一合の乾坤、同じく闌干に倚つて一語無し、同じく看る海山暮雲を生ずることを。

上堂、東山下の事、節度使の信旗の如くに相似たり。南來北來、只だ觀瞻すべし、犯著すべからず。犯著するときは則ち千里横屍。拄杖を靠けて下座。

上堂、「仰面天を見ず、低頭地を見ず。」大衆を召して云く、「會すや、達磨將ち來らず、迦葉門前底。」卓拄杖。

上堂、明月雙溪八詠樓、少年客と爲つて君が遊を送る。青山礙へず行人の路、自らはれ行人。白頭を嘆ず。

浴佛上堂、「老胡呌地一聲の時、大言牌を開いて語甚だ癡なり。是れ年々惡水を澆ぐにあらず、他の老に到るまで非を知らざることを洗ふ。」卓拄杖して下座。

結夏小參、僧問ふ、「九旬禁足英靈を埋没す、三月護生株を守つて兔を待つ。如何なるか是れ衲僧本分の事。」師云く、「鐘聲爾が觸體を穿破す。」進んで云く、「記得す、龐居士云く、「十方同聚會、箇箇學無爲、此れは是れ選佛場、心空及第して歸る。」此の意如何。」師云く、「太虚掛針の路無し。」進んで云く、「德山小參答話せず、還つて爲人の處有りや也た無

- ① 埃。一里塚(里程標)なり。
- ② 馬後。舊時の路を踏むこと莫
- ③ 止狗不偷油。之れらが佛光の悟後の刻苦より出た些子。
- ④ 依倚。古曲の調に似て居るが、時時別の調べが交つてならぬ、眞箇の物でないからじやと。
- ⑤ 人自老。天人は天に歸し、地神は地に歸す。
- ⑥ 無關。普門、後に南禪開山となる。
- ⑦ 虚庵。祐圓、蘭溪隆に嗣ぐ。

- ① 不可犯著。動著すると、やけ火箸が出る。
- ② 仰面。眼睛、筋なし。
- ③ 嘆白頭。但た頭の白く人の老いたるを看て、人の老いて頭の白きことを知らず。
- ④ 澆惡水。元來人の是非を説くはきらひじや。
- ⑤ 心空及第。白衣の拜相じや。

や。師云く、「龍、鳳巢に宿す。」進んで云く、「趙州小參答話せず、又且つ如何。」師云く、「貧にして富の装裏を作す。」進んで云く、「三句已に師の指示を蒙る、向上宗乗の事如何。」師云く、「一老一不老。」僧禮拜す。師乃ち云く、「十五日以前、十五日以後、一線路を撥開し布袋口を結却して、諸人と九十日の内、水牯牛子を安頓す。貴ぶらくは百不知百不解にして、月に臥し雲に眠り、東倒西播せんことを要す。所以に道ふ、太陽門下日々三秋、明月堂前時々九夏。寶劍を荒草堆頭に擲ち、紅旗を千聖頂上に卓つ。便ち以て大方に獨歩し、天外に出頭すべし。然も是の如くなりと雖も、切に忌む頭角の生ずることを。」復た擧す、僧、洛浦に問ふ、「魔佛不到の處如何が體會せん。」浦云く、「燈明かなり千里の象、暗室に老僧迷ふ。」拈じて云く、「洛浦の好語、只だ是れ這の僧の語に答へ了らず、我れは諸人に點向せんと欲す、恐らくは負累を成さんことを。來日四頭首を請じて、各所解を呈せしめん。」頭首の秉拂を謝する上堂。①落頼の家風折脚鐺、大家扶豎し大家撐ふ。老來怕れず家醜を揚ぐることを、②甚の眉毛落ちてか又生ずることを管せん。」上堂、諸佛說下到的處、正に是れ藥忌の譚。老僧曾て諸人を屈抑せず、諸人各各水洒げども著けず。

上堂、思量不到の處、構赴不及の時、鳥は棲む無影の樹、華は發く不萌の枝。

上堂、拄杖を拈じて大衆を召して云く、「人を殺す冤賊、已に老僧に收下し了らる。也た諸人を普請して、各各安心。」卓拄杖して下座。

上堂、一夏只だ三箇月有り、眨眼過し了る兩箇月、曠大劫來生死の根、七尺單前打して徹せしめよ。

太守、金光明經を書し陸座を請ふ。師拂子を拈起して云く、「信相菩薩夢る所の金鼓を見んと要すや。」拂子を以て左邊擊一下して云く、「只だ是れ這れ、建長老漢が拂子を見んと要すや。」右邊擊一下して云く、「只だ者れ是れ、只だ金鼓聲の中、一切の言詞を具し、一切の妙義を具して甘露門を開き、甘露城に入る。甘露室に處し、諸の衆生をして甘露味を食はしめ、一切の罪愆を懺し、一切の過患を滅せしむるが如し。啞者能く言ひ、盲者能く視る、聾者能く聽く、跛者能く行く。此れを別別解脱と名く。老僧が拂子も也た些少の變化有り、能縦能奪、能殺能活、體有り用有り、照有り權有り、凡聖の窟穴を破り、佛祖の性命を斷ず。其の堅や、天魔呵手するに分有り、其の横や、外道窺覷するに門無し。若し喚んで一と作さば、夢時と覺時と同じからず、若し喚んで二と作さば、覺時と夢時と別無し。若し夢時に向つて薦得せば、便ち見ん、釋迦如來、本曾て生ぜず、亦曾て滅せず、等正覺を成じ、亦曾て說法度生せず、亦曾て法眼藏

- ① 七尺單前。色力壯健なると
- ② 些少變化。がてんがゆかぬ。
- ③ 喚。金鼓と拂子と。
- ④ 夢時。一切の言詞を具す。
- ⑤ 無別。金鼓に寤寐の二相なし。

を付せざることを。若し覺中に向つて薦得せば、便ち見ん、釋迦如來壽命無量、福德無量、說法無量、化度無量なることを。愆麼に見得せば、夢時即ち是れ覺時の道理、覺時即ち是れ夢時の消息なり。元長老が拂子、信相菩薩の鼻孔を穿過し、信相菩薩の金鼓、元長老が面門を撞破す。「良久して云く、「青蓮水に映じて華の開くこと久し、自らは是れ行人未だ家に到らず。復た偈を説いて曰く、「諸佛本是れ虚空の體、修證成佛亦如幻、諸幻の中に於て實義を説く、實義了了亦實に非ず。如來の金光衆相を示す、略して縁起を示す方便の説、身を捨てて虎を飼ひ王宮を出でず、水を負ひ魚を救ひて空澤に入る。如來の捨身不思議、此れは是れ恆河の一沙のみ。檀那經を書して亡者に報じ、一念普通す諸佛刹、香煙處處佛事を作す、幽冥の路盡く豁開す。老僧此の空空の法を説く、爲に薦む亡靈空覺の體、一靈不昧湛然として存し、即ち證す無生の空法忍。」

① 於諸幻中。如幻中に於て如幻中の佛事を打す。
 ② 可知禮也。日本のいろは、初學をいふ。
 ③ 漿水錢。お湯も。

上堂、骨打骨打、聾の如く啞の如し。上下三指、彼此七馬、甚に因つてか此の如くなる。可知禮也。

解夏小參、「法身に三種の病二種の光有り、九十日の内、山僧時時諸人に説與す、諸人還つて透得すや也た未だしや。若し也た透得せば、偈に許す杖を横肩し草鞋を緊惜して、南瞻部州に鉢を展べ、西瞿耶尼に飯を喫し、大洋海底に馬を走らしめ、鐵輪頂上毬を轉ずることを妨げず。是れ箇の洒洒也。」

落落の衲僧 也た道へ曾て福山老漢に見え來ると。若し此の如くならずんば、漿水錢は且く置く

草鞋錢阿誰をして還さしめん。「復た擧す、仰山、巖頭に參ず、頭、拂子を豎起す、仰山坐具を展ぶ。頭拂子を拈起して背後に置く。仰山坐具を將つて肩上に搭けて出づ。頭云く、「我れ汝が放を肯はず、只だ偈が收を肯ふ。師拈じて云く、「大小の巖頭、分毫上に向つて、利を取る。」

解夏上堂、「來らんと要せば便ち來る、去らんと要せば便ち去る。脚は是れ自家の脚、路は是れ官中の路。暮に大衆を召して云く、「會すや、絲毫を掛著せば、西秦東魯。」卓拄杖して下座。

新舊知事を謝する上堂、秋風、涼しく秋氣清し、烏飛び兎走り、斗轉じ參横ふ。老僧落得脚を展べて睡る、自ら人の折脚鑰を扶くる有り。

上堂、「露冷に天高くして秋毫を著けず、山遙に海濶うして一塵到らず。正與麼の時、諸人作麼生。」良久して云く、「也た是れ鬼漆桶を争ふ。」

① 草鞋錢。おれが財布の錢を借りて、皆濟はいつじや。
 ② 汝放。これは滴油筋じや。
 ③ 取利。盗人のうはまへ。
 ④ 路是官中。舊路莫踏、新路不二踏破、舊路不二重踏、新路非踏破。
 ⑤ 純圓。暫時の安名。

武州太守の忌、「法華楞嚴を讀して陸座を請ふ。妙性圓明、諸の名相を離る、妙音普應して十方に遍滿す。塵塵朕迹を留めず、法法更に遮欄を没す。天に在つては天に同じく、人に在つては人に同じ。偏圓往來を礙へず、迷悟更に差別無し。法華に在つては則ち純圓獨妙、楞嚴に在つては則ち妄を披き眞を析つ。法華は深固幽遠、楞嚴は明白洞達。法華は眞實相を示し、楞嚴は方便門を開く。一道清淨、無壞無雜、果滿眞常、功無得に歸す。」

盡すれば、沙界に廓周し、一塵中邊に寄らず。此れは是れ秘密、總持、亦一乘圓頓と名く。佛佛異口同音、這箇の時節を出でず、只だ今日の如き、武州太守一周の霜露、忌日斯に臨めり。覺性湛然として、如來光中出沒自在、這裏に向つて轉歩せんことを要す。「拂子を以て指して云く、「阿那青黯黯の處に去れ。」復た云く、「僧祇大劫前頭の路、無依無欲今古無し。蕩蕩圓成す百萬門、此れは是れ老僧行履の處、汝吾が向上の關を透らんと要せば、須らく者裏に向つて急に歩を進むべし。思量すると莫れ、回顧すること莫れ、手を撒して堂堂、臂を掉つて行け。吾れ那裏に在つて汝を相接せん。黄金の城郭、妙高臺、夜半子の時日卓午。」

太守、釋迦如來一鋪を繪き、法華・金剛・圓覺を寫して、最明寺殿の爲に陸座せんことを請ふ。「如來の法性、所説の法を離れず、所説の法、即ち是れ如來の體。迥迥廓然として無寄、頭頭運用無方。一即三、三即一、法華・金剛・圓覺、不同不別、此れ即ち彼れ、彼れ即ち此れ。醍醐乳酪更に異味無し、佛佛異口同音、句句全く報化を超ゆ。一氣春を回して萬覺自然に發秀し、一月海を出づ、萬邦昭明ならずといふこと無し。此れを金剛の正體と名く、亦諸佛頂句と名く。塵毛刹海、動地放光、塵點劫前、菩提具足す。且く道へ、最明寺殿何の報地に生ず、塵塵刹刹是れ家郷、千佛光中同じく授記す。復た云く、「年年霜露慈容を念ふ、罔極恩深うして報ゆるに窮り莫し。首を回せば廓然、三際斷ゆ、靈山の一會香風を起す。」

- ①沙界。恒河沙の世界。
- ②總持。陀羅尼。
- ③如來光中。佛智慧をいふ。
- ④相接。同道唱和。
- ⑤三際。過去、現在、未來をいふ。

冬至小參、僧問ふ、「夾山と定山と同じく行く。定山云く、「生死の中に物有り、即ち生死に迷はず、」意旨如何。師云く、「鶏、燈臺を銜んで走る。進んで云く、「夾山云く、「生死の中に物無く、即ち生死無し、」又作麼生。師云く、「土宿黄牛に騎る。進んで云く、「二人互に相許さず、同じく往いて大梅の常禪師に問ふ、「那箇か親、那箇か疎。」梅云く、「一親一疎」と。師云く、「不疑の地に鉤在す。」進んで云く、「次の日再び往いて問ふ、「那箇か親、那箇か疎。」梅云く、「親者は問はず、問者は親しからず、此の意又且つ如何。師云く、「劍は飢人の手に握る。」僧禮拜す。師乃ち云く、「屈述ふるに堪へたり、」此の字公門に入らば、九牛車けども出でず。巖頭禿を呈し棹を舞し、祕魔一向に叉を拏げ、臨濟胡喝亂喝、徳山雨を打し風を打す。這の一隊の漢、總に未だ、轉身の處有らず。福山

屋下に屋を架することを解せず、脱胎、換骨の手を施さんことを要す、諸人還つて會すや、所以に道ふ、華岳參天の勢有り、一塵其の高さを減ぜず。紅日天に麗くの明有り、一草も其の影を遺さず。正當今日、一陽來復す、今夜分冬、甚に因つてか、與麼に説話す。「草主丈一下して云く、「玉筋虎口を撐ふ。」復た擧す、雪峰、衆に示して云く、「世界濶きこと一丈なれば、古鏡濶きこと一尺なれば、古鏡濶きこと一丈、世界濶きこと一尺なれば、古鏡濶きこと一尺なれば、玄沙云く、「火爐濶きこと多少ぞ。」峰云く、「古鏡の濶きが如し。」師拈じて云

- ①鶏銜。よそ見をするなど。
- ②土宿。土地神なり。
- ③屈堪述。脚を伸ぶることは縮脚の中に有り。
- ④一字公門。政府へ出した訴状は、再び一字も變ずることは出来ぬと。
- ⑤轉身處。牛を牽して筋角を収めず。
- ⑥屋下架屋。明頭に明頭を打せず、暗頭に暗頭を打せず。

く「大衆看よ看よ、山門、佛殿に騎却して、汝等諸人の鼻孔裏より去れり。」
冬至上堂、冬至寒食一百五、二十四番華信の風。盡く者裏従り流出す。
錯錯、拄杖夜來八角を生ず、何ぞ似かん、龍牙の破木杓に。

月旦新舊頭首を謝する上堂、「一を擧して二を擧することを得ず、一著を放過すれば第二に落在す。」良久して云く、「語助と謂ふ者、焉哉乎也。」

開山忌日拈香を請ふ。涅槃を證せず生死に住せず、茫茫たる大地行蹤を絶す。蠅螟眼中夜市に遊ぶ。父は、の爲に隠す、手を借つて香を拈す。恩を知つて恩に報ゆるの句、日午三更を打す。

上堂、「菩薩子喫飯來。」卓拄杖して云く、「今年田又熟す、更に肚皮を放開す。」

上堂、拄杖を拈じて大衆を召して云く、「白日空しく過すこと莫れ、青春再び來らず。堂前の露明柱、歳々蒼苔を長ず。」左右を顧視して、拄杖を靠けて下座。

淨智寺、曇華堂の額を掛くるを請ふ。「武州玉を埋んで茲の山に在く、縹緲たる金仙梵宇寬し。鐘鼓一新龍象集る、優曇華放いて正に高寒。大衆

- ① 換骨。天下の人の爲に生體を抜く。
- ② 與慶。建長が舌頭の落處を知るや。
- ③ 古鏡。雲峰が鏡は強弱に随ふ。
- ④ 二十四番。二十四種の花あり、一番は梅花。
- ⑤ 破木杓。そこぬけびしやく。
- ⑥ 謂語助者。これは千字文の末尾の語なり、語言の助輔と稱する焉は反説なり、哉は歎なり、乎は嗟なり、也は辭を絶するなり、焉と也とは決辭なり、哉乎は疑辭なり、已上同書の注に見ゆ。「やいそれは佛光和尚、どこから買ふてきたと云ふ下語なり」と或抄にあり。
- ⑦ 借手拈香。良薬も良薬で功能が出る。
- ⑧ 日午打三更。日中を夜中にする。

優曇華、瑞現の處を見んと要すや。「手を以て額を指して云く、「優曇華は清淨無垢、色塵に住せず。是れ諸佛の妙容、乃ち人天の景仰すること猶ほ寶洲の能く一切の妙寶を生ずるが如く、猶ほ朗月の能く一切の幽冥を照すが如く、猶ほ良薬の能く一切の煩惱を療するが如く、猶ほ甘露の能く一切の焦熱を滅するが如し。一切の諸善功德を莊嚴し、一切の菩提行願を成就す。若し者裏に向つて薦得せば、便ち清淨解脱の門に入るべし。其れ或は未だ然らずんば、暮雲の歸つて未だ合せざるに對するに堪へたり。遠山限り無き碧層層。」

中秋上堂、「千般惺惺、萬般歴歴なるも、如かじ百不知百不解ならんには。此れを彌勒内院と名く、若し此の三昧を證せば、百劫千生流浪の苦を免れん。」卓拄杖。

上堂、「水に入り泥に入るの句、萬仞崖頭に歩す。獼猴鐵碓に坐し、孩兒華鼓を弄す。古今今兮奈何ともすること没し。機を發することは須らく是れ千鈞の弩なるべし。」卓拄杖。

上堂、「山僧幾日か箇の上堂を做し得たる。直に是れ玄妙、直に是れ奇特。夜來三更三點、箇の噴嚏を打して、覺えず打失し了れり。知らず何れの處にか落在す。是れ汝等諸人、各各老僧が爲に尋ね

- ① 今年田又熟。法身還つて飯を喫するや、よく見よ。
- ② 歳歳。佛光は露柱の蒼苔を目の蓋にする。
- ③ 淨智寺。鎌倉五山の内。
- ④ 暮雲。これは碧岩第二十則の頌(雪巖)、同條參照すべし、宇宙の自然美を詠す。
- ⑤ 未合。まだ日がくれずんばと。
- ⑥ 惺惺。清淨無垢の大菩薩の出世も。
- ⑦ 入水。嬰兒の足下を禮す。
- ⑧ 萬仞。毘盧の頂上を坐斷して。
- ⑨ 噴嚏。くさみすること。

て看よ。東廊下、西廊下、眼單前、薄團上、忽然として摸著せば、却つて將把し來つて山僧に呈似せよ。良久して下座。

太守、十六應身を送る拈香、應供四天下、處々狼藉を成す、神通妙用は尊者に如かず。若し是れ佛法ならば、老僧に還して始めて得ん。爾が空を觀じ定に入ることを要せず、爾が東を指し西を説くことを要せず、爾が龍を降し虎を伏すことを要せず、爾が須臾に騰躡することを要せず。建長寺裏に掛搭して、且く老漢が竹篋を喫せよ。

上堂、「正に知見と説く時、知見即ち是れ心、心、知見と説くに當つて、知見即ち如。今大衆、老僧は大唐の人、今年五十八歳、戌生の人命狗に屬す。良久して云く、「豈に道ふことを見ずや、佛殿塔前狗天に尿す。」卓拄杖。

- ①十六應眞。十六羅漢のこと。
- ②戌生。佛光は戌の年の生れなり。
- ③自古自今。火を道ふて何ぞ必ずしも口を焼却せん。
- ④出醜。衣が破れて肘が出た。

開爐上堂、「些子の火種を挑撥するに、自古自今、其の人を得難し、千萬人の中、一箇半箇有り大衆歳晚天寒く、山空しうして葉落つ。諸人喚んで行脚の土と作すも、少室九年面壁底の時節を説著することを得ざれ。」卓拄杖。

初祖忌上堂、「老和尚何の所有ぞ、金陵一番打脱し、少林尤も更に醜を出す。吾れ今與に遮掩せんとを要す、阿誰か同じく共に出さん。」卓拄杖して云く、「正狗油を偷まず、雞燈蓋を銜んで走る。」

同じく拈香、「金は火を將つて驗み、人は財を將つて驗む。法孫此の兜樓一炷を將つて、這の碧眼の老胡を驗みんことを要す。是れ鼻孔有るか、是れ鼻孔無きか。」香を挿んで良久して、大衆を顧視して云く、「山蒼蒼水茫茫、人貧にして智短く、馬瘦せて毛長し。」

上堂、大衆を召して云く、「赤肉團上に一無位の眞人有り、常に面門に在つて出入す、未だ證據せずんば出で來れ。朝打三千、暮打八百、甚に因つてか此の如くなる。」良久して云く、「韓信鐵鷄を放つ。」

佛成道上堂、拄杖を豎起して云く、「看よ看よ、釋迦老子昨夜三更三點、將に大地衆生の性命を將つて、針鋒頭上に筈在し、三眼國土に入つて、自恣の佛事を作す。是れ汝等諸人還つて知るや也た無や。若し也た知得せば、各々箇の轉身の句を道へ。」良久して云く、「穿耳の客に逢ふこと罕に、多くは刻舟の人に遇ふ。」

長樂・長興・光福の三長老を謝する上堂、短者は自ら短、長者は長、森森密密可憐生、學翁門下凡木無し、葉葉枝枝總是れ香し。」卓拄杖して下座。

上堂、「小隱は山に居し、大隱は市に居す。福山老漢倒泥搗水、是れ汝諸

- ①兜樓。風什麼の色をか作す。
- ②山蒼蒼。山の高きも水の流も祖師の恩乳じや。
- ③赤肉團上。この身體の上に。
- ④一無位。白衣の拜相。
- ⑤朝打三千。打つて打つて打ちまくる。
- ⑥劉。鍼、「さす」なり。
- ⑦三眼國土。淨妙、解脱、無差別の三。
- ⑧罕逢穿耳。穿耳の客は耳に環をつけたる人、達磨又は作家なり、刀を川に落して舟を刻む馬鹿者はいふ。
- ⑨森森。梅檀林中無雜樹。
- ⑩學翁。佛光自らないふ。

人還つて救ひ得んや也た無や。良久して拂子を撃つて云く、「三生六十劫。」

除夜小參、僧問ふ、「僧、瑞巖に問うて云く、「如何なるか是れ佛。」巖云く、「石牛」と、此の意如何。」

師云く、「白月には則ち現ず。」進んで云く、「如何なるか是れ法。」巖云く、「石牛兒」と、此の意又且つ

如何。師云く、「黒月には則ち隠る。」進んで云く、「慙麼ならば則ち不同にし

去るや。巖云く、「合不得。」又作麼生。」師云く、「朱に近づく者は赤し。」進

んで云く、「甚麼に因つてか合不得なる。」巖云く、「同の同なるべき無し。」又

且つ如何。師云く、「墨に近づく者は黒し。」進んで云く、「何れの階級にか落

つ。巖云く、「排不出。」又且つ如何。師云く、「東西南北。」進んで云く、「甚

に因つてか排不出なる。」巖云く、「從前階級無し。」又作麼生。」師云く、「一一

三。」進んで云く、「未審し、何の位次にか居す。」巖云く、「普光殿に坐せず。」

此の意又且つ如何。師云く、「晝夜一百八。」師乃ち云く、「老僧物義を傷めざるの句有り、曾て擧著せ

ず。此の時分歳、諸人の爲に擧すること。一遍著せん、諸人子細に聴取せよ。今冬三箇月、二月總に

是れ大、此の夕是れ歲除、圍爐圍樂として坐す。坐して漏殘の時に到る、一滴新舊を分つ。金烏海門

を出で、雞は拍す欄干の曉、燈籠一歳を添得し、露柱一年を滅却す。嘉州の大象呵呵大笑、黃梅の石

女大いに蒼天と叫ぶ。甚に因つてか此の如くなる。朱顏明鏡の裏、古劍獨體の前。」復た擧す、長生因に

雪峰に問ふ、「光境俱に忘ずる時如何。」生云く、「皎然が過を放さば、箇の道ふ處有らん。」峯云く、

「汝が過を放さば、作麼生が道はん。」生云く、「皎然も亦和尚の過を放さん。」峯云く、「汝に二十棒を

放す。師乃ち拈じて云く、「雪峰は獅子、兒に教へて踞地翻空せしむるが如く、蹉眼することを得ず。皎

然は生生縛縛、哮吼一聲、便ち母を噬むの作有り。」

上元上堂、拄杖を拈じて云く、「柳色黃金嫩く、梨花白雪香し。」大

衆を召して云く、「會すや、此れは是れ然燈如來の説、熾盛光明、神咒な

り。諸人若し會せば、玉樓に翡翠巢ひ、若し也た會せずんば、金殿に鴛鴦

を鎖す。」卓拄杖して下座。

上堂、百千の諸佛に參ぜんより、如かじ一無事の道人に參ぜんには、百

千無事の道人に參ぜんより、如かじ一箇の枯椿に參ぜんには、「大衆を召し

て云く、「且く道へ、枯椿甚の長處か有る。」卓拄杖して云く、「深夜一爐の

火、渾家身上の衣。」

佛涅槃上堂、「如是如是、不是不是、龍魚竿を咬む、虎雞、背を生ず。」卓拄杖して大衆を召して云

く、「會すや、佛滅二千年、比丘慚愧少し。」

上堂、粒米分明に粒珠に抵る。千般の痛苦是れ田夫、盛り來つて滿鉢都べて拋擲、當に念ずべし賣

身し來つて租を納むることを

- ① 皎然。唐の詩僧。
- ② 放汝二十棒。此の鐵券を免るものがない。
- ③ 柳色。みことなる上元なり。
- ④ 熾盛。常說熾然として間斷なし。
- ⑤ 渾家。衣を着けて風呂に入るものは多い。
- ⑥ 生背。之れが虚空の骨の痛むに妙藥じや。

結夏小參、僧問ふ、「僧、古德に問ふ、『如何なるか是れ清淨法身。』」徳云く、「山華開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し。此の意如何。」師云く、「觸體を磕破す。』」進んで云く、「又一古徳有り、云く、『膿滴滴地』と、又且つ如何。」師云く、「九九八十一』進んで云く、『今夜和尚に問ふ、如何なるか是れ清淨法身。』」師云く、「小より僧と爲り今六十、曾て手を擡げて公卿を揖せず。』」僧禮拜す。師乃ち云く、「大圓覺を以て、我が伽藍と爲す、身心安居、平等性智。山僧福山從り瑞鹿に過ぎ、瑞鹿自ら復た福山に過ぐ。其の他を見ず、但だ見る風黄塵を卷いて面を撲つ、車平地を行いて溝を成す。馬蹄畢栗撥刺、南よりし北よりす、牛角峰嶮嶮、或は短或は長、山僧覺えず舌を吐く。何ぞや、精陽剪らず霜前の竹、水墨徒に誇る海上の龍。復た擧す、『法の本、法は無法なり、無法の法も亦法なり。今無法を付する時、法は何ぞ曾て法ならん。』拈じて云く、『世尊此の偈、黒石蜜の中邊、皆甜さが如し、黄連木の根莖、皆苦さが如し。是れ汝諸人、作麼生か呑まん、作麼生か吐かん。』喝一喝。

- 山華開。澗水は谷の水、山の景色の美しきをいふ。
- 不覺吐舌。何故ぞ、是の如し、飯に逢ふて飢を忘す。
- 法無法。説者聽者、元來幻なり。
- 續。「とりもち」なり。穴に落ち壺に墮す。

上堂、古人道く、「擧ぐるに顧みざれば即ち差互す、思量せんと擬せば、何の劫にか悟らん。」師云く、「古徳恁麼の説話、一を去つて一を取る、皮を黏し骨を綴る、獼猴の鬚膠を弄ぶが如く、甚の撒股か有らん。福山が這裏 眼眉毛を見ず、方に是れ眞得なり。」卓拄杖して下座。

上堂、「説にして黙、黙にして説、直鉤鯤鯨を釣り、曲鉤魚鱉を釣る。寛たり兮廓たり兮、古を錯ぎ今を礎く。彌たり兮渺たり兮、巧に非ず拙に非ず。」暮に拄杖を拈じて、卓一下して云く、「何ぞ似かん 銀盤裏に雪を盛るに。」

端午上堂、「法は見聞覺知を離る、見聞覺知是れ法なり。山僧大地の人を普請して、一塵を動ぜず、大安樂の地に入り去らん。」卓拄杖して云く、「唵唵唵、急急急、救救救、擣擣擣。」

上堂、「一夏已に一半を過ぐ、水牯牛 作麼生。是れ爾諸人、各各牽いて法堂上に到らば、頭角全備甚生だ次第せん。奈何ぞ甘つて自ら埋没し、肯て承當せざる。」卓拄杖して下座。

上堂、「月出でて桂林輝く、天香舊枝に發す。東山水上に立つ、蛇女鬢絲を垂る。拂子を撃つて下座。」

解夏小參、「道は物外に非ず、物外道に非ず。豈に道ふことを見ずや、空を捫つて響を追ひ、汝が心神を勞す。夢覺覺非 覺も亦覺に非ず。這裏身を轉得し來り、邦邊騰身一擲せば、大洋海底火星飛び、泥牛哮吼して霜雹を飛す。赤條條空索索、頭を回さんと擬せば、重ねて撲に遭ふ。赤脚にして舟梯に上ること能はず、南北東西 名邈に任

- 説而黙。説話は離微に渉る。
- 銀盤裏。白色の銀盤に雪を盛れば、銀盤か雪か、二物一體、平等即差別、差別即平等の意を顯はす。
- 唵唵唵。助字をいふ、焉哉乎也の如し。
- 作麼生。頭角は生じたか隠れたか。
- 蛇女。蛇は吒か、少女ならん。
- 捫空追響。眼中に山川を種ふ、耳中に鐘聲を貯ふ。
- 重遭撲。天下の衲僧徒に念邈す。
- 名邈。脚下の紅絲、錯るぞ。

す。復た擧す、僧、大同に問ふ、「如何なるか是れ本來の人。」同云く、「共に坐して名を知らず。」僧云く、「恁麼ならば則ち禮拜し去らん。」同云く、「暗に愁腸を寫して誰にか寄與せん。」師拈じて云く、「大同門を開いて客を待つ、此の僧國に入つて觀光す。殊に知らず三代の禮樂は、乃ち五霸諸侯の兵器なることを。」拂子を撃つて下座し。

上堂、「天崖に走徧して脚を下す處無し、大藏を閲盡して口を開く處無し。行不及説不到、今年は去年に勝れり、一老一不老、阿呵呵。」膝を拍して云く、「投子の道ふ底。」

開山忌日拈香を請ふ。生か死か、道はず道はず、蒼天悠悠、紅日杲杲、

阿師の靈骨兮東邊西邊、洪波浩渺兮白浪滔天。沈水一炷兮 恩怨歷然、儉

は不孝を生じ兮義は豊年より出づ。

頭首を謝する上堂、一二三三二二一、題目甚だ分明、上下等匹無し。梅

檀叢林兮梅檀香を吹く、獅子窟穴兮獅子返躑す。

上堂、涅槃後 大人の相、月寒潭に落ち雲碧嶂に收まる。是れ汝等諸人

動著することを得ざれ、動著せば爾が觸轡を打破せん。

上堂、乾坤の内、宇宙の間、中に一寶有り、形山に秘在す。咄。猛虎伏肉を喰せず、獅子豈に鷓

残を食はんや。

上堂、「淺聞深悟、深聞深悟、波斯の鼻孔三尺長し、無角の鐵牛蟲に蛀まる。」卓拄杖して云く、「飯袋子、江西・湖南、便ち恁麼に去るや。」

初祖忌上堂、「阿師未だ來らざる時、眉毛眼上に安ず、阿師既に來つて後、鼻孔大頭垂る。山遙に海濶く、木落ち霜飛び、嗚啞嗚啞。」手を以て搖曳して云く、「老胡の會を許さず、只だ老胡の知を許す。」

無象西堂至る上堂、「白雲庵裏、太白峯前、一句子有り、爾が邊に落在す。無學老漢、也た是れ窮曹司、舊案を検す、十萬里の水面、此の句を尋ねんと要して、上碧落を窮め、下黄泉に入る。六七年の内方に面を見ることを

得、見るときは則ち見了る。不可得にして説き、不可得にして言ふ。只だ低頭して地を覷ひ、仰面して天を看ることを得たり。冤憎會苦、黑蜜

拳を施すことを。」

冬至小參、横に拄杖を按じ、大衆を顧視して云く、「北風面を吹いて、石を走らしめ砂を飛ばす、等しく是れ恁麼の時節、諸人且つ作麼生。若し是れ家裏の人ならば、便ち道はん、雪楊華に似たりと。若し是れ門外の漢ならば、却つて道はん、楊華雪に似たりと。火爐頭の話幾千般ぞ、是れ江南にあらず

- ① 大同。投子、青原下丹霞然三世なり、翠微學に嗣ぐ。
- ② 暗寫愁腸。之れが大目の骨髄じや、東西南北、徒に名遊す。
- ③ 一老一不老。十六の美女と白頭の老翁とがくび引きをなした。
- ④ 投子道底。漆桶不會。
- ⑤ 恩怨歷然。笑ふに堪へたり、悲むに堪へたり。
- ⑥ 題目。正法輪を誘ふこと莫れ。
- ⑦ 大人相。大丈夫人と同じ、修行果滿の人、則ち佛菩薩地の人。
- ⑧ 獅子。南山白額の大蟲を活剗し、東樓夕陽の鐵を撃撞す。

- ① 老胡。達磨なり。
- ② 無象。靜照、入宋して徑山の石溪月に嗣ぐ、在宋十四年、淨智寺に住す。
- ③ 不可得。平漫が屠龍の如し。
- ④ 蜜。半は笑ひ半は恨む。

んば便ち江北、山僧恁麼の品量、諸人還つて甘ふや也た無や。卓拄杖して云く、「草繩謾に接す黄金の索、獅子尋ね難し老鼠の梯。」復た擧す、僧、長沙に問ふ、「如何なるか山河大地を轉得して、自己に歸し去らん。」沙云く、「如何が自己を轉得して、山河大地に歸し去らん。」僧云く、「不會。」沙云く、「湖南城裏好し民を養ふに、米賤く柴多くして四隣に足れり。」師拈じて云く、「山河自己、自己山河。」良久して云く、「龍王宮殿の裏、行客經過ぐること少なり。」

書雲上堂「書雲の佳節寶鑑臺に當る、春は回る空劫已前、華は綻ぶ不萌枝上。」良久して云く、「漆桶不會、鼓を打つて普請して看よ。」

上堂、閻浮世界の衆生、六種の障礙有り、八種の自在有り、只た是れ諸人頭出頭没して、總に覺知せず。若し也た悟り去らば、汝に許す。不動智地を證することを。卓拄杖して下座。

佛 成道上堂「老瞿曇何ぞ不 撇なる、空を指して空を説き、半生半滅、福山是れ兒孫なりと雖も、活計他と各別、鐵船打就して滄溟に泛べ、麥浪堆中、龜蟹を釣る。」卓拄杖して下座。

歲節小參、僧問ふ、「記得す、長髯石頭に到る、頭云く、『大庾嶺頭、一鋪の功德成就すや也た未だ

- ① 艸繩。之れは雲門宗ぞよ。
- ② 春回。初交象なし。
- ③ 六種障礙。本色の衲僧は是れ醒醐を呑むが如し。
- ④ 不動智。寂靜、諸の威儀を現す。
- ⑤ 地。天涯に走遍して足を移す處なし。
- ⑥ 撇。掩、不藏なり。
- ⑦ 半生半滅。誕生の如く寂滅の如し。
- ⑧ 釣龜蟹。釣るは釣つたが、且く道へ、是れ曲釣か直釣か。
- ⑨ 長髯。曠は石頭遷に嗣ぐ。

しや、此の意如何。師云く、「事生ぜり。」進んで云く、「髭云く、『成就すること久し矣、只だ點眼を缺く、此の意作麼生。』師云く、『擔枷過狀。』進んで云く、『頭云く、『點眼を欲すや。』髭云く、『便ち請ふ。』頭乃ち一足を垂下す。響。師云く、『地を掘つて深く埋めん。』進んで云く、『髭禮拜す、還つて講當なりや也た無や。』師云く、『一死更に再活せず。』進んで云く、『頭云く、『汝何の道理を見てか便ち禮拜す。』髭云く、『紅爐上一點の雪の如し。』此の意又且つ如何。師云く、『猶ほ。』這箇の消息有る在り。』進んで云く、『學人也た一鋪の功德有り、和尚如何が點眼せん。』師云く、『不點。』進んで云く、『甚に因つてか點ぜざる。』師云く、『眼不盲に點せず。』僧禮拜す。師乃ち拄杖を拈じて云く、『今夜露地の白牛を烹て、諸人と分歳す、諸人若し也た悟り去らば、已に十分飽足、若し悟り去らずんば、免れず薄批細切し去ることを。』良久して云く、『上は是れ天、下は是れ地、雲碧嶂に生じ、水滄溟に赴く、寒星三點五點、老松十株五株、阿呵呵、會すや也た無や。趙錢孫李、周吳鄭王、取飽に一任す、後悔せしむること無れ。然も是の如くなりと雖も、我が蹄角を動著せしむることを得され。』拄杖を靠く。復た擧す、「古徳頌に云く、『五蘊山頭一段の空、同門出入して相逢はず、無量劫來、屋を賃つて住す、到頭識らず主人翁。』建長は則ち然らず、五蘊山頭一段の空、同門出入して相逢はず、無量劫來屋を賃つて住す、頭を回して撞倒す破燈籠。豈に道ふことを見ずや、龍樓鳳曲を吹き、刈茅童に示さず。』卓拄杖して

- ① 一死。ここで死ぬるは多い。
- ② 這箇。糞を荷ふて葫蘆を載す。
- ③ 露地。前に出づ。
- ④ 賃屋。借屋所帯。

下座。

正旦上堂、「獅子吼無畏說、衆魔眞說を壞すること能はず。凍黃河に拆けて九地裂く、優曇華放く千林の雪。」卓拄杖して下座。

上堂、「贈るに中を以てす上下三指、李白元來是れ秀才、閻羅大王、是れ鬼にあらず。鉢裏飯桶裏の水、多口の阿師背を下し難し。道吾打動す關南の鼓、德山牌を鬧市に卓つ。

丈林山下の竹筋鞭、趙州庭前の柏樹子、阿刺刺。」卓拄杖して下座。

佛涅槃上堂、拄杖を拈じて云く、「三百餘會九年の弓、胸を摩して衆に告げて飯籬一空す。面前背後、僂儂我儂。」大衆を召して云く、「會すや、猫

に歎血の徳有り、虎に起屍の功有り。」拄杖を靠けて下座。

上堂、獨り春風に對して、立つこと片時、闌干覺えず、晝陰移る。東山下の事惆悵するに堪へたり、點々の楊華雪と作つて飛ぶ。

上堂、「祖師門下迥に階梯を絶す。」卓拄杖して云く、「最も愛す江南春雨の

後、青山綠樹黃鸝啼す。」

檀那 法光寺殿周忌、寶藏を慶懺して陞座せしむ。圓滿妙覺大毘盧藏、廓然として沙界に遍周し、混然として量太虚に等し。之を窮むるに其の踪を見ず、之を體するに其の形を見ず。萬同化源、三際

① 僂儂我儂。汝吾れを知らず、吾れ何ぞ汝を知らん。
② 立片時。狗、教書を含む。
③ 晝陰。雞、燈臺を偷む。
④ 點點楊華。適來の花は、こゝでつめた土になつた。
⑤ 光光寺殿。周忌は弘安八年四月四日ならん、時宗は前年に薨す。
⑥ 半滿權實。是れ顯說にあらず、是れ密說にあらず。

不住、一音普遍す河沙の佛國、河沙の佛土、微塵に攝在す。半滿權實の名くべきに非ず、迷悟聖凡の狀るべきに非ず。含靈全體作用して自知せず、菩薩證悟の及ばざる所、此れは是れ如來の秘密三

昧、亦是れ衆生の本覺妙明。只だ今日一塵を撥開し、寶藏を豁開して、諸佛菩薩、龍天八部、燦然として出現するが如し。且く道へ、甚れの處よりか得來る。」卓拄杖し、喝一喝して云く、「毘婆尸佛早

く心を留む、直に如今に至るまで妙を得ず。」復た偈を説いて云く、「一周の霜露尙ほ哀を銜む、天上人間去つて又來る。脚に信せて踢蹴す華藏海、十方佛土寶蓮開く。」

圓覺與華嚴寺の額を掛く。大解脱門在不在無し、十虛無際闔闢自由。故に我が大檀那、圓覺道場を建立して、廣大の佛事を成就す。梵宇霄漢に挿んで觀史夜摩を横吞す、

鐘鼓坤維に振ひ、浮幢刹海を攪動す。願力の持する所、福一切に被らしむ、六凡四聖何ぞ斯に由ること莫けん。便ち見る海晏河清、雨順風調、野老謳歌し、漁人鼓掉すること

を。只だ今日高く寺額を揚ぐるが如きは何の祥瑞か有る。金色照開す三界の外、玉毫長く繞る五須彌。

釋迦の圖繪像を慶懺する陞座、「淨法界身、出沒有ること無し、衆生を愍むが故に、去來の相を示す。太虚無際、我が佛の法身も亦無邊際、衆生無盡、我が佛の誓願も亦窮盡無し。十方に蕩蕩として普應し、

歷劫に恢恢として常に存す。故に我が釋迦世尊、無住相從り無住法を成ず。眞實の理を廓にし、眞實地に住す。一音普演、萬化源を同じうす、一極悲心、含識を拯救す。衆生禱ること有れば、月の

水に臨むが如し、如來世を救ふこと、谷の響に答ふるが如し。只だ今日藤氏妙圓、聖像を圖寫するが如き、功何れの處にか歸す。此の深心を將つて塵刹に奉ず、是れ則ち名けて佛恩に報ずと爲す。「復た云く、「我が佛世尊、無量劫來從り難行苦行を行じ、頭目髓腦を布施す。盡く三千大千世界を將つて、抹して微塵と爲す。是の如き塵數の菩薩捨身、其の數復た此れに過ぎたり。所以に如來衆生田中に栽種し、慈悲の根芽、三千大千世界に徧滿して、恩惠深廣なり。衆生界中佛の一字を聞いて、善心を生ぜざる者有ること無し。人間若しくは綵畫し、若しくは金銀銅鐵の聖像を鑄造せんに、獲る所の功德、世世人天の道を失はず、世世長命富足る、世世諸の惡事無く、世世夫婦子女團圓し、世世見佛聞法せん。此れは是れ決定底の事、今日檀那、此の如來の尊像を寫し、所願必ず圓滿することを得ん。」復た偈を説いて曰く、「繪寫す如來妙色身、十方の諸佛咸く權悅す、龍華の一會今朝に在り、必定當來記荊を成さん。」

浴佛上堂、「毘藍園裏、尼連河畔、然も毛艸を洗得すと雖も、要且つ痒處 曾て抓著せず。不肖の孫只だ背を拊つこと一下、它的腦を轉じ頭を回すことを待つて、却つて連腮兩掌を與へん。更に若し如何若何せば、便ち與に水を戸んで便ち潑がん。」草拄杖して云く、「狗は家の貧を擇ばず、子は母の醜さを嫌はず。」

① 不曾抓著。これで金龜沐浴はできぬ。

結夏小參、「圓覺伽藍、前三後三、平等性智、口を開いて氣を取る。今日は晴れ明日は雨、華は自ら

笑ひ鳥は自ら啼く。村南村北、野水横流、谿東谿西、雲煙出沒。無知の老翁也た煩惱の斷ずべき無く、也た實相の證すべき無し。只だ是れ飽まで飯を喫了す、脚を伸べて一覺睡を打す。起き來つて兩眼を摩挲して、却つて道ふ太虚と古鏡と交參す、法身と草木と齊長す、適も無く莫も無し、樓頭浪宕、苦地獄に在らず、樂、天上に在らず、有る時は背を拊つて錢を乞ひ、有る時は手を伸べて痒を搔く。阿呵阿。「膝を拍つて云く、「誌公は是れ閑和尚にあらず。」復た擧す、趙州、投子に問ふ、「大死底の人、却つて活する時如何。」子云く、「夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」州云く、「我れ早く候白、渠更に候黒。」師拈じて云く、「投子老人、外面は觀光すべきに足れり、其中猶ほ一著を缺く。趙州老漢、所得、所失を償はず、福山恁麼の批判、還つて 救處有りや也た無や。」良久して云く、「波斯胡椒を喫す。」

① 不許夜行。舊時の路を行くと莫れ。
② 我早候白。作家の暗號令じや。
③ 有救處。投子の失利、趙州の語墮を。
④ 有寒暑。進むに堅固の願輪無く、退くに生死の怖れ有り。

上堂、優曇華世に比無し、見を絶し聞を絶す、色に非ず相に非ず。諸人若し也た悟り去らば、九十日の内甘露門に入つて、甘露味を食す、若し也たら然らずんば、寒暑有りて兮君が壽を促し、鬼神有りて兮君が福を妬まん。
上堂、擧す、「臨濟有る時は奪人不奪境、有る時は奪境不奪人、有る時は人境兩俱奪、有る時は人境俱不奪。」大衆を召して云く、「若し四句の下語を作さば 又人境の中に墮せん。山僧は人境の内に在ら

ず、若し一句の下語を作さば、又人境を離却せん。山僧は人境の外に在らず、是れ汝諸人作麼が吾れと相見せん。」拄杖を擲下して云く、「漆桶喫茶去。」

上堂、等しく是れ恁麼の時節、是れ汝諸人甚に因つてか富有り貧有り、飽有り飢有り。只だ汝勤惰同じからず、功力齊しからざるに縁つて、所以に此の如し。如今長夏將に滿ちんとす、更更夢を做さば、方は是れ好手。」卓拄杖して云く、「石を爍し金を流すことは、力を著ず、露冷に秋深くして恨み極り無し。」

弘安八年六月二十四日、太守、龍を讚し雨を祈ることを請ふ。讚して後

雷鳴り雨至つて、三日連注す、此れに因つて上堂す。僧問ふ、「嵩山の破竈

墮和尚、一日山行の次で、一古廟血祭無數なるを見る、師乃ち拄杖を以て竈

を敲いて云く、「此れは是れ泥瓦合成、靈何れ従り來り、聖何れ従り起つて、恁麼に物命を烹宰す。」復

に拄杖を以て敲くこと三下、其の竈自ら墮す。乃ち云く、「破也墮也。」此の意如何。師云く、「墮と不

墮と總に是れ堆塵。」進んで云く、「少頃あつて青衣の人有り、拜を前に設けて云く、「師の無生法を説く

を蒙りて、已に生天を得。」又且つ如何。師云く、「魚臭水に投ず。」進んで云く、「侍者云く、「某甲久しく

和尚に侍すれども、法要を蒙らず、竈神却つて和尚の指示を蒙り、却つて生天を得。」師云く、「我れ什

麼をか説かざる、只だ道ふ破也墮也と。」侍者も亦乃ち悟道す、又作麼生。師云く、「蔗甜頭を咬む。」

●更更。時刻のかがりがはり。
●不著方。此に長生の腕力もなし。

進んで曰く、「只だ某甲が如き、和尚に侍して檀那の府中に入る、檀那天久しく晴るゝを以て、和尚を

請じて水墨の畫龍を讚せしむ。師讚して云く、「偉なるかな、戴角擎頭、觸處崩崖裂石、蒼生久しく矣焦

枯、快に一聲の霹靂を奮へ。」讚し罷んで、即時に雷聲地に震ひ、大雨隨ひ至る。一連三日、天下普く

潤ふ。和尚の法力古人に過ぎたりと謂ふべき耶。師云く、「癡人の面前、夢を説くべからず。」進んで云

く、「竈は是れ泥瓦合成、龍は是れ水墨畫底。且く道へ、靈何れ従り來り、聖何れ従り起る。」師云く、

「三祇大劫より修す、此の閑消息無し。」進んで云く、「某甲亦和尚に隨侍す、

大地恩を蒙る。某甲未だ法雨に沾はず、願はくは師慈悲、乞ふ方便を垂れ

よ。」師云く、「莫妄想。僧禮拜す。師乃ち云く、「上天久しく雨らず、大地

塵埃を生ず。苗稼將に穡に就かんとす、將軍吾れを請じて齋す。就いて水

墨の龍を讚す、卷を展ぶれば雲堆を作す、手に信せて聊か一揮す。剗然

として風雷を起す。連日甘雨を注ぐ、霑ひ足り九垓に遍し、早禾已に子を

結ぶ、晚禾皆胎を出づ。萬民悉く鼓舞す、將軍笑臆に盈つ。且く滿鉢の飯を喫して、處處羅齋

すべし。諸天我が願に副ひ、甚だ慰す憂民の懷。」拄杖を拈じて云く、「拄杖子、爾且く來つて、豐年太

平の曲を唱起せよ。」卓拄杖して曰く、「三臺は須らく是れ大家催すべし。」

解夏小參、僧問ふ、「琅琊和尚示衆に云く、「有る時の一棒は、漫天の網と作して、俊鷹快鶴を打し、

●癡人面前。前軒に出づ。
●莫妄想。屋下に屋を架せず。
●剗然。物の破るるおと。
●滿鉢飯。三輪空寂の食なくらふて。
●可羅齋。残りを一切衆生に施せ。

有る時の一棒は、布絲網と作して、蜆を搥し蝦を撈す。有る時の一棒は、金毛の獅子と作す、有る時の一棒は、蝦麻蚯蚓と作す、此の意如何。師云く、「赤膊綉毬を輓す。」進んで云く、「敢て和尚に問ふ、如何なるか是れ一棒、漫天の網と作す。」師云く、「我れ者の話に答へ得ずんばあるべからず。」進んで云く、「如何なるか是れ一棒、布絲網と作す。」師云く、「且く道へ、爾が與に説かにか爾が話に答へんか。」進んで云く、「如何なるか是れ一棒、金毛の獅子と作す。」師云く、「爾老僧を誘ふを得ざれ。進んで云く、「如何なるか是れ一棒、蝦麻蚯蚓と作す。」師云く、「添へ得たり一場の愁。」進んで云く、「此の四棒の中、那一棒か最も親しき。」師云く、「高聲に問へ。」進んで云く、「和尚尋常竹篋頭下、是れ俊鷹快鶴を打つか、是れ蜆を搥し蝦を撈するか。」師云く、「老僧敢て闍梨に辜負せず。」進んで云く、「今日長期已に滿つ、鷹鶴蝦蜆如何が細素せん。」師云く、「燈籠壁に沿うて天台に上る。」僧禮拜す。師乃ち云く、「西天には蠟人を以て験と爲す、建長も亦蠟人を以て験と爲す。等しく最れ與座の時節、中間些子の誦訛有り。汝等諸人をして各所解を呈せしむるに、諸人の所見、衆盲、象を摸するが如し。足を摸見する者は曰く、象は杵の如しと、耳を摸見する者は曰く、象は箕の如しと、腹を摸見する者は曰く、象は鬻の如しと、尾を摸見する者は曰く、象は箒の如しと。有る底は曾て摸見せず、千里萬里の外に在つて、却つて茅聚影子を指して、説いて道ふ我れ亦象を見ると。虚しく神用を勞して只だ妄想を添ふ。苦なる哉苦なる哉、是の

①答者語。切に忌む耳前に掛牌すること。
②蠟人。前輯、委はしく解す。

如きの參禪、何の所益か有らん。或は箇の漢有りて出で來つて道はん、和尚如何なるか是れ全象と。慕に主丈を拈じて云く、「蝦麻老鼠蚊蟲、螞蟥、爾甚の七十三八十四を曉らん。我れ二十年出世、曾て人の與に過話せず。」拄杖を拈じて、一時に挿し散す。復た擧す、大寧の寛和尚、僧有り、問ふ、「如何なるか是れ露地の白牛。」寧、火筋を以て火を爐中に挿んで曰く、「會すや。」僧云く、「不會。」寧曰く、「頭欠けず尾剩らず。」師拈じて云く、「富と貴きとは是れ人の欲する所、貧と賤とは是れ人の惡む所。其の道を以て之れを得ざれば處らず、其の道を以て之れを得ざれば去らざるなり。」

①蠟。蜜燭たり。
②七十三八十四。三八九を明めすんば。
③一時挿散。ここで長を考へ短を數ふ。
④大寧。五祖下なり。
⑤破塊。愚痴邪見の者。空谷は八識無記の暗窟。
⑥飛蛾。虚論不實の輩。
⑦松直。そのままが眞理じや。
⑧摘楊花。昔は花見、今は送葬。

上堂、「朝碌碌、暮碌碌、破塊空谷に落ち、飛蛾明燭に赴く。或時は東南、或時は西北、寂たり寥たり、鶴は白く鳥は玄し、寛たり廓たり、松は直く棘は曲れり。」卓拄杖して下座。
中秋上堂、馬祖翫月の公案を擧して云く、「馬師父子琵琶を弄す、西江の月色を奈何ともすること無し。更に聽く江南玉笛を吹くことを。水流限り無く月尤も多し。」復た大衆を召して云く、「瞎禿子、參。」
上堂、「西天の胡子髭鬚を沒す、楚鷄は是れ丹山の鳳にあらず。會するときは則ち塵毛刹海、會せざるときは則ち當處芽を生ず。」摘楊華、摘楊華、摘楊華。「卓拄杖して云く、「釣絲水を絞り、熨斗茶を煎す。」

開爐上堂、孤迥迥、峭嶮嶮、堂下草深きこと一丈、灼然として到る者は方に知る、霜空しく月冷に、露白く星稀なることを。釣魚船上の客、手を携へて同じく歸らず。

達磨忌上堂、「霜大野に飛び、黄葉窮邊す。大法所傳、天に私蓋無し。二千年の事、病今朝に在り。」大衆を顧視して、良久して云く、「師恩に報いんと欲せば、悟を以て則と爲よ。」

上堂、「法身に三種の病二種の光有り、一一透得せば、爾に許す歸家穩坐。」

大衆を召して云く、「黄葉と赤葉と齊しく飛び、萬木と崖石と俱に露る。無學老漢一場の 出醜、爾等諸人作麼生か我が與に相見せん。」良久して、

卓拄杖して云く、「仁義は盡く貧處從り斷ゆ、世情は多く有錢の家に向ふ。」

事に因つて上堂、「今日は笑ひ昨日は哭す、悲喜相凌ぎ自ら翻し自ら覆ふ、傾け出す摩尼十萬斛、何ぞ似かん本和三獻の玉。」良久して、卓拄杖して云く、「一枝鶴鶴に付し、萬里鴻鵠に付す。」

越州太守の夫人、釋迦の像、楞嚴經を慶讚せんことを請ふ陸座。「我が佛釋迦世尊、無住法の中從り、無量劫來從り、無功用の行を修し、無邊の刹土に遍し、無量の衆生を度す。三身借にあらず、十號彰に非ず、大千沙界一毫端、衆生を度し盡して度する所無し。三祇遠きに非ず萬徳功に非ず。兜率陀天より降し、雪山の苦行を示す。玉毫宛轉して彼の幽冥を破す。金輪を擲棄して三界を統禦す。五

①黄葉。有利無利。
②病在今朝。藥病相治す、盡大地是れ藥、那箇か是れ無病の人。
③萬木。精金と瓦礫と價を交へて。
④出醜。見ぐるしい蟲子。

天竺國室羅筏城、大經卷を示して量太虚に等し。纔に口を開く時。「拂子を拈起して云く、「便ち這の一點著子を露出す、其の他の諸經百匝千重、線索を露さず脚跡を露さず、大陣を越ゆるが如く、只だ是れ點過す。會する者は點點として自知す、不會なる者は任地あれ不會なることを。唯だ是れ楞嚴一會、毫

を分ち釐を刮く。八還辨見、七處徵心、貴ぶらくは阿難便ち門に入ることを得と。兜羅綿の手、百寶光を放つて阿難の肩を射る、阿難左右顧視して、清淨大海を將つて攪いて一鼎の沸湯と作すが如し。急索に頭を回せども、早く已に十方路無し。諸の 玄辨を窮むとも、一絲機前に掛けず、塵毛刹海了に踪無し。四聖六凡俱に踪を絶す、他の絃管を借りて我れを詔

華に醉はしむ。萬劫空しく傳ふ般若の名、一句留めす 元字脚。文殊説に圓通を揀ぶ、觀音舌頭地に拖く。楞嚴の一會即ち今に在り、草木叢林更に異説無し。機智盡き路頭絶す、面皮翻轉來由没し。十方世界一團の鐵、泥牛昨夜西風に吼ゆ、火裏の烏龜頭に雪を戴く。卓拄杖して云く、「華は放

く優曇劫外の春、珊瑚枝枝月を撐著す。」復た云く、「我が大唐の儒家、佛を信せざる者有り。十二部經を以て 漫預にして統緒有ること無しと爲す。秀才家乍ち諸經を看ること、樵夫の乍ち大海に入るが如く、心目俱に眩し

①八還。楞嚴經にあり、還は元

に還へすことなり、乃ち一には明は日輪に還し、二には暗は黒月に還し、三には通は戸牖に還し、四には牆壁に還し、五には縁は分別に還し、六には頤虚は空に還し、七には蔭埵は塵に還し、八には清明は露に還すこと。

②七處。同上にあり、徵詰心理なり。乃ち一には内に在り、二には外に在り、三には根に潜む、四には見内、五には隨合、六には中間、七には無著。

③玄辨。無礙。
④元字脚。一の字の義、元の字の脚は乙の字にして、乙の字

國譯佛光圓滿常照國師語 卷三 一六五

て 東西南北方向を知らず、千箇に九百九箇有り、謗を興す。唯だ此の經を
看る者皆門に入ることを得、皆本法を悟り皆信向することを知ら、方に如
來の徹の處を知る。此の經を見るの晩きことを恨む者有り。蓋し此の經
は、破相顯理、指意尅的 一句兩句、白石蜜の中邊皆甜きが如く、雪山の
草寸寸是れ藥なるが如し。奇なる哉不可思議也。方秋崖は宋の名儒なり。
因に儒家佛を謗るを見て、書を作つて云く、「楞伽圓覺の兩書は、佛の兵將
也、佛の 十馬也、佛の城郭也。若し彼を破らんと欲せんに、吾が儒中此
の如き士馬城郭有りや。若し彼を破らんと欲せば、須らく當に堅甲利兵な
るべし、亦當に彼の圓覺楞嚴二書の如くなるべし、方に之れと立敵すべし。
若し此れ無くんば輕しく釋教を議すべからず。吁此の經は、帝釋 髻中の珠
の如く、能く一切の衆毒を消し、能く一切の魔事を降す。」 禪和家做工夫、
受用を得ざれば、十二時中 山を鑿ち路を討ぬ。正に世尊の門を開き門を閉ぢて阿難を走ふが如く、
狂猿意馬、 萬仞崖頭に到つて、手脚を著くる處無し。一蹠し起き來つて賊に和して款を納れて、却つ
て道ふ我れ今覓むる者は即ち是れ我が心と。釋迦老子、阿難が這裏に死在することを恐れて、咄して
云く、「此れ汝が心に非ず。阿難巽然として席を避けて云く、「此れ若し我が心に非ざれば、心口即ち龜

- ① 漫頂。渺茫として際限のなきこと、漫漫汗汗などなり。
- ② 士馬。謀士猛臣、汗血の名馬。
- ③ 禪和家。今時の禪和家。
- ④ 未得自在。六種の障礙、八種の自在。
- ⑤ 鑿山。多年地を掘つて青天を覓む。
- ⑥ 到萬仞。伎盡き窮まるに到る。

毛兎角に同じ」と。阿呵呵。釋迦老漢、盡く三千大千世界を將つて捏つて一塵と作して、阿難に付
與す。阿難 肯て承當せず。咄。謗法すること莫れ。「卓拄杖。復た偈を説いて云く、「一念情消す曠劫
の前、塵網を密開して塵縁を透る。十方佛土 遮礙無し、百寶光中寶蓮に坐す。」
首座を謝する上堂。二十四路 三十七著、壇を築き將を拜して、妙 機
先に在り、恁麼に悟り去らば便ち見ん、諸侯の玉帛奔走して 雷の如きこ
とを。「良久して云く、「海晏河清、也た誰か 東封書を上らん。」卓拄杖して
云く、「普。」

冬至小參。萬仞崖頭の一步子、自古自今踏得著する者、千中一人無し。
但だ千中一人無きのに非ず、亦乃ち萬中一箇無し。老僧尋常諸人と火爐
邊の説話、曾て取次に相瞞せず。蓋し江北と江南とに縁る。今日知らず明
日の事、 高高低低、冷冷落落。寒梅一點孤芳を破る、無影枝頭香馥郁。
斷橋の流水人の扶くる没し、孤客暖 回る十里の足。阿呵呵。懶に向つて
道はん、拄杖曾て諸人に孤負せずと。「拄杖を擲下す。復た擧す、陸亘大夫、
南泉に問ふ、「肇法師也た奇怪なり、道ふことを解す天地と我れと同根、萬
物と我れと一體。」泉、大夫を召して云く、「時の人此の一株華を見て夢の如くに相似たり。」師云く、「陸

- ① 付與阿難。二龍の珠を争ふが如し、爪牙あるものは得ず。
- ② 不肯承當。千尋の末を看るものは其の眼を顧す。
- ③ 無遮礙。圓通無碍門。
- ④ 三十七著。三十七助道品。
- ⑤ 機先。背水の陣の如し。
- ⑥ 如雷。凱歌を奏す。
- ⑦ 東封書。勝軍の書なり。
- ⑧ 普。普く十方に現す。
- ⑨ 高。高は山、低は海、冷は雪、落は松。
- ⑩ 回十里足。臨濟は行くこと數里にして此の事を疑ふて却回した。

亘大夫、天地を舒卷するの手有りとも、争奈せん牡丹華下に活葬せらるることを。南泉聲色の外に透出すれども、奈ともすること無し、人に劍を按せらるることを。

臈八上堂、拄杖を拈じて云く、「老瞿曇爾來るや、三日相見せざれば、舊時の看を作すこと莫れ。我れ爾に問ふ、正覺山前悟道の後、却つて道ふ我れ大地の衆生を觀るに、如來の智慧徳相を具有す。但だ妄想を以て證入すること能はず、衆生の妄想豈に是れ如來の智慧徳相にあらずや。若し此の妄想を去つて、別に智慧を求め別に證入を求めば、宛然として生滅斷見す。試に一轉語を下せ見ん。速に道へ速に道へ。」良久して云く、「將に謂へり茅の長短と、元來地の不平。」

臈八拈香、三祇路遠く、萬徳功沈み、六年冷坐、海底に針を摸る。我が手、臂を借つて香を拈じ、爾が鼻孔を借りて氣を出す。瞎驢滅却す正法眼、灼然として受けず當來の記。

上堂、明明たり百草頭、明明たり祖師意。九曲の、黄河徹底清し、雲劍閣を遮る三千里。若し也た悟り去らば、且く林下に歸つて看よ。若し悟り去らずんば、更に月明の時を待て。卓拄杖して下座。陰夜小參、僧問ふ、「記得す、金牛因に臨濟來る、乃ち拄杖を方丈前に横ふ。濟見て遂に掌を拈つこと三下して歸堂す。」師云く、「賊哨家を打す。」進んで云く、「牛却つて下り去り、人事して便ち問ふ、「賓

- ①三祇。三生なり。
- ②萬徳。三千の威儀。
- ③海底。暗中に雙陸を投す。
- ④黄河。黄河三千年に一度清むといふ。

主相見は各執儀有り、上座何ぞ無禮なることを得たる。『意何にか在る。』師云く、「若し價を酬いざれば争か眞價を辨せん。』進んで云く、「濟云く、「甚麼と道ふぞ、牛口を開かんと擬す。』濟便ち打つこと一坐具。牛倒るる勢を作す、此の意又作麼生。』師云く、「囊砂背水に如かず。』進んで云く、「濟又打つこと一坐具。牛云く、「今日便を著けず。』乃ち方丈に歸る。響。』師云く、「將に謂へり響蛇を呑むと、却つて是れ蛇響を呑む。』進んで云く、「只だ和尚拈じて云ふが如きんば、金牛只だ舞を作すを解す、也た陷虎の機有り。節文何れの處にか落在す。』師云く、「老來牙齒風を關せず。』僧禮拜す。

師乃ち云く、「有る時一句を道へば、也た權有り也た實有り、有る時一句を道へば、也た權無く也た實無し。是れ汝等諸人作麼生か與に相見せん。所以に道ふ、歳盡き年窮る、帽籠を賣却す。年窮り歳盡きて、飯飯を換却す。五歩に一び眉を皺め、十歩に一彈指す。小室、千年の人未だ歸らず、

- ①老來。少よりして出家し、今六十。
- ②千年人未歸。眞風を挽回する人がない。
- ③妙喜。妙喜世界なり。

晚伯臺前流水を看る。止不止、擬不擬、老龐の活計湘江に付し、摩詰計窮つて、妙喜を搏つ。且く道へ、甚に因つてか此の如くなる。貧賤に素しては貧賤に行ひ、富貴に素しては富貴に行ふ。』復た即心即佛の公案を舉し、拈じて云く、「綠樹鶯啼春遲し、去等時節正に芳菲。山雲海月新色を添ふ、嬌郎に付與して濶く眉を打つ。』拄杖を擡げて下座。

上堂、僧問ふ、「記得否、僧、長沙に問うて云く、「如何が山河大地を轉得して自己と爲し去らん。」沙云く、「如何が自己を轉得して山河大地と爲し去らん。」此の意如何。」師云く、「隨。」進んで云く、「僧不會。」沙云く、「湖南城裏好し尺を養ふに。」此の意又作麼生。」師云く、「汝禮拜せずんば更に何れの時をか待たん。」僧乃ち禮謝して退く。復た僧有り、問ふ、「記得す、僧、慈明に問ふ、「大衆已に座側に臨む、西來の祖意事如何。」明云く、「月上つて松影を移し、雲行いて山自ら迎ふ。」此の意如何。」師云く、「頭大尾小。」進んで云く、「學人今朝和尚に請益す、如何なるか是れ祖師西來意。」師云く、「我れは是れ慈明九世の孫。」僧禮拜す。師乃ち拄杖を拈じて云く、「但だ一を得ば萬事畢る、牛千頭を進め、馬百疋を進む。忽ち箇の漢有りて出て來つて道はん、既に是れ長老甚に因つてか許多の畜生を愛すと。他に向つて道はん、急行馬に騎り、緩行牛に騎ると。」卓拄杖。

①牛。朝なり、馬は暮なり。
 ②第一爻。一陽來復。
 ③金鳳。滿材を適處におく。
 ④摘楊花。こゝで天神は天に歸り、地神は地に歸る。

上堂、普天匝地凍雲交る、九九陽生す。第一爻。十二の曲闌屏半ば掩ふ、且く見る。金鳳龍巢に宿することぞ。

上元上堂、「祖師の巴鼻、衲僧の巴鼻、須彌山大海水、地獄天堂、畜生餓鬼、馬載驢駝、魚腮鳥背。」藁に拄杖を拈じて、卓一下して云く、「摘楊華、摘楊華、我見燈明佛、本光瑞如此。」二月朔上堂、一月去り了つて又一月、杏華開いて後梨華開く。只だ事の眼前を逐つて過ぐることを

知つて、覺えず。老の頭上より來ることを。四句を離れ百非を絶し、誰か餘り有り誰か足らざる。閑錢を把つて箴籬を補ふこと莫れ、風光只だ闌干の曲に在り。

上堂、聖福寺裏西海岸邊、吾れに一句有り、汝が邊に落在す。昨朝汝に問ふ、擧すること。未だ完全ならず、若し渾崙萬象を包むことを要せば、直に須らく一度眼皮穿つべし。佛涅槃上堂、雲は綻ぶ家家の月、春は行く處處の華。髮曇失錢遺罪、福山死蛇を賣弄す。大衆見るや、動著することを得ざれ、動著せば爾が骨

①老從頭上來。争か建長をして重ねて少壯ならしめん。
 ②聖福寺。筑前博多にあり、開山は千光榮四、日本最初の禪窟。
 ③未完全。全く露すことを要せず。
 ④骨。絶は管なり、骨の管なり、或は人を罵るの語。
 ⑤覺山大師。時宗公の夫人なり。

法光寺殿第三年忌、「覺山大師自ら華嚴大經を書して、陸座を請ふ。毘盧藏海性覺寶王、無起無滅、無終無始。一塵を立せず、法界に周遍す、一物に倚せず、十方を合攝す。湛湛として虛明獨耀、澄澄として海印光を發す。東西南北遮欄を沒す。明暗色空俱に不著、千靈跡を絶す、萬化根を同じうす。之を迎ふるに其の形を見ず、之に背いて其の跡に迷はず。千日も其の明に比すべからず、衆寶も其の色を奪ふべからず。全く象外に超え、獨り無雙に拔す。此れは是れ衆生の覺地、亦如來の法身と名く。天地も此れに依つて建立し、日月も此れに依つて照臨し、星宿も此れに依つて轉運し、雷霆も此れに依つて發聲し、十地の菩薩も此れに依つて種智を圓滿し、四果の聲聞

も此れに依つて大乘を策發し、山川も此れに依つて負載し、草木も此れに依つて敷榮し、江海も此れに依つて流注し、六道も此れに依つて往來し、鬼神も此れに依つて變化し、鳥獸も此れに依つて飛騰す。大なる戡性覺斯の如く廣大、斯の如く雄猛にして、重重無盡、無盡重重、十方の諸佛之を宣べ盡さず、四果四向、啞の如く聲の若し。此れは是れ毘盧遮那の體、十方國土に普遍し、一切衆生を調伏し、諸塵勞に入つて方便善巧して、法性本來空寂なり。只だ覺山上人一年周からず、華嚴妙典八十一卷を書寫して、法光寺殿に報薦するが如きんば、功何れの處にか歸す。轉身の一步方便を超ゆ、果園林に滿つ劫外の春。復た云く、「人生百歲、七十の者稀なり。法光寺殿齒四十に滿たず、功業を成就すること、却つて七十歳の人の上に在り、看よ他、國を治め天下を平定することを。喜怒の色有ることを見ず、矜誇街耀の氣象有ることを見ず。此れ天下の人傑なること也た自如たり。弘安四年虜兵百萬、博多在れども、略經意せず、但だ毎月老僧を請じて、諸僧と與に下語し、法喜禪悅を以て自ら樂む。後果して佛天響のごとく應じて家國 貼然たり。奇なる哉此の力量有ること、此れ亦佛法中再來の人なり。佛説きたまふ、菩薩人、梵行を進修すれば、復た菩薩有つて、或は妻子眷屬と爲り、種々菩薩の諸の梵行を修するを成就して、其れをして圓滿ならしむ。今日覺山上人、法光寺殿

- ①宣。説なり。
- ②轉身。竿頭の一步に始めて穩坐地を得る。
- ③弘安四年。元寇の役、この條史料として大いに注目すべし毎月老僧を請じて云云の語あり。
- ④貼然。貼は黏と通す、「ればりつく」「ればし」など、安全の意か。

と曠劫以前、毘盧遮那會中、誓願 深重にして、生を人間に示し、王臣と作ることを示し、夫婦と作ることを示し、權貴と作ることを示し、生死の爲にすることを示し、虚幻の爲にすることを示し、悲悼を爲すことを示し、大勇猛を發して此の大經を書す。人の行じ難き所を行じて、天下の人をして感動し、菩提心を發して、阿耨多羅三藐三菩提を成就せしむ。奇なる哉、讚すれども能く盡すこと莫し。伏して願はくは、法光寺殿一靈不昧、十地頓に超え、子孫を庇祐して、永く吉慶を隆んにせんことを。復た偈を説いて云く、「毘盧大經、太虚に等し。只だ衆生心識の裏に在り、衆生迷背して自ら覺えず、一微塵を破つて齊しく顯現す。四大海水渺として無邊、上人一滴の墨に抵らず、盡大地の土量るべからず、上人の點墨勝ること千倍。十地の菩薩大心を發す、河沙の聲聞比すべきに非ず。速に菩提行願海を證すること、盡く上人筆端上に在り。一洗す思愛淨幻の塵、回つて洗者を看ば亦是れ幻。水月光中此の身を了せば、金剛三昧 悉く圓滿。」

- ①一掌血。泥牛一點の血。
- ②屈風。不自由ないふ、「かがまゐる」の意。

佛鑑禪師忌日拈香、「師の禪我れ參すること得ず、師の道我れ學ぶこと得ず、師の峻機我れ湊泊すること得ず。良久して胸を撃つて云く、「一棒一條の痕、一擱 一掌の血。一度思量して一度愁ひ、一回水を飲んで一回噎ぶ。今朝遠忌斯に臨む、畢竟何を將つてか爲に報せん。」香を拈起して云く、「此の一瓣の兜樓を熱いて、也た甜きこと有り、也た苦きこと有り、也た恩有り、也た怨有り。屈屈。先師の靈骨只だ是れ須ひ

す、重ねて蒼龍窟に入ることを。」

四月朔上堂、「休し去り歇し去り、一條の白練にし去り、古廟香爐にし去り、冷湫湫地にし去る。彩鳳丹山に出づ、鐵蛇古渡に横ふ。昨日は風、今日は雨。」卓拄杖して云く、「百尺の竿頭、更に一步を進めよ。」

佛生 日上堂、天宮を離る、錯、閻浮に下る、錯、才に母胎を出でて、却つて道ふ天上天下唯我獨尊と。錯、錯、禹九州を別つに此の一錯無し、二鐵圍山、此の錯を鑄難し、錯錯眞箇の錯、常の錯に非ず。錯、錯、惡水鷲頭に澆ぐこと一杓、知らず誰か楊州の鶴に跨る。

結夏小參、僧問ふ、「記得す、良遂初め麻谷に參す、谷、來るを見て便ち

鋤を荷つて菌に入る、此の意如何。」師云く、「坐久成勞。」師云く、「良、菌に至る、谷、驟歩して方丈に歸りて門を閉却す、又作麼生。」師云く、「家貧にして客を接し難し。」僧云く、「明日、良、門を敲く、谷云く、「誰ぞ、」遂

① 更進一步。好手還つて火裏蓮に同じ。
② 好一問。引き得て禪床を下る。

名を稱して忽然として大悟す。且く道へ、箇の甚麼の消息をか得たる。」師云く、「并州は是れ故郷にあらず。」僧云く、「今日學人入處無しと雖も、也た和尚と相見せんことを要す。」師云く、「子が遠來を謝す。」僧云く、「柳毅が信に因らずんば、争か洞庭湖に到らん。」師云く、「月、五を破らす。」復た僧有り、問ふ、「宗乘の一唱三藏、詮を絶す、祖令當行十方坐斷、如何なるか是れ福山の巴鼻。」師云く、「也た

好一問。「僧云く、「記得す、僧、白雲和尚に問うて云く、「人天交接、兩得相見、如何なるか是れ相見底の事。」端云く、「争か敢て相瞞せん。」此の意如何。」師云く、「師翁語拙なり。」僧云く、「久しく沙塞の苦を経て、今日良知に遇ふ。」端云く、「爾が脚跟下の事作麼生。」又且つ如何。」師云く、「又是れ從頭起る。」僧云く、「衆水孤月を含む、群星北辰に拱す。」端云く、「李白依前として是れ秀才、」意何くにか在る。」師云く、「鐘を喚んで響と作す。」僧云く、「九江千里の内、草木恩に霑ふ。」端云く、「衲僧を笑殺す」と、是れ什麼の道理ぞ。」師云く、「知らば即ち得ん。」僧云く、「坐具を將つて一拂して便ち行く。」端云く、「越國に依倚として、楊州に髣髴たり、節文何れの處にか在る」と。」師云く、「彼此便宜を失す。」僧云く、「學人今夜、和尚に請益す、如何なるか是れ相見底の事。」師云く、「孟夏漸く熱す、汝時を知る可し。」僧禮拜す。師乃ち云く、「佛滅二千年、比丘慚愧少し。箇箇圓覺伽藍と説き、人人平等性智と道ふ。大いに梅林を望んで渴を止むるに似たり。福山長處無しと雖も、諸人をして古人の脚跡を踏ましめず、只だ要す汝一寸を得て一寸を破り、一尺を得て一尺を破らんことを。鄭旗、張旗を推倒し、東壁、西壁を打翻す。霧に主丈を拈じて云く、「有功無功、腹空ならしむること莫し、蛇驚鼻を呑む、虎大蟲を咬む、會すや。」卓主丈一下して云く、「髮は今日従り白く、華は去年の紅に似たり。」復た擧す、雪峰、衆に示して云く、「望州亭欄と相見了也、烏石嶺欄と相見了也、僧堂前

● 彼此。越國や楊州の船だより。
● 梅林止渴。魏の曹操の故事。或時魏軍大いに渴す、曹操曰く、「先方に梅子あり」と、士卒皆渴を忘れたりと。

欄と相見了也。保福、鵝湖に舉似す、鵝湖跡歩して方丈に歸る、保福低頭して僧堂に入る。師頷して云く、「望州烏石と僧堂と、父子柳を擔つて鐵床に上る。若し福山門下を打ち過さば、更に須らく足を別つて了に賊を追ふべし。福山與麼の檢點、古人還つて過有りや也た無や。」

結制上堂、僧問ふ、「記得す、僧、芙蓉楮和尚に問うて云く、「夜半正明、天曉不露の時如何。」楷云く、「滿船空しく月を載せ、漁父蘆華に宿す、此の意如何。」師云く、「身を隠すに地無し。」僧云く、「今時に落ちざるの句、妙、未聞の前に在り。」楷云く、「鐵狗吠開す巖上の月、泥牛觸散す嶺頭の雲、又且つ如何。」師云く、「再犯容さず。」復た僧有り、問うて云く、「月未だ圓ならざる時如何。」師云く、「箇。」僧云く、「月圓なるの後又作麼生。」師云く、「收。」僧云く、「投子道く、「三箇四箇を吞却し、七箇八箇を吐却す、」意何くにか有る。」師云く、「關。」僧云く、「吞却を除却する外、還つて學人が箇の消息を通することを許さんや也た無や。」師云く、「月、響。」師乃ち云く、「一夏九十日、諸人意馬狂象、東觸西觸、如何が調伏せん。老僧一方便有り、鐵關五重を設く。汝等關を逐ふて透過せんことを要せば、方には是れ行脚の士。」拂子を撃つて下座。

④夜半正明。正偏互の當體、夜半不露は正位なり、天曉は偏位なり。

頭首兼拂を謝する上堂、「四句を離れ兮百非を絶す、珊瑚紅照す碧琉璃。樓臺日暖にして楊華舞ひ、簾幕風清うして燕子飛ぶ。」卓主丈して下座。

上堂、窮も五貫に過ぎず、富も五貫に過ぎず。山僧方丈従り法堂前に下り、法堂より木棚頂に上る。一步歩敢て汝等を 悞賺せず。然も老邁 龍鍾として歎有り反有り、緩有り慢有りと雖も、諸人且く怪笑すること莫れ。「卓主丈して下座。」

端午上堂、「吾れに一顆の大 還丹有り、無量劫來覓むること即ち難し、便ち能く此の如く吞得下せば、萬重生死の關を透出せん。」卓主丈。上堂、「是れ過現未來、過現未來に非ず、大海を攪いて酥酪と作す、須彌を吹いて塵埃と作す。」大衆を召して云く、「會すや、東行謾に説く西行の利、徳雲下らす妙高臺。」拂子を撃つて下座。

中夏上堂、無量劫來の頑惡牛、一般の頭角實に收め難し。諸人等しく是れ功力を施す、收取すとも收め難し這の 一頭。此の牛獲得すれば始めて奇なる哉、鐵壁銀山 盡く觸開す。更に無學が玄玄路に參せば、別に 薊蕪有りて汝が來るを待つ。上堂、僧問ふ、「一夏將に盡さんとす、此の事猶は未だ明めず。」師云く、「是れ誰が咎ぞ。」進んで云く、「忽然として明めて後如何。」師云く、「著衣喫飯。」進んで云く、「如何なるか是れ函蓋乾坤の句。」師云く、「截斷衆流。」進んで云く、「如何なるか是れ截斷衆流の句。」師云く、「函蓋乾坤。」進んで云く、「如何なるか是れ隨波逐浪の句。」師云く、「自ら去つて參せよ。」進んで云く、「此の三句の外請ふ師道へ。」師云く、

①悞賺。あやまりたまさるるなり。
②龍鍾。老病のこと、又涙を垂るることに用ふ。
③還丹。神仙秘密の妙薬。
④薊蕪。薊は香に同じ。

「曾て汝に辜負せず。」師乃ち云く、「萬仞崖頭の句、水に入り泥に入るの句、恁麼に一踏に踏透せば、便ち見ん三世の諸佛、六代の祖師、異口同音、廣長舌を出すことを。福山、響。」良久して云く、「只だ一概を得たり。」

雷雨に因つて上堂、法雷を震ひ法鼓を撃つ。慈雲を布き兮甘露を洒ぐ。諸人に報ず打して徹せしめよ。雲は是れ龍、王身上の衣、雨は是れ龍、王身上の血。

解夏小參、僧問ふ、「記得す、阿育王、寶頭盧尊者に問うて云く、「承り聞く、尊者親しく佛に見え來ると、是なりや否や。」尊者、眉毛を策起す、意作麼生。」師云く、「面皮厚きこと三寸。」進んで云く、「王措くこと罔し、響。」師云く、「爭か他を怪み得ん。」進んで云く、「尊者云く、「阿耨達池の龍王、佛を請じて齋す、老僧も亦其の數に預る、此の意又且つ如何。」師云く、「何ぞ早く與麼に道はざる。」進んで云く、「只だ和尚の如き、正法を傳持すること已に是れ五十五傳なり、傳持底の事甚麼の處にか在る。」師云く、「進んで云く、「與麼ならば則ち正宗、滅在す瞎驢邊、盡大地の人扶け起さず。」師云く、「三十の烏藤、汝が大膽を賞す。」僧禮拜す。復た僧有り、問ふ、「一把の香芻拈するに未だ暇あらず、六環の金錫遙空に響く。學人上來願はくは提唱を聞かん。」師云く、「脚下を看よ。」進んで云く、「大火西に流れ、涼風野に入る時如何。」師云く、「切に思む、他に隨ひ去ることを。」進んで云く、「與麼ならば則ち珊瑚树枝月を撐著す。」師云く、「月、響。」進んで云く、「記得す、仰山、東寺に參す、寺云く、「已に相見了也、上來

を用ひす、此の意如何。」師云く、「相見の事作麼生。」進んで云く、「仰云く、「恁麼の相見當らざることを莫しや。」寺便ち方丈に歸りて門を閉却す。又且つ作麼生。」師云く、「彼此便宜を失す。」進んで云く、「仰山、瀉山に舉似す、瀉云く、「寂子はれ甚人の心行ぞ。」仰云く、「若し恁麼ならずば、爭か伊を識得せん。」還つて端的なりや也た無や。」師云く、「外面失利、屋裏拔本。」進んで云く、「和尚拈じて云く、「東寺の險は何ぞ瀉山の險に似かん。」意那裏にか在る。」師云く、「老僧が罪過。」進んで云く、「一夏已に過ぎ蠟人眼開く、親切の一句請ふ師指示せよ。」師云く、「嗚咄嗚咄。」進んで云く、「夜來の雁に因らずんば、爭か海門の秋を見ん。」師云く、「未だ敢て相許さず。」師乃ち云く、「太虚に劍を掛く、水洩れども通せず、鞭影纒に分つて青天撲落す。恁麼恁麼、不恁麼不恁麼、九十日の中、只だ要す諸人一箇半箇有り、獨脚寮子を透過し、五重の鐵關を打開して、萬仞崖頭に向つて哮吼一聲せんことを。這箇便ち是れ生獅子兒、喚んで銅頭鐵額の漢と作す。我れ甘つて人無き處に向つて研額して汝を望まん、甚に因つてか此の如くなる。探石渡頭山錦に似たり、藤王閣上水天の如し。」復た擧す。雪峯上堂に云く、「此の事を會せんと要せば、古鏡臺に當つて、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現するが如し。」玄沙云く、「明鏡來る時如何。」峯云く、「胡漢俱に隠る。」沙云く、「這の老漢脚跟未だ地に點せざること有り。」師拈じて云く、「會郎は古鏡裏に向つて身を藏す、謝郎は明鏡外に向つて手を出す。父に迷子の訣有り、子に打爺の拳有り。然りと雖も、福山を見んと要せば、

藤王。藤王の誤か。

猶は關を隔つること有り。」

解夏上堂、僧問ふ、「秋風纔に動じ、布袋頭開く。去る者は自ら去り、來る者は自ら來る。正與麼の時願はくは提唱を聞かん。」師云く、「夜行踏白すること莫れ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち門を出でて唯だ恐る先づ到らざるを。」路に當つて誰有つてか長く來るを待たん。只だ心空及第して歸る底の人の如きんば、如何が他を接せん。」師云く、「汝不才に非ず、老僧年邁。」進んで云く、「先聖云く、「一言纔に擧ぐれば千車同軌、微塵を該括するも猶ほ是れ化門の説。」是れ甚麼の道理ぞ。」師云く、「石上蓮を栽えず。」進んで云く、「記得す、翠巖夏末、衆に示して云く、「一夏以來兄弟の爲に説話す、看よ翠巖が眉毛在りや、此の意如何。」師云く、「僞を作せば心勞して日に拙し。」進んで云く、「保福云く、「賊と作る人心虚る、長慶云く、「生也、雲門云く、「關、又且つ如何。」師云く、「關東紙貴し、一狀に領過せん。」進んで云く、「這の四尊宿恁麼に道ふ、畢竟譎訛甚麼の處にか在る。」師云く、「長者は自ら長、短者は自ら短。」進んで云く、「和尚今夏、兄弟の爲に説話す、幾莖の眉毛を添へ得たる。」師云く、「向に道ふ、山下の道を行くこと莫れ、果然として猿叫ぶ斷腸の聲。」進んで云く、「還つて學人が攀展を許さんや也た無や。」師云く、「牛無ければ馬を使ふ。」進んで云く、「千山萬水雲を穿ち去る、撥草瞻風帽を裏んで歸る。」師云く、「三十年後、此の話大に行れん。」次で僧有り、問ふ、「懸泉千尺 龍 湫に

①當路。碑文、白字を鐫る。
②石上。水を借つて花を獻ぜず。
③一狀。一卷に綴りてなり。
④裳帽歸。帽子を落した所で頭を拾ふて行く。

瀉ぐ、一葉肅肅たり萬水の秋。坐して孤雲を看行月を看る、更に佛法の心頭に掛くる無し。」師云く、「汝が境界に非ず。」進んで云く、「四月十五日結、上下四位一團の鐵、七月十五日解、百川到流聞語話。正恁麼の時、請ふ師祝聖。」師云く、「萬年松は祝融峯に在り。」進んで云く、「記得す、趙州、臨濟を訪ふ、州纔に脚を洗ふ、濟便ち下來して問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「正に老僧が洗脚に値ふ、此の意如何。」師云く、「須らく是れ趙州にして始めて得べし。」進んで云く、「濟則ち近前して側ち聽く、州云く、「會せば則便ち會せよ、啗啄して作麼かせん。」又作麼生。」師曰く、「猶ほ一著を缺く。」進んで云く、「濟拂袖して便ち行く、州云く、「三十年行脚、今日人の爲に錯つて注脚を下す、意何くにか在る。」師云く、「瓜州に瓜を買ふ漢。」進んで云く、「如何なるか是れ祖師西來意。」師云く、「祖師は汝が脚底に在り。」進んで云く、「如何なるか是れ三十年行脚の事。」師云く、「東風西水。」進んで云く、「與麼ならば則ち蘆華兩岸の雪、江水一天の秋。」師云く、「物を弄して名を知らず。」次に僧有り、問ふ、「記得す、龐居士、馬大師に問うて云く、「萬法と侶たらざるものは是れ甚麼人ぞ。」大師云く、「汝が一口に西江水を吸盡せんを待つて、即ち爾に向つて道はん、此の意如何。」師云く、「脚跟下好し三十棒を與ふるに。」進んで云く、「龐居士當下に大悟す、還つて諦當なりや也た無や。」師云く、「泥牛觸折す蒼龍角。」進んで云く、「土偶有り、云く、「十方同聚會、箇箇學無爲、此れは是れ選佛場、心空及第して歸る。」師還つて他を肯ふや也た無や。」師云く、「他を肯はず。」進んで

⑤猶缺一著。吾れに二十棒ありと。

云く、「一口に吸盡す西江水、豈に是れ馬大師の殺人刀にあらずや。師云く、「爾 胡説を要せざれ。進んで云く、「十方同聚會、箇箇學無爲、豈に是れ龐居士の活人劍にあらずや。師云く、「却つて些子に較れり。進んで云く、「今日和尚、他の古人を出でて某甲に指示せよ看ん。師云く、「殺人刀活人劍。復た僧有り、問ふ、「昨夜西風八極に生ず、今朝檀越山に入り來る。大衆筵に臨む、請ふ師提唱せよ。師云く、「老僧幾ど喫顛。進んで云く、「只だ風穴が云ふが如きんば、祖師の心印狀鐵牛の機に似たり、如何なるか是れ印。師云く、「天象定形無し。進んで云く、「恁麼ならば即ち八面の清風藏すこと得ず、一輪皎潔として今朝に在り。師云く、「是れ這箇の道理にあらず。進んで云く、「如何なるか是れ鐵牛の機。師云く、「動著すれば即ち失す。進んで云く、「風穴又云く、「去は即ち印住し、住は即ち印破す、意作麼生。師云く、「湘南潭北。進んで云く、「今日福山門下、法歲已に周し、功行已に圓なり。未審し和尚、如何が此の印を分付せん。師云く、「五五二十五。僧禮拜す。師乃ち云く、「向上の一著、清涼大池の如し、菩薩之を見るときは即ち寶明空海と爲す、諸天之を見るときは則ち琉璃宮殿と爲す、世人之を見るときは則ち 窟宅と爲す。箇の衲僧有つて出でて道はん、無漏の法、有漏の談を作爲す、魚龍之を見るときは則ち 窟宅と爲す。箇の衲僧有つて出でて道はん、無漏の法、有漏の談を作すべからず。只だ他に向つて道はん、若し此の話を明めんと要せば、更に參すること三生六十劫。」

- ① 胡説。亂道、二枚の舌。
- ② 動著。國王の苗稼を犯す。
- ③ 法歲。制解のことなり。
- ④ 水漿。しるみづ。
- ⑤ 窟宅。瑠璃の窟宅。

卓主丈して下座。

開山忌日拈香を請ふ、「寛たり曠たり、寂たり寥たり、是れ恩怨何れの處にか蹤を求めん。一甌香散す秋天の碧、滄海依然として浪空を拍つ。」香を挿む。

上堂、金井梧桐一葉飛ぶ、十方の諸佛眼眉の如し。些の巴鼻沒巴鼻有り、古道從來、遺を拾はず。

中秋上堂、「靈山には月を指し、曹溪には月を畫く。月を見て須らく指を忘るべし、口を開くことは舌に干るに非ず。別別、清冥の風露桂華を賜す、玉兔三更深雪に臥す。絶瀟洒、瀟洒絶、學翁出醜人の知る没し、只だ謝郎のみ有つて驚いて舌を吐く。」卓主丈して下座。

- ① 寂兮。烏黒く鷺白し、人の到るなし。
- ② 滄海。昔日の舟は此處より歸す。
- ③ 不捨遺。行く時は徑に依らず路に遺ちたるを拾はず。
- ④ 開口。餅を話したばかりでは腹に満たす。
- ⑤ 風露。天香桂子落ちて紛紛。

國譯佛光圓滿常照國師語錄卷三 終